スチューデントパワー

世界の"全学連"——その底流

STUDENT POWER

毎日新聞社

スチューデント・パワー

世界の〝全学連〟——その底流

毎日新聞社

毎日新聞社　¥ 370

スチューデントパワー

世界の〝全学連〟——その底流

STUDENT POWER

毎日新聞社

目次

世界に何をもたらすか

既成体制への挑戦

若者の無限の運動 (八)

〝疎外〟からの解放を求めて (一四)

過激化の根底にあるもの (九)

日本の新しい流れ

闘士の素顔

派閥抗争は爽快？ (二〇)

熱狂的なまでに主観的 (二三)

行動至上主義者が多い (二八)

無党派の党派性 (三三)

つましい生活設計 (三三)

マス・コミを気にする (三七)

ボー・グエン・ジャップとゲバラ (三〇)

ヘルメットの系譜

派閥をそのまま色分け (三六)

ヘルメット列伝 (四一)

〝いい子路線〟をゆく (四五)

分裂につぐ分裂 (三八)

各派各様の気質と行動 (四三)

独自の闘争を進めるグループ (四九)

ゲバルトの論理

あからさまに暴力を肯定 (五三)

正門突破戦術にもウラが (五三)

勝つためには手段を選ばない（五四）
甘ったれラジカリズム？（五七）
その台所
「一日五十円で闘う」（六〇）
かさむ保釈金（六四）
安保ＯＢ
闘士の変身ぶり（六六）
いまも指導者として残る（七一）
パワーの周辺
〝大人〟の反戦組織（七六）
右派学生の反発（八四）
ゆれる大学――自治の神話の崩壊
食い違うタカ派とハト派の見解（八八）
学生処分の強行論（九七）
国際連帯への道
既成秩序への挑戦（一〇二）
激動路線をさぐる（座談会）
「群衆」あるいは「市民」（一一〇）
七〇年はどうなるか（一一七）
〝ゲバ棒は最低の抵抗〟（五六）
案外集まる街頭資金カンパ（六三）
闘争予備軍の〝安保世代〟（六九）
〝安保を乗越えた〟意識（七三）
後につづく〝高校生〟（八一）
学生問題と大学の自治（九二）
まず、ともに行動を（一〇八）
ナショナリズムとハプニング（一一三）

欧米の旧体制を揺さぶる

〝五月革命〟の原動力――フランス
参加を求める学生たち（一二四）
赤毛のダニー登場（一三二）
ダニーの〝埋没の弁〟（一四〇）
病める社会への批判――アメリカ
ニュー・レフトの先駆者たち（一四四）
新鮮な息吹き……ＳＤＳ（一五四）
繁栄の中の反抗――西ドイツ
絶えざる革命を求めるＳＤＳ（一六二）
シュプリンガー攻撃の波（一七〇）
紳士の国に押し寄せる波――イギリス
逃避から闘争へ（一七六）
謝った自治会（一八三）
トリノの反乱――イタリア
大学を学生の手に（一九二）
学労一体の闘争へ（一九七）
自由を求める学生たち――スペイン
フランコ独裁への反抗（二〇〇）
〝警察力〟が反乱を誘発（一二九）
学生運動のアイドルは……（一三七）
エピローグ（一四三）
〝大学の偽善性〟をつく（一五二）
〝革命家ルーディ〟の誕生（一六五）
大義名分ふりかざす（一八〇）
動き始めたＮＵＳ（一八六）
学生の反感かったグイ法案（一九四）
弾圧に消えた騒動（二〇五）

われらに光を！――――――――東ヨーロッパ諸国
チェコ民主化運動の口火（三一〇）　ゴムルカ政権の屋台骨を揺する（三一三）
チトー大統領を謝罪させる（三一六）
反体制イコール新体制支持――――新興諸国
スカルノ追放と学生（三一八）　アラブ連合の学生運動（三二三）
体制内運動が多い新興国（三二七）
付表・年表
全学連ならびにトロツキスト組織系統図（八七）
フランス学生運動の諸組織（一四一）
＊
最近の反日共系全学連の街頭闘争一覧（巻末）
各派の指導理念と戦術（巻末）
学生自治会派閥一覧（巻末）
戦後の学生運動＝年表（巻末）

スチューデント・パワー

世界の〝全学連〟――その底流

「今日の世界は、戦闘準備をととのえた学生たちで充満しているようにみえる」

——ジョージ・F・ケナン『計画なき反乱』より

スチューデント・パワー

世界に何をもたらすか

既成体制への挑戦

若者の無限の運動

学生運動の異常な高まりと広がり、そして激しさが、東西ヨーロッパに、南北アメリカに、そして日本に波打っている。そうした波は、かつては韓国に、インドネシアその他の東南アジアに、あるいは中東の諸国に打寄せた。今後も、それがどこに、どのように襲っていくかはわからないし、また、一波のあとに二波、三波の来襲がないとは限らないだろう。現に、日本の場合でも、いわゆる六〇年安保以後の停滞期をへて、いま、七〇年問題との関連のなかで新たな高まりを加えてきているわけだし、「五月危機」の名で世界の注目をひいたフランスの場合にしてもそうだろう。六月下旬の総選挙の結果は、まさしく仏国民が「破壊と混乱」への道ではなく、「秩序と安定」への道を求めていることを示した。そして、その道の先導を改めてドゴールに託したわけだが、しかし、問題は、ドゴールがどこまでその委託にこたえうるかにかかっている。とりわけ、彼の「参加の社会」構想の具体化いかんによっては、学生運動の第二波、第三波の来襲がないとは限らない。しかも、学生の多くが、彼らにとって、いわば「土俵の外」で行なわれた選挙戦の結果に対して「それには拘束されない」とみる限り、なおさらのことであろう。同じようなことは、大統領選をかかえた米国についてもいえるだ

ろうし、チェコやポーランド、ユーゴなどの東欧、バルカンの共産圏にしても、おそらく例外ではあるまい。なぜなら、最近の学生運動の高まり、あるいは過激化の現象は、単に、それぞれの国の政治の傾向とか政策の問題から生じてきているより、むしろ、もっと底深い根から生じてきているように思える場合が多いからだ。学者や専門家は、それを「反体制」運動とか「人間疎外からの解放」運動とかいった言葉で説明しているが、単なる政策の問題の場合にしても、その急速な転換は容易なことではない。早い話が、日本の全学連が「アメリカ帝国主義」反対を叫び「対米追随外交」の転換を要求する点では、野党勢力を含めて一般国民の間にもかなりの支持があるはずなのに、事態はみるべき動きを示していない。いわんや、問題が体制の転換、変革ともなれば、なおさらのことといわねばならない。しかも、学生運動が、あくまで、それの変革を志向するとすれば、二波、三波どころの話ではなくなる。さらに、いつの時代にもせよ、現状打破が知的青年に共通の性向であることを考えれば、学生運動は、いわば、無限の運動としてうけとらねばならない問題であろう。

話がやや脇道にそれたが、学生運動というものを、そうした無限の運動として眺めた場合、では、最近のそれは一体どんな特徴をみせているか。

過激化の根底にあるもの

その点、日本でいつも一番に問題にされるのは、運動形態の過激化という点だろう。学内紛争に際

しては、つねに「大衆団交」の名による集団暴力的な圧力で自分らの要求や主張を押し通そうとし、往々にして大学当局者をカン詰め状態にしてつるし上げ、大学本部を封鎖してその機能を麻痺させる。学外においては、いわゆる「ゲバルト」論の下に暴動的、一揆的な騒動をひき起こす。運動の現象面だけをそのように眺めた場合、それに対して、ともかくも日常の平和と安定を願う大多数の国民が反発を感じるのは当然であろう。「無責任だ」「相手の人権を無視するもの」「もはや学生ではない、暴徒だ」「説得や話合いはムダだ」「集団暴力の横行を許すな」といった批判的、否定的な言葉が世論の中に飛び出してくる。そうした非難の中に、運動の過激さが今後どう変わっていくか、楽観の余地はなさそうである。なぜなら、非難の焦点となっている三派全学連（昭和四十三年七月上旬再分裂）が「反代々木」とか「反日共」といった形容詞付きで呼ばれていることに明らかなように、六〇年安保期を契機として既存の革新政党と絶縁してしまっているからだ。いいかえれば、彼らに対する従来の指導の手綱が断絶しているからであり、いわば、彼らの変革志向のエネルギーは、それまで自らを引締めていた「タガ」を、すでに吹っ飛ばしてしまっているからだ。「三派」を中心とする運動の過激さは、まず、そこに由来して考えねばならないが、その上に、七〇年安保期の接近ということを併考すれば、楽観できぬのは当然だろう。しかし、運動形態の過激さ自体は、別に日本の全学連に限らないし、また、最近に限ったことではない。欧米の、いわゆる先進諸国にさえ現われており、さらに、アジアの後進諸国では、むしろ通常のこととみられてきた。そこからして、過激な学生運動は、そうした諸国の後進性や植民地的従属性と結びついたものとして考えられてもきた。日本の全学連が「ＺＥＮＧＡＫＵＲＥＮ」として国際的な注目をひき出した際にしても、それをもって「後進国から

脱し切れないでいる日本」の一つの例証として眺める意見さえないではなかった。もっとも、そういう意見なり表現は、別の角度からすれば、今もなお通用するといえるかもしれない。たとえば、革新勢力にみられる「少なくも沖縄の本土復帰と安保条約の解消が実現されぬうちは、日本は完全な独立国とはいえぬ」といった見方からすれば、そうだろう。たしかに、学生運動が「外国の支配下、植民地化からの民族解放」闘争の一翼をにない、あるいは、その先頭に立つ場合、その形態が過激化することは理解される。現在の日本の三派系の運動に、それを準用できるかどうかは意見の分かれるところだろうが、かりに一歩譲って、そうした民族解放闘争的な性格の存在を認めるとしても、それがすべてではないだろう。そして、問題を世界的な広がりの中で眺めた場合、そのことは一段とはっきりするように思える。

外国支配からの解放闘争的性格からする運動の過激さということは、しいていえば、たとえばチェコやポーランドの場合などには、ある程度通用するかもしれない。むしろ、それは「自由化」の進展を求める国民をかかえた両国と、その「自由化」の行き過ぎを懸念するソ連との微妙な関係が、今後どう動くかということと関連して注目される問題である。しかし、当然のことながら、ユーゴの場合はそういう視点からは説明がつかないし、いわんや米、英、仏、西独、伊などの、いわゆる欧米先進諸国の場合についてはなおさらだといわねばならない。事実、これらの諸国の場合、運動の過激さは別個の性格から生じてきているようだし、また、そこにこそ最近の学生運動として最も特徴的なものが出てきていると思えるのである。繰返していえば、後進国特有のものと思われていた過激な学生運動が、それとは無縁だと思われていた先進諸国に現われてきたという事実、また、その事実が現代の

世界にとって何を意味するのかということこそ現在の最大の問題であろう。

たしかに、かつての東南アジア諸国の場合のように、外国支配からの民族解放とか、現在の東欧共産圏における「自由化」促進要求とか、あるいはスペインの場合のような「自由化」「民主化」の要求に根ざした反ファシズム闘争などは、むしろ常識的に理解できる。自由であることと、それを阻害するものを排除しようとすることは、本来の人間性から当然のことだからだ。そのような場合に、青年学徒の立上がりがみられなければ、それこそ、むしろ不可解といってもいいほどのことであろう。その場合、運動の形態にも、いわば、既存の秩序、制度、権威に対する反抗と破壊の志向をとり、それを既存の手続き、方法を無視した手段で実現しようとする傾向が出てくるのも当然だろう。ところが、すでに自由化、民主化が確立されているかにみえる欧米先進諸国でも学生運動は、今や、同じような過激な傾向を示しているのである。これは、どう理解したらよいのか。そのことは、ある程度、日本の場合にも通じる問題だろうが、その場合、一つの答えとして大学制度の古さということが出てくる。たとえば、欧州の大学は総じて伝統的な権威主義と古い制度のままで、新しい時代と世代の要求に応じられなくなっているといわれる事実。まさしく、そのことはフランスの「五月危機」の口火にもなったし、その他の諸国でも、ほとんどが大学の改革と運営に対する学生の参加要求という形で表面化している。しかし、そのことだけでは必ずしも十分な答えとはならないだろう。欧州の大学にくらべて、はるかに民主化されているはずの米国や日本の大学でも、同様の、あるいは、それ以上の「過激な」運動は現われているからだ。

もっとも、大学が新しい時代と世代の要求に応じられなくなっているという点では、欧州も、米

国も、日本も、五十歩百歩といえるかもしれない。とくに日本の場合、たとえば東大の医学部紛争などに、それは痛感されるし、実は、米国をもふくめて世界中の国々が、新しい時代と社会の中での大学のあり方を模索しているのが現状だともいえる。その模索の中で旧来の「大学の自治」の中身が改めて問われ、また、それへの「参加」を求める学生の要望をどう処理するかで、どこの大学も苦悩し動揺しているわけでもある。しかし、たとえ、そうだとしても、大学問題だけが学生運動過激化の理由でないことは、いうまでもなかろう。たとえば、フランスの「五月危機」の場合でも、学生側の当初の要求は、その後に起こったゼネスト以前の段階で、すでに政府の全面的な譲歩をかちとっていたにもかかわらず、彼らの運動は収束されずに、事態はむしろ悪化した。六月下旬の総選挙が終わり、パリが長いバカンスにはいってからでさえ、フランス全学連（ＵＮＥＦ）は「パリと、その他諸都市で人民夏季大学を開いて〝五月革命〟の運動を続ける」と気勢を上げている。また、チトーを「偉大な指導者」と仰ぐユーゴでさえ、六月初旬、一週間にわたってベオグラード大学を占拠した学生の運動は「大学改革、奨学金引上げ」などの当初要求を乗越えて、社会的民主化要求（その中にはユーゴ共産党内の特権層批判もふくまれているようだ）にまでエスカレートしている。大学問題は学生運動過激化の口火であり、一つの理由ではあっても、それ以上ではない。日本の場合も、むろん、そうである。

さて、自由化・民主化・近代化が一応確立しているかにみえる先進諸国での学生運動の過激な展開の問題が、単なる大学改革という視点だけではとらえられないとすれば、当然に、別の視点からの答えが捜されなければならない。そこに出てくるのが、さきにも一言ふれた「疎外」論的解釈であり、それに基づいた「新左翼」論、「直接民主主義」論的解釈である。むろん、過激な運動の展開につい

ては、各国それぞれに具体的な理由、動機、基盤、背景が考慮されなければならない。そこには、大学問題のほかに、米国やベルギーなどのように人種問題がからむ場合があるし、西独のように内政問題（とくに大連立政権の成立による野党勢力の弱化）が主になる場合があり、日本のように外交・防衛の問題が重点になる場合もある。これらに加えて、ベトナム戦争の存在が大きな影響を及ぼしていることは、いうまでもない。しかし、これらは、いわば個別的な外的条件であり、運動の過激化の問題には、それだけでは理解しがたいものが含まれている。端的にいって、それらの具体的な問題をめぐる闘争に当たって、往々、学生たちが既存の革新勢力との共闘態勢を踏み破り、あるいは、それと絶縁して暴走する傾向のあるのはなぜか、の疑問が残るはずだ。そこには別の内的条件がなければなるまい。それは何か。

〝疎外〟からの解放を求めて

日本の全学連のうち「反代々木」をいう三派系や革マル派が、社会・共産の両既成革新政党に対して、現在どんな関係をとっているかは周知のとおりである。彼らは公然と両党に対する絶望を宣言し、彼らの闘いは「一方では既成革新勢力の腐敗との闘いでもあった」といっている。類似の姿は欧米にもみられる。フランスの全学連は仏共産党を「ブルジョア議会政党」だと冷笑し、また、西独の学生運動の中心であるＳＤＳ（ドイツ社会主義学生同盟）は、元来は社民党の組織下にあったのが、社民

党の国民政党への変身を契機としてこれと絶縁し、今や自らを「議会外の野党」として主張している。英国のＲＳＡ（急進学生同盟）は労働党内閣を「ガラクタ」と呼んで、その幻滅感をぶっつけているという。また米国ではＳＤＳ（「民主的社会をめざす学生」組織）が、いわゆる「新左翼」組織の中核として、すでに「真の改革への希望は、既存の権力との同盟の中にあるのではなく、人民的立場からの左翼的反対をつくり出すことの中にこそある」といった宣言を発表（六三年大会）し、以来、次第に革命的戦闘集団としての性格を強めてきているようだ。これらの中には明らかに、既存の革新勢力への不信と絶望がある。そして、その不信と絶望は、基本的には、既存の革新勢力が現在の民主主義政治の根幹である議会主義のワク内に埋没してしまっているかにみえる点に向けられているようだ。とすれば、その背後には現行の議会制民主主義に対する急進派学生の否定的意識が存在するとみなければならない。事実、日本の三派系や革マル派は、それを明言している。議会制民主主義と、それによる社会改革は、所詮、一つの改良主義に過ぎず、真の変革は不可能だというのだが、米国のＳＤＳ、あるいは「新左翼」運動にいたっては、現存社会秩序、制度、権威の一切に対する否定を主張し、別個の体制の社会建設を目ざしている。要するに、先進諸国の急進派学生の運動の中には、個別的、具体的な問題をめぐる闘争のほかに、あるいは、その奥に、現存の社会体制自体に対する不満なり、否定的意識が横たわっているとみなければならない。そこに、既存の革新勢力は体制の内側に、そして彼らは外側に、という意識の存在がみられる。つまり、社会学的な言葉でいえば、彼らにおける疎外感の存在である。

これについては、すでに学者や専門家によって、いろいろの意見が出されているが、それを大雑把

にいえば、工業化、機械化、技術化、管理化の進んだ社会機構が生み出す人間疎外の状況の中で、最大の疎外層に属する学生が、その疎外状況からの解放を求めて過激化するのは当然だとする見方である。実際、たとえば、三派系の中核派が「今日の日本社会は、あらゆるところで、われわれの人間らしい生き方と敵対している。それを打ち破り、つくりかえるために要求し行動するのは、われわれの歴史に対する責任である。そして、それを押えつけようとするものは、はねのけなければならない」（秋山勝行・青木忠『全学連は何を考えるか』より引用）といっているところなどは、そうした疎外論的見方を実証しているように思える。フランスの学生が「直接参加」「直接民主主義」を叫ぶのも、やはり「疎外」からの解放要求に根ざしているのだろうし、米国の「新左翼」の場合はむろんのことである。それはおそらく程度の差はあるにせよ、どの先進国の場合にも共通する問題とみてよいだろう。そして、その場合「現代社会における革命は、その社会体制の中に組込まれたものによってではなく、その体制のワクの外におかれたものたち——貧民、黒人、学生たちによってこそ口火が切られる」といった趣旨の例のヘルベルト・マルクーゼの理論を考慮にいれれば、問題は一段とはっきりつかめそうだ。マルクーゼの著書は、急進学生にとっての「バイブル」になっているといわれるが、彼らが既存の革新勢力と議会制民主主義に不信と否定の目を向けて暴走するのも、そういうマルクーゼ的革命意識が働いているのかもしれない。

いずれにしても、彼らの過激な運動展開には、自らの人間解放をも含めて、疎外状況を生み出し拡大する現在の高度社会の変革を目ざすという、彼らなりの使命感があるようにみえる。しかし、たとえ、そのように理解したとしても、是認しがたい大きな問題がなお残らざるをえまい。つまり、現在

の社会体制を打破し、破壊したあとの社会として、どのようなものが考えられているのか、の問題である。もっとも、米国の「新左翼」運動には、いわば、それに対する答えのヒナ型めいたものがみられなくはないようだ。「人々は、彼らの生活に影響を及ぼす諸決定に、ひとしく参加せねばならない」という組織原理の下で、黒人社会や白人貧民層、急進派学生層の間で動いている、いわゆる「草の根」レベルのコミュニティ組織だが、しかし、それが今後どのような成果を生み出していくかは予測出来ない状況である。ドゴールの約束したフランスの「参加の社会」についてもそうだろう。とすれば、現状はせいぜいが「疎外状況ならぬ万人参加の民主主義社会」といった想定が現われてきているという程度であり、いわば、現行の民主主義制度の形式化、硬直化への批判が生み出した投影図に過ぎないとみるほかはないようだ。そうだとすれば、その程度のことで現在の社会体制自体をぶちこわそうというのは、一体、どういうことなのか。体制破壊に直行する前に、運営改善による活路をさぐる必要はないのか。よく耳にするように「破壊することによって、新たなものは自然に生まれてくる。フランス革命のとき、果たして青写真があったか」という答えでは納得できまい。ぶちこわして、さて「あとは野となれ山となれ」では、ついてはいけないし、フランス革命の歴史的意義は大きく評価するにしても、革命のあとの長い長い混乱と惨禍のあとをふりかえれば、出来る限りそうした混乱を避けながら改革の実をあげる道をさぐろうとするのが後代の人間の知恵というものではないのだろうか。「五月危機」のあとのフランス選挙の結果は、単にドゴールの打つ手の巧妙さだけが現われたのではなく、そうした人間の知恵こそが大きく現われたとみるのは誤りだろうか。

現状破壊そのもの、あるいは、日本の全学連の言葉を借りれば「起爆」そのものに、社会変革の推

進力としての意義を認めようとする意見は少なくないかもしれない。事実、たとえば、フランスの「五月危機」の場合にも「学生たちの過激な行動には批判も強いが、そういう運動がなければ、大学改革の機運も、これほど早く進まなかったろう」という評価がパリから伝えられてもきた。日本の場合にも、そういう例はあるだろうし、学生が騒動を起こしたからこそ、問題の重要性が一般にも理解されたとか、問題解決へ一歩前進したとかいう評価は往々にして耳にするところである。そういう立場からすれば、世界的な高まりと広がりをみせている最近の過激な学生運動の展開こそが、現在の社会体制のさまざまなヒズミや欠陥の存在を、世界の人々に改めて認識させたという評価も出てくるかもしれない。現に、日本の論壇には「戦後二十年余、今や国際的にも、国内的にも、既成の秩序と体制、権威と構造が根底的な挑戦を受けているのだ」という意見が現われている。結局、問題は、体制の内側が、過激化する学生運動をのみ込んでいくだけの柔軟さを残しているか、それとも、のみ込めないほどに硬直化しているかという点にあるように思える。スチューデント・パワーが、現在の世界に何をもたらす力なのかも、それによって決まってくるだろう。

日本の新しい流れ

闘士の素顔

派閥抗争は爽快？

「皮グツをズックにはきかえて、手ぬぐいでほっかむりして、ヘルメットをかぶる。それで角材をもって、仲間のスクラムにはいって、警官隊に突撃する。

みてくれはちょっとすごいけど、こわいと思うのは、緒戦か、せいぜい二回目ぐらいまでですよ。はたからみてりゃ、ひどいことにみえるけど、やってる方は、それほどじゃないな。

いちどやってみませんか、そしたら新聞で大騒ぎするほどのことないってことがわかりますよ」

三派全学連中核派のリーダーのひとり、埼玉大学四年生の藤木正弘君（昭和四十三年現在二十二歳）は、笑いながらこういう。彼は、大きな闘争があるたびに、現地の救援対策本部を指揮して、おもにカンパを集めたり、寝泊まりの場所を交渉する幹部学生である。

柔和な表情、いつも笑っているかわいらしい瞳の持主で、礼儀正しく、約束ごとに忠実な青年である。

時として、彼はデモ隊の先頭に立って、機動隊と激突する。小柄な、やせた藤木君はゴツイ警官の手につかまれて、まるで小鳥のようにもがくだけだ。くちびるをかみ、青ざめた表情で護送車に、押

しこまれたことも、すでに五回を数える。藤木君を生みだした環境に目を向けてみよう。

昭和四十年の日韓条約反対闘争が、今日の全学連闘士を生みだし、育てた、ということは、いまや定説になっている。

三派全学連の秋山勝行委員長は「われわれは戦前の朝鮮植民地化の責任から説き起こし日本帝国主義の再侵略に反対して闘った」といっている。

藤木君も一年生としてこの運動に参加した。それまでは、全学連を遠くから眺め、避けるタイプの学生だった。「日韓条約反対は、自分の正義を実行することであり、日本人なら誰でも、この条約がなにを意味するかがわかると確信したから、自発的に参加した」という。

ただし、日韓条約の問題は、彼にとっては、あくまでも全学連入りした表側の理由だ

乱闘する革マル派と三派系学生（昭和42年5月，東京・日比谷公園で）

ったようだ。政治的な、あるいは思想、論理上の理由とは別に、彼には、もっとそれ以前の切実な内面の欲求があった。

「革マルが敗色を濃くしていったころです。革マルは組織と理論を死守しようと、猛烈なゲバルト（実力あるいは暴力の行使の意味）をふるいはじめました。優勢な他派になぐりこみをかけ、血を流し、そうすることで自己を主張しようとした。

僕は彼らをみていて、爽快だな、と思った。心底から共感した。自分というものに賭け、エネルギーを燃焼させている姿を美しいと思った」

藤木君は内面の問題について語るとき、対機動隊戦術を話すとき以上に、目を輝かせ、頬を紅潮させる。そしてマージャン屋通いの学生、図書館通いに明け暮れする学生、あるいは無数にあるサークルの学生、運動部の学生などにはみられない、きびしい、緊迫した表情を見せる。

「僕は若いんです！　青春は燃焼することだ。自分の確信を、正義を、体ごとで表現していく。僕のエネルギーは不滅だ。絶対燃え尽きることはない。そう信じて、その可能性をためしている」

秋山委員長もそうだが、藤木君も話しているうちに、声がうわずって怒鳴るようになってくる。

つましい生活設計

ある日、藤木君を招いて食事をした。「酒を飲まないか」と問うと、彼は「酒は好きだけど、あなたは新聞記者で、僕は自分の考えをあなたに正確に知ってほしいと思うから、酒はヤメにする」と断わった。

彼は五人きょうだいのまん中あたりだ。父はS県の中学校の校長をつい先年やめ、昭和四十三年の今は受験関係の通信業務をしている。母も健在、きょうだいもみな会社員、教師などをして独立の生計をたてている。

「デモにいくというと、そりゃ親は反対しますよ。でも、回数を重ねるにつれて、あきらめるっていうのかな、まず、何もいわなくなる。それから母親はケガをしてほしくないという気持に強くとらわれる。おやじは、やっぱりちょっとおふくろとは違う。息子のことをわかろうとする。いろんな本なんか読んで、僕を理解しようと努めるんですよ。

だから僕は思うんだ。おやじというのは息子の考えを理解し、きっと息子について来てくれると。これは僕の家庭だけのことじゃない。仲間もみなそういってますよ。おやじは息子に数歩遅れて、ついてくるものらしい」

藤木君は、もう卒業だ。つましい家庭なので遊んでいるわけにはいかない。

「就職は？」

「ほんとうに立派な会社なら、われわれの主張する原理を批判などしないでしょう。事実、僕の仲間たちは信じるところを正直に述べて、いわゆる一流会社へ、いくらでも入社しています。別に社会からシャットアウトされているとは思いませんよ。でも僕は、ここ（中核派）のある上部団体に残るつもりです」

聞くところによると、上部機関にとどまった全学連ＯＢのサラリーは三万円ていどである。
「まず、結婚しても女房を食わせることが出来ないってところでしょうか」
と彼はいうのだ。
行動の過激さにくらべて、彼らのマイホームの設計はまことにつましい。革命を起こすにはまず食って生きていなければならない。藤木君はいずれ結婚して、彼の先輩たちがそうであるように、細君ともども共かせぎすることになるだろう、とその将来を描いてみせる。
「生活出来るまで、子供は作れませんよ」。産児制限は革命家のエチケットだ。「もっともできてしまったら、人間のいのちほど尊いものはありませんからね、決しておろしたりさせません。どんなふうにしてでも育てなくちゃ」と藤木君は人なつっこく笑った。
女の尻を追いかけるのに熱中している軟派学生にはない、女性に対するきまじめな態度も彼らによくみかける特徴である。
話は違うが、四十二年の明大全学ストのとき、こんなこともあった。
同大学の女子短大の学生大会が市ケ谷の私学会館で開かれたとき、勇猛をうたわれた明大共闘会議の社学同派の面々が、五百人ほどの女子学生のオルグに出かけた。まず演説しようとした大内委員長が女子学生の非難の声に圧倒されて降壇。Ｍ、Ｋらは胸ぐらをつかまれこづき回され、ほうほうの態で逃げだす始末だった。
「相手が相手だから、からだにさわれないし、もちろんなぐったら大変だし――。それに、女ってすごいよ、力があるなあ。僕はつくづく女性に失望した」

Ｍ、Ｋらはこもごもそう語り、居合わせた記者団の爆笑をかった。

熱狂的なまでに主観的

反日共系全学連を、さながら凶徒のようにみせている角材と投石のゲバルト戦術を彼らはどう考えているのだろうか。
「僕らの全行動をタテにつらぬく一本の赤糸が、ゲバルトです。なにもそうしたくて実力をふるっているのではない。しかし、あなたが力ずくで口をふさがれたり、生命を奪われようとしているときに、黙ってはいないでしょう。力には力を、これは生物の本能でしょう。僕が思想を表現しようとして、機動隊にはばまれるとき、仕様がなしに角材をふるい、石を投げる。どっちにしろ原始人時代からの人類の古い武器です。それが強い威力をもっている。それだけでいいんですよ」
藤木君はそう語る。
彼らは客観情勢を分析して、「ここでこう行動すれば、しかるべき成果をあげられる」と計算して行動しているが、行動しているさいちゅうの彼らは、時として熱狂的なまでに主観的である。
革マルの成岡委員長が「闘う精神を物質化したもの」と定義づけている角材と石を手に、圧倒的に優勢な機動隊への突入を繰返す。ヒタヒタと押し寄せる警官隊のジュラルミンの盾、白い指揮棒が「突っこめ！」とひらめき、機動隊の青ヘルメット集団がワッと突進してくる。

「こわくて、こわくて、逃げたい一心さ。そういう日和った瞬間には、決して僕の思想が逃げるなとは命令しないよ。もっと具体的なイメージを一心不乱に思い浮かべて、目をつぶってなぐり合うんだ。おれの場合はね、佐世保の駅前で拍手してわれわれを迎えてくれた、屋台をひっぱっていたおばあさんだ。おばあさんのために、しいたげられたおばあさんのために絶対逃げてはいかんといい聞かせるんだ」

広島大からきたという青ヘルメット（社青同解放派）の学生は、佐世保の平瀬橋ぎわの市民病院のベッドで、ガスに目を泣きはらしながらボソボソ語っていた。

中核派の早大生はこういった。「逃げだしたい気持をささえてくれたのは僕の思想じゃない。鳥栖の駅で国労の動力車労組員から、しっかりやってこいと肩を叩かれた。その労働者の顔が、最後まで僕にコン棒を捨てさせなかった」と。

乱闘の渦中にいるとき彼らは孤独だ。ハネ上がり、トロツキストと指弾されながらも、誰かとの連帯を切望せずにはおれない。

「総評、社会党、日共、どれもこれも体制内に組み込まれた〝反体制運動〟でグズグズ自分に都合のいいことばかりご託宣を並べている。日本の体制外の反体制とは、本当に疎外された存在とは権力と組織から絶縁された市井の民衆だ」と彼らは異口同音にいう。

佐世保で、そうした学生たちを、狂喜させる事件が起こった。エンタープライズ号の入港を翌日にひかえた四十三年一月十八日、三派と革マルは、こんどは佐世保橋の上で機動隊と激突した。この日は社共のマンモスデモが佐世保市内を埋め、そのうちの一隊は未組織あるいは若手の労組員からなる

反戦青年委だった。機動隊が橋上の全学連をすっぽり取囲もうと接近したとき、横合いから反戦青年委のデモ隊約二百人が警官隊の前面にジグザグデモをかけ、包囲を妨害した。

その光景をみた学生たちは――かつてないことだったが――涙を流し、ついで、歓声をあげて反戦のグループに合流していった。

その後で三派の学生たちは興奮して語った。

「みてくださいよ。とうとう労働者がわれわれと手を結んだ！」

生産点にいない、労働者ではない、という自覚は街頭で戦う彼らをうしろめたくさせ、劣等感を抱かせることがしばしばある。それが、ついに、労働者が格好だけでも「われわれの後から決起した」光景を目撃したのだから強い感激にひたったわけだ。世間はわれわれの高遠な思想を理解しがたかろう。それでよい。なんと批判されようと正しいものは正しい――自分たちの行動には歴史的な必然性がある――と彼らは深く信じこんでいる。

マス・コミを気にする

こうした、超然派的な一面、彼らは意外に世論を気にする面も合わせ持っている。真夜中、新聞社に電話をかけてきて「記者会見をします」という。

「お宅の社はどちら？　あっ毎日サンね」と手慣れたものだ。〝出欠〟をとって各社がそろってから

おもむろに口を開く。「今日はほかに大きいニュースがありましたか？」ない、と知ってホッと胸をなでおろす。紙面のつごうで小さく扱われては、せっかくの見せ場が世間によく伝わらない。どういうふうに扱われるかが非常に気になる。そして彼らは、しばしば記者会見の場で気に食わぬ記事をのせた新聞社を弾劾する。

たとえば三派の成島副委員長。

「○社は故意に事実を曲解、全学連に悪意ある態度をみせている。われわれは、このようなことを実力で阻止してみせるだろう」。口角アワを飛ばして激怒する。

学園紛争中の中大昼間部自治会室には、各社の論説と学生運動の記事の切抜きがカベ一面にはられていた。赤印で〝必読〟と記したのもある。

市民あるいは一般学生を軽視しながらも、彼らと離れてしまっては根なし草になってしまう、という配慮、あせりが、このことからもよくうかがえる。彼らはときにアナーキーな傾向を示すとはいえ、本質的には、政治的効果をひどく気にするのだ。だから大向こうをうならせるスタンドプレー、世間をアッといわせるショーマンシップが、とくに街頭作戦を演出する場合、入念に計算される。

行動至上主義者が多い

ところで、反日共系全学連学生には、苛烈な行動至上主義者が多い。とくに、大きな街頭デモの先

頭部隊には〝元運動部員〟の体格の良い学生が立つ。早大の半年ストを指導した大口昭彦君も元早大剣道部のメンバーだった。

ストが膠着（こうちゃく）し、にっちもさっちもいかなくなった日の夕方、政経学部の地下室でフトンにくるまってグッスリ眠っていた大口君をゆり起こした。

「あすはどうするんだい」と聞くと、「さあ、それはあしたになってみなけりゃわからんですよ。われわれは事前の論理に従って行動しているのではなくて、行動が次の行動を命じる。つまり、行動に内包する論理で動いているのですから、やってみなけりゃ後のことはわかりませんよ」とさばさばしている。

試合はやってみなけりゃわからない。ピンチがきても、チャンスがきても、そのときどきで対応するほかはない。割り切ったゲーム感覚の持主である点でも大きく似通っている。

彼ら行動派は、ものごとにこだわらない。さばさばした気性をもち、偽悪的なポーズ、肩ひじ張ったポーズがくずれると、一転して、人なつっこい、甘えっ子のような表情をみせる。

機動隊に蹴散らされて、逃げこんだ民家でやさしく同情でもされようものなら、タタミに頭をすりつけて感謝の気持を表現する。放水でズブ濡れになって公園のベンチでふるえている彼らに、タバコの一本でも差し出してやると、険悪な表情は、ガラリとくずれて、大人コドモみたいな頼りない、気の弱い笑い顔になる。

全学ストのまっさい中に、三派系の闘士の説得にあたった、早大・神沢、中大・木川、明大・宮崎各学生部長は、口をそろえて、「少人数で話をすると、理のとおったことをいい、こちらのいい分も

よく聞いて、まことに気持がよい。それが、いったん組織にかえると、ガラリと態度を変えて、悪意のアジテーションを平気でブチはじめる」と嘆く。「君子ひょう変す」のたとえどおり状況によって行動し、機をみるに敏であることが彼らの通性である。

なんの権力ももたない、また常に非合法活動グループときめつけられている彼らにとって「事情変更による契約破棄」は生活のチエなのだろう。

羽田、佐世保、成田、王子、と相次いだ街頭戦、そして、いま五十校近い全国の大学で学園の紛争が起きている。「よくもつかれないで次から次へやれるものだ」と世間は執拗な行動にあきれている。若い肉体は回復力が早い。それにもまして精神のエネルギーは、行動を否定されれば否定されるほど燃えさかるばかりだ。世論や大学の先生から、反社会的行動を攻撃されればされるほど、彼らは「オレたちは本質的にゲリラだから、そうされるのがあたりまえでしょう」と気にしない。

三派の学生は〝貫徹〟とか〝非妥協〟という言葉が大変に好きだ。

秋山委員長はよく「われわれはゲリラと化して地下にもぐり、徹底的に非妥協の戦いを貫徹する」という文句でアジテーションをしめくくる。

ボー・グエン・ジャップとゲバラ

近代ゲリラ戦の英雄、北ベトナムのボー・グエン・ジャップ国防相、四十二年九月ボリビアで戦死

した元キューバ工業相、エルネスト・ゲバラは行動する三派の神々である。

マルクスの本は読んだことがなくても、ボー・グエン・ジャップの「人民の戦争」とか「ゲリラ論」、ゲバラの「革命戦争の旅」「ゲリラ戦争」を熱読している。

とくにゲバラの熱狂的な信奉者が多く、ゲバラのことを話すときは、まるで恋人の名かなんぞを口にするときのように、共感をむき出しにする。四十二年十一月二十三日、東京・日比谷で開かれたゲバラ追悼集会には全国各地から二千人の学生が参加したが、参加者たちは、ゲバラの黒ワクの写真を先頭に神妙な、まことに厳粛な表情をしてデモしたものだ。

アルゼンチン生まれの医科大生、放浪の反体制闘士、キューバ革命の指揮者、カストロのブレーン、そして、キューバに共産主義政権が出来あがったとたん、大臣の座を去って「人民が私を呼んでいる」と、アンデス山脈の奥深くへゲリラ隊を引きつれて姿を消したゲバラ。

ロマンチックで、ナゾにつつまれた行動主義者で理論家でもある。そしてなによりも権力を憎み、人民の解放のために殉死したゲバラ――彼らはゲバラを最高の英雄とあがめている。

毛沢東語録をあざ笑うことがあっても、ゲバラの言葉は手帳に抜きとって克明に暗記している。たとえば――「闘争の一要素としての憎しみ、敵に対する仮借ない憎しみ、それはわれわれに、人間の通常の限界を越えさせ、われわれを事実上、激しい、より抜きの、非情な殺人機械に変えてしまう。われわれの兵士はこうならなければならない。憎しみを持てない人間は残酷な敵に打ち勝つことが出来ないのだ」

こういうものごとの考え方をしているから、仲間うちの結束はなかなか固い。たとえば、佐世保の

駅頭で疲れ切って寝ころがっていた中核派の青山学院大生に市内のタクシー運転手が声をかけた。
「学生さん、フロにはいりに来なさいよ」
「本当ですか！」
がばっと飛び起きると彼は、ケガをしてビッコをひいたり、頭に包帯を巻きつけた学生を三人つれてきていった。「僕より、ケガ人を入れてやってくれませんか」
「僕は全学連にはいってよかった。ほんとに信頼出来る友人と知り合えたし、大学生として行動しているという実感が、これほど強く味わえるサークルは、他にはないですよ」
比較的おとなしい陣笠クラスの学生は、しばしばこう述懐する。
どこかに、マンモス大学へのうらみをこめて——。

無党派の党派性

この文中に、実名で登場してくる学生たちは、とりわけ確信に満ちた典型的な三派系人間である。だが、どの派にせよ、ヘルメットをかぶって、デモの先頭に立つ「行動隊」の数はせいぜい三百人前後だろう。
デモ参加者のかなりの部分は、秋山委員長の表現をかりれば「党派に属さぬことを党派性とする〝無党派派〟」の学生たちだ。

党派の同調者である場合も少なくないが、しばしば不確かな気持を抱いて、あるいは衝動的にデモの渦中に飛びこんできて、機動隊と激突する。ふだん、彼らは、「優」の数と一流会社への就職を気にするような存在だが、事あるごとに三派や革マル、あるいは民青を支持して大胆な攻撃に参加する。
第二次羽田騒乱に参加して逮捕された中大法学部三年生、N君もそうしたタイプの後方部隊の一人だった。
彼は東京の尾久署にまる二日間留置された。父親はN商事の労務課長で、N君がつかまった日は深夜まで、賃上げの労使交渉に汗を流していた。
どちらかといえば地味で保守的な法科の学生が、ある状況の下で、突然トロツキストに変貌する。
N君はただ「世の中には不正義が多すぎる」とだけ、デモに参加する理由を述べて、佐藤首相の訪米に反対するため羽田へ出かけた。彼はそれまで、ただの一度もデモに参加したことがなかった。ただ、N君の書架に社会主義思想の本が五、六冊はいっていることを母親は知っていたが、大学生としてはむしろ貧弱な読書量、と考えていた。N家では、夕食後、高校生の妹をまじえて、その日の出来事を語り合う習慣がある。N君が近ごろ学生デモに好意的な意見を述べはじめてきたことに対し、母親は態度を保留、父親は「生活体験を持ってから行動しても遅くない」と学生デモを否定した。佐藤首相の訪米が、沖縄の核つき返還、ベトナム戦協力を取付けるものではないか、という疑惑は、当時、野党側から広く追及され、新聞をにぎわせていた。
N君は、それを不正義だといい、「国の決めることにそうかんたんに割り切って黒白をつけられるものではない」という父親を「日和見主義者、大人はきたないからきらいだ」といって非難した。「僕は

抵抗権を行使してくる。民主主義とはめいめいが考えるところを表明することなのだ。ただし、デモには加わらない」といい残し、父親の着古したレインコートに着替えて家を出た。

テレビのニュースで激突の場面を見て、両親は、とっさに「だめだ、あの子は要領が悪いから、必ずつかまるぞ」と思ったそうだ。

「ひとり息子で、余りにもバカ正直で、こんな時代に、どうやってあの子は生きていくのか、もっとズルくなってほしいのですが」

母親は涙を見せていった。

N君は、角材を渡され、石を投げつけ、荒れ狂う社学同グループの最前線で乱闘に加わっていた。彼は意識的なトロツキストではない。しかし、羽田の状況の下では、明らかにトロツキスト群像に仕立てられた。

尾久署の留置場で、父親から差入れのあったサンドイッチと紅茶を手にしながら、N君は、何ごとか、深い思いに沈んでいた。

成田へ、王子へ、こうした「手弁当組」の無党派学生が目立ってかけつけるようになった。それも地方の国立大学の学生に多い。彼らは、勉学の合い間に、学生服に皮短グツという通学スタイルで、きまじめな目つきで、デモを組み、シュプレヒコールを叫んでいる。

事件が起こり、新聞やテレビが、学生の暴虐ぶりを報道する。そして、トロツキスト学生の像がだんだんと鮮明になってくるにつれて、一般の学生は彼らの行動に関心を持ち「短絡的だ」と批判したり「あれ以外に方法はない」と支持したりする。

トロツキスト的学生が、いずれにせよ、今日の大学生の顕著なひとつのタイプとなり、問題視されてきていることは事実である。

ヘルメットの系譜

派閥をそのまま色分け

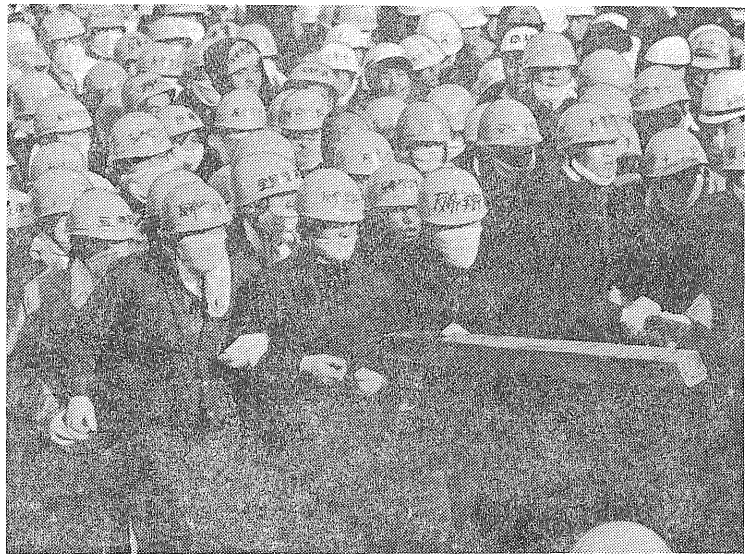
全学連とヘルメットは、切っても切れぬ仲となった。機動隊と接触する心配のない学内集会でも、彼らは得意そうにヘルメットをかぶる。かつて大学生が角帽を愛したように、いまの全学連の学生たちはヘルメットを愛している。

このヘルメット、赤、白、黒、青、赤白、緑と色とりどりだが、これは決してカッコよくするために塗っているのではない。自分は何派であるかを明示するためで、きょうは白、あすは赤、と塗り替えることは絶対にない。ヘルメットの色は自分の派の連帯意識を強めると同時に、その動員力を他派に誇示する手段でもある。つまり、各派の間には、ヘルメットの色まで厳然と区別しなければならないほど深い〝ミゾ〟が現存しているのである。この〝ミゾ〟は彼らが信奉するイデオロギーだけではない。こまかい戦術、戦略にまで及び、彼らは自分の派の正当性を主張すると同時に、他派をきびしく批判し続ける。この間には妥協の可能性はあまりない。むしろ互いに主張しあうことによって、ミゾはますます深まる傾向さえある。「全学連」という同じ名前を名乗りながら、各派はなぜ争わなければならないのか——全学連の歴史のなかからその答えはでてくるようだ。

「全学連」とは、昭和二十三年、日共学生党員の提唱で結成された学生団体である。その特徴は、第一に在籍学生のすべてが加入している学生自治会を構成単位とし、その活動範囲と影響力は学生の自治活動全般に及んでいること、第二に各単位自治会の上に都道府県学連、その上に全国八ブロックの地方学連というピラミッド型の強固な一貫した組織をもっていること、第三に国際的な学生組織「国際学連」に加盟し、学生運動を世界的な規模で展開出来る体制にあることなどであった。

タテ、ヨコの組織系統が整っていることは、中央の指令一本で、極端にいえば、全国の学生を動員し、国際的な応援も求めることが出来ることを意味する。

「全学連」を支配するものは、全国の学生の政治的行動を支配する——実体はともかく「全学連」の名は、いまでも学生運動家たち



米空母佐世保寄港を阻止しようとする学生たちの突進（昭和43年1月）

の〝錦の御旗〟になっている。色とりどりのヘルメットをかぶり、ときには血を流して、各派が「全学連」の本家争いをするのも、こういった事情があるからだ。

分裂につぐ分裂

この全学連も三十五年の安保闘争のころ、すでに日共国際派の流れをくむ中執派と日共主流派に直結する反中執派に二分されていた。

中執派は三十年七月の日共六全協以後、日共がそれまでの極左冒険主義路線を捨てたことに反発していたが、三十三年十二月には共産主義者同盟（ブンド）という団体に結集し、日共と決定的に分裂した。その主張は、学生運動の任務は革命を激発させるショック剤になること。観念形態としては、革命的共産主義者同盟（革共同＝三十二年結成）とも一部で共通するトロツキズムをとり、三十五年の安保改定阻止にすべてをかけた。そして社共が手を握った安保反対国民会議に「日和見主義」「お焼香デモ」などと強い批判を浴びせながら、派手なデモを連日決行し、檜舞台の国会周辺では、二回にわたる国会乱入や首相官邸乱入、羽田空港ロビー占拠を行なって〝勇名〟をはせた。

しかし、安保改定を阻止することはできず、安保闘争後は敗北感にうちひしがれながら、闘争の評価をめぐって果てしない分裂へのスタートを切った。まず、あのときしゃにむに革命へ直進すべきだったとする派（主として社会主義学生同盟や革命の通達などといわれるグループ）と、これに対し学生だけで

革命は成就するものではない、現にあれだけやったのに、労働者はついてこなかったではないか、とする派（主として革共同系）が対立、さらにその中間的な立場をとる派（通称、全学連書記局派）も現われ、スッタモンダの末、約半年後に社学同派と革共同派がたもとを分かち、書記局派は革共同派へ流れ込んだ。

革共同派は日本マルクス主義学生同盟（マル学同）の名のもとに、ブンドの主力と全学連中執派の主力をまとめ、安保当時は少数派だった評論家・黒田寛一氏の指導をうけ、中執派の〝後継団体〟の地位をしめた。そして三十八年四月の大学管理法闘争のさいは、当時の反日共系三派（かつての社学同系、社青同解放派、日共を飛出してきた春日庄次郎氏らの構造改革派）と共闘体制を組み、かなりの実績をあげた。

ところが三十八年二月、この共同闘争はマル学同にとってプラスだったか、マイナスだったかで、内部の論争が白熱化、結論のでぬまま、二派に分裂してしまった。かつての安保の花形スターで、全学連中執派―同書記局派―革共同という流れをたどった北小路敏、清水丈夫氏らのグループは「中核派」と称し、残った連中は「革マル派」を名乗った。さらにややこしいことには、マル学同と共闘した反日共系三派のうち、構造改革派は他の二派の過激なやり方についていけないと、分離し、独自の道を歩きはじめた。

こうして大学管理法闘争でせっかくまとまる方向をみせた反日共系集団は、「中核派」「社学同」「社青同解放派」「革マル派」のトロツキスト四派と構造改革派に五分された。

一方、日共系の反中執派からも構造改革路線に近いフロント派が分離、このほか、独立の団体とし

て、トロツキストの本家を名乗る第四インター派もあり、また、各派内に小グループもでき、三十九年はじめには、かつての大集団も、五流十三派という有様になった。この間の離合集散の経路をたどることはパズルをとくように（彼らにいわせれば、細分化されることこそ、彼らの純粋さを象徴するというが……）むずかしい。最後には全学連は一人一党のバラバラ組織になるのではないか、とさえ皮肉られた。

しかし四十年にはいって、日韓条約反対闘争がはじまると、革マル派を除く、トロツキスト三派（社学同、中核派、社青同解放派）の間に共闘機運が芽生えてきた。ついで一年余の早稲田騒動で三派は学園内の共闘会議の旗の下に結集し、三派全学連統一の動きがにわかに前進した。

この間、三十九年十二月、日共系はついにトロツキストとは別に「全学連」を結成、学園内の日常闘争を通じて勢力を急速にのばしはじめていた。

トロツキスト集団もこうなっては対抗上、分裂状態を続けるわけにはいかない。四十一年十二月、中核派、社学同、社青同解放派（現在の反帝学評）は、「三派全学連」として統一行動をとることを決めた。早稲田闘争で共同戦線を張った効果が、期せずして現われたかたちであった。

ここにおいて、分裂時代を終えて、全学連はいちおう日共系全学連、三派全学連、革マル全学連、構造改革系（民学同、フロント）の四派に再編成され、明大紛争、中大紛争と学内闘争を通じて、それぞれ主導権争いを続けることになった。しかし再編成されたとはいえ、六年間にわたる離合集散劇で、とくにトロツキスト集団には「闘争がはじまると統一話がもちあがり、闘争が終わると、各派の手柄をどう評価するかの、いわば論功行賞問題で分裂する」という悪いクセがついてしまった。それぞれの派がそれぞれの戦術と理論でこり固まっている以上、日共系全学連のように一本にまとまる可

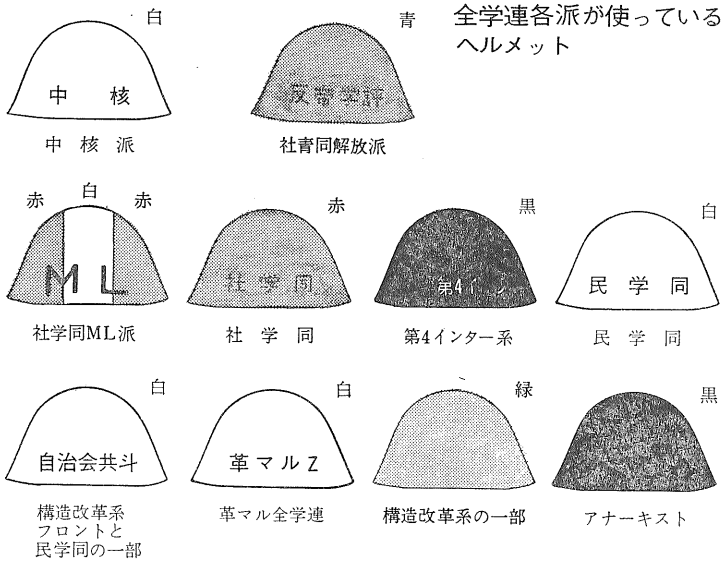
能性はいまやゼロに近い。そして、一時は統一した「三派」も、四十三年七月には、派内の主導権争いの対立が決定的となり、二派に分裂してしまった。

ヘルメット列伝

さて、こうしたいきさつをふまえた上で、いまの色とりどりのヘルメットのかげに渦巻くプロフィルをデッサンしてみると――。

まず白ヘルメット（白ヘルと略称される）。これは三派全学連中核派と革マル全学連の競合だ。互いに区別するため中核は白ヘルの正面に「中核」と大きな黒字を書きこみ、革マルは全学連のかしら文字、「Z」を書きこんだうえ、両わきに「革マル」と書き加える。同じ〝白ヘル〟ながら、この両派の仲の悪いこ

全学連各派が使っているヘルメット



と、さながら仇敵の如くである。時には石を投げあい、角材をふるって乱闘もする。入り乱れての肉弾戦となったときなど、同じ白ヘル同士だけにケンカの相手をとり違えないよう、文字の識別が大変である。色を塗り分ければよさそうなものだが、共に三十五年安保闘争の系譜を引く正統派意識が強く、どちらかが譲るというのはまず不可能。「白」こそ主流という美学（？）に生きている。これに加えて全学連の統一を呼びかける自治会共闘の学生たちの一部が羽田事件以後白ヘルに赤字で「自治会共闘」と書きこんだのをかぶるようになった。彼らの中には赤ヘルに白字で「自治会共闘」と書いたのをかぶるものもあり、ややこしい。

赤ヘルメット。三派全学連（現在は二派に分裂）の社学同の標識。中央大学の授業料値上げ白紙撤回闘争で大いに自信をつけ、以来、勢力伸長は目ざましい。デモの中に見られる〝赤ヘル組〟は日を追ってふえ、元気もいい。学内民主化、インターン制、登録医制反対などでもめた東京医科歯科大、東大医学部闘争の主力もこの赤ヘルなら、ことし六月「アスパック粉砕」という聞きなれないスローガンを叫んで、神田駿河台一帯を〝カルチエ・ラタン〟にしようとしたのも、彼ら赤ヘル組である。

赤白ヘルメット。社学同の赤ヘルメットのまん中にタテに一本太く白線のはいったもの。社学同ML派が愛用。この一派は毛沢東万歳を叫ぶ〝べったり中国派〟。さしずめ、中国の文化大革命に活躍した紅衛兵たちの日本版だと考えればよい。数はさほど優勢ではない。

青ヘルメット。三派全学連のうち社青同解放派、またの名を反帝学評とも名乗る一派だ。社会党青年部の指導下から飛びだした活動家の集団。しかし三派の中では最もおとなしい。角材を持つことも、ごくまれにしかない。四十三年新学期の一時期、いくつもの色に分かれて新入生をあまりとまど

わせてはいけないという〝配慮〟から、この青ヘルを社学同と同じ赤色に塗りかえたこともあったが、それも長続きはせず、いまは再び、元の青ヘルにもどった。

黒ヘルメット。一部少数のアナーキストや、四トロと略称される第四インターナショナル日本支部派が愛用する。数としては多くないが、〝色どり〟の点では欠かせぬ存在。

緑ヘルメット。デモ隊の中ではニュー・フェースならぬニュー・ヘルメット。ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）のデモなどに共闘して、参加する構造改革派の学生たちがかぶるようになった。

ヘルメットの色によって識別される各派の、考え方や行動の差は、全学連の分裂の歴史を背景に生まれたもの。したがって、その間のミゾは抜きさしならぬほどに深い。その意味では「三派全学連」と一応ひとつの組織になっていても、これを〝ひとからげ〟にするわけにはいかなかった。三派全学連は絶えず分裂の危険性を内包しており、それが端的に現われたのが四十三年七月の中核派と反中核派の分離だった。

各派各様の気質と行動

各派の行動や考え方の違いを、実際にあった話から紹介してみると、たとえば、電車には金を払って乗るべきかどうかというようなこまかいことからでも、うかがわれる。

秋山勝行・三派全学連委員長（中核派）はじめ中核派の学生たちは「電車に乗れば金を払うのがあたりまえ。タダ乗りなどして、世間からそっぽを向かれることは運動にとってマイナスだ」と意外にまじめな（？）主張をする。「タダ乗りなんて一度もしたことがない」というのが彼らの自慢のひとつであり、「全学連がデモに行くとき、新聞などで〝集団無賃乗車をする〟と十ぱひとからげに書かれるのは大変めいわくだ」とかみつく。どの派が好んでタダ乗りをし、どの派はいつでもきちんと金を払っていくか、もっときちんと見てほしいというわけだ。

四十二年十一月十二日の第二次羽田闘争では、三派全学連の各派がそれぞれ角材とヘルメットに身を固め、羽田に集結したのだが、このとき、中核派の学生たちは規定の料金を払ったのに対し、社学同や社青同解放派の学生たちはタダ乗りをやってのけた。が、世論のきびしい批判を受けて彼らも、その後はきちんと料金を払って乗っているようだ。「われわれもタダ乗りすることが決して目的ではない。ただ敏速な行動をしなければならないとき、結果として、そのための一時的、付随的現象としては、これからも起こり得る。われわれは中核派の諸君のようにムリしていい子になり、マス・コミからチャホヤされようとは思わないので、必要やむを得ないときはこれからだってタダ乗りもする」（社学同のある幹部学生の話）というわけだ。

タダ乗り是非論でさえ、これだけの意見の食い違いがある。ましてスターリン主義に対する態度、前衛党の組織づくりなどの本質論から始まって、既成の革新諸政党との共闘をどうするか。ソ連はじめ中国、北ベトナム、キューバなど共産諸国をどう評価するか。ベトナム戦争、したがってパリでの和平会談をどうみるか、これにどう取りくむか。ソ連や中国の核実験に賛成か反対か。現在の議会制

度、したがって選挙制度をどう考え、投票には参加するのか、棄権するのか。さらには美濃部都政をどう評価するか、あるいは沖縄返還闘争にどう取りくむかまで論争材料には事欠かない。

彼らはこのような問題のひとつひとつに対し〝独自〟の理論を展開、他派をきびしく批判、攻撃する。その論争舞台が各派のそれぞれの機関紙であって、中核派が「前進」、社学同が「戦旗」、社青同解放派が「革命」、革マルが「解放」、社学同ＭＬ派が「赤光」などと、それぞれ週刊から半月刊の新聞を発行している。

分裂したとはいえ、現在、学生運動の多数を占めるかつての三派全学連の中核、社学同、社青同解放の三派、それに革マル全学連、フロント（自治会共闘、構改派系）と日共系全学連の計六団体について、これらの問題ごとにどう意見を異にし、したがって行動も違ってくるか、以下粗描してみよう。

〝いい子路線〟をゆく

ごく大ざっぱにいえば、〝いい子路線〟をひた走るのが日共系全学連。民青同が執行部をにぎっているところから「民青全学連」とも呼ばれる。目標を常に学生大衆との共闘におき、運動の暴走をいましめる。デモで機動隊とわたりあうなどということは論外で、警察の指示どおり、きわめておとなしいデモを展開する。ヘルメットをかぶってくるような〝戦闘的〟な学生はひとりもいない。ノーヘルメットが原則。たとえば東大法学部の学生に訴える場合、彼らはこのような論法をとる。

「東大法学部の皆さん。皆さんは一生懸命勉強して、どうか司法試験や国家公務員試験に合格してください。そうして民主的な官僚となり、日本の民主化を進めてください。私たちもそのために及ばずながらお手伝いいたしましょう」。とにかく、そのやり方は批判の余地がないほど〝いい子路線〟を守ろうとする。全学連の外にいる無党派の学生たち、いわゆる〝ノン・ポリ〟の学生たちからまで、この日共系全学連は「闘わざる日共系」「歌って踊ってニコニコ民青」と批判されることがある。日本共産党にきびしくワクをはめられ、学園紛争などのさいも、穏健な戦術をとり、学生運動の枠をふみはずそうとしない。政治闘争至上主義で暴力革命を肯定する「三派系」に比べると、いかにも地味だが、この日共系全学連は主要国立大学の自治会のほとんどを支配、地方大学にも強く、全国各大学の自治会の七割までをその勢力下におさめているといわれる。

ついで〝いい子〟は構造改革系（自治会共闘）の学生たち。小田実氏らのべ平連と友好関係にある。全学連の再統一を訴え、多彩なデモを繰広げるのが特徴。現実的な面が強いせいか、神戸大、大阪大、大阪市大、岡山大など関西地区に拠点をもっていたが、いつの間にか各大学に支持者をふやし〝ノン・ポリ〟がはいりやすいグループである。三派のデモなどと違って警察の規制もそれほどきびしくはなく、安心してデモに参加できるのも強味である。東大の教養学部や慶応大学に支持者が多いのをみてもわかるように、いうなればノン・ポリの〝お坊っちゃん路線〟。日共系のデモに行くのはイヤだが、かといって三派のような激しいデモにもついていけないという中間派の学生が集まる。それでも次第に闘争性を強め、最近では緑のヘルメットも百人や二百人は登場した。デモの形態も日共系よりは激しく、時には逮捕者を出すこともある。四十三年の六・一五記念集会では五千人近い学生を集

め、治安当局を驚かせた。

つぎに〝いい子路線〟を行くのは、白ヘルの中核派。日共の一国社会主義論、官僚性をきびしく非難し、世界同時革命論を打出すトロツキスト・グループであり、「学生は革命の尖兵」という大衆行動による激発主義と政治闘争至上主義をとって、羽田、佐世保、成田、王子とあれほど激しい市街戦を展開したが、その一方で、タダ乗り論に見る如く、奇妙なほどに〝いい子〟であろうとする。社学同や革マル派のように選挙なんてナンセンスという学生が多い中で、積極的に投票に参加するばかりか、時には自ら候補者を立てることもある（昭和四十年の都議選の北小路敏、杉並区議選の長谷川英憲、あるいは革マルとの分裂以前に立てた参院選の黒田寛一など）。また美濃部都知事を「右翼社民でどうしようもない」とこきおろす革マルはじめ社学同や社青同解放派に対し、中核の学生たちは「なるほど個人的には右翼社民で批判すべきところもあるが、とにかく二十一年間の自民党支配をゆさぶる過渡的政治家」ということで積極的に支持をし、選挙も手伝った。議会主義を否定し、いまの議会制度が大衆の代表機関にはなっていないときめつけながらも〝行動は自由自在〟〝意外な柔軟さ、幅広イズムがわが派の特徴〟ということで選挙にも打って出るというわけだ。核兵器は〝明日の味方を殺す皆殺しの兵器〟ということで反対し「バリケードの背後にも味方がいる」というようなことも口にする。そういう立場から米国はもちろん、中ソ両国の核実験にも反対を表明する。

彼らは自ら〝われわれはもともと真面目な学生なのである〟としてこういう。

「十・八（第一次）羽田闘争に参加して虐殺された山崎君が上京した時、彼が持っていたカバンの中には一冊のノートと十冊の書物がはいっていた。一冊のノートはカントの有名な哲学書の書名と同じく

〝純粋理性批判〟という書き出しで始まっていた。十冊の書物はマルクスの〝経済学・哲学草稿〟、トロツキー〝ロシア革命史I〟、レーニン〝なにをすべきか〟、宇野弘蔵〝マルクス経済学・原理論の研究〟、〝経済政策論〟、朝日新聞社安全保障問題調査会〝アメリカ戦略下の沖縄〟、キルケゴール〝誘惑者の日記〟、J・N・シュリラール、〝ユートピア以後—政治思想の没落〟とほかにドイツ語とフランス語の教科書が一冊ずつ。暴力学生のイメージから山崎君のこのような所持品を目にすることは意外な事実であるかもしれない。だが十・八で虐殺されたのが山崎君でなくとも、やはり同じような結果が発見されたであろう。

われわれの闘いは政府・権力に対する闘いであり、われわれのスクラムも石も、必ず機動隊に向けられる。われわれはわれわれの運動を力で破壊する者の暴力に対する以外、決して暴力をもって対抗しない。全学連の学生が市民に対してはまったくまじめな学生であることが、ときに不思議そうに語られるが、われわれはもともとまじめな学生なのである」（秋山勝行他著『全学連は何を考えるか』より）というわけである。

こういう彼らをとらえて、他派の学生たちは「中核派はどうしようもないほどのスター意識に毒されている。いつもマス・コミ受けするかっこいいことばかりをねらい、なにかというと主流派意識を表に出す」と批判する。四十二年十月八日の第一次羽田事件以後、常に市街戦の先頭に立ち、〝ゲバ棒〟（角材のこと）を持たせれば、なんといってもいちばん勇敢なのは中核派だが、それだけに他派の反中核意識は強い。「出すぎたクイは打たれる」を地で行った感じだ。それに羽田以後半年余、秋山委員長を先頭に全国各地をとびまわって市街戦に首をつっこみすぎ、肝心の大学内での地盤をやや失

ったのが痛手である。主力の法政大学のほかは地方大学に支持者が多く、都内では東京工大を押えているぐらいで、東大などではほとんど壊滅状態である。

独自の闘争を進めるグループ

この中核派と激しい対立関係にあるのが、同じ白ヘル組の革マル全学連。この両派は三十八年四月までは革命的共産主義者同盟として〝同じカマのめし〟を食っていただけに、分裂後はかえって憎しみも深いらしい。敵対感情はぬきさしならないものがあり、角材でなぐりあい、血みどろの乱闘となることもしばしばだ。この革マル派はひとことで評すれば神経質なまでの〝唯我独尊主義〟である。常に独自の行動をとるのが特徴で、思想サロンふうだ。中核派のように街頭で角材を持ち、あばれまわるのはナンセンスというわけで、滅多に角材も持たない。この一年、地道に学内での勢力伸長につとめ、新学期になるや、他派をびっくりさせるほど学生を集め、さっそうと再登場した。拠点は早大を主力に学習院大、国学院大、日本女子大、国際キリスト教大など、他派との共闘には否定的だ。

どういうわけか、革マル派は東大でも早稲田でも文学部の学生に支持者が多い。アゴ一面にビートニックスタイルのヒゲをはやしている者も目立つ。

アジビラにしばしば難解な芸術用語を使ったりするので、大学教授などから「あれは前衛の芸術運動、人間研究のための運動だよ」といわれたりする。長髪、うすい色のジャンパー、白いピチッとし

たズボンとなかなか美的センスにすぐれ、全学連各派きってのスタイリストである。

第一次安保全学連の正統継承者をもって任じ、長らく国際学連の代表権も保持した。中核と並んで主流派意識、正統派意識が濃厚である。

ついで赤ヘルの社学同。四十三年にはいって、目ざましいまでに勢力を伸ばしている上昇組だ。安保闘争当時のブンド（共産主義者同盟）の継承者である。中核と並び三派全学連を背負って立つ両横綱である。中核派に劣らぬほど行動も戦闘的だ。中核派の王子闘争を〝地域埋没主義〟と批判し、「くやしかったら王子へ来い」などと中核派の学生から野次られると「なにを！　この王子埋没主義。王子から世界を見ることができるか」と反論する。個別闘争につっこんでいくことの限界を指摘し、〝総路線闘争〟を唱える。「王子でとどまってはいけない。政治の中枢部に闘争をぶりむけるべきだ」というわけである。こういう観点から、この社学同は〝アスパック粉砕〟という独自の闘いを進め、〝日本帝国主義の東南アジア進出の拠点〟、防衛庁への突入をスローガンとしてかかげる。学園闘争もなかなか積極的で、中央大学の授業料値上げ白紙撤回を勝ちとったのをはじめ、中大、明大を拠点に最近では東京医科歯科大、東大医学部紛争などでも主導権をにぎり、六月には神田駿河台の街頭に机や椅子を持出してバリケードを築き「神田を日本のカルチエ・ラタンに」というハプニング戦術にも打って出た。羽田以降、佐世保、成田、王子と市街戦の主導権をとり続けた中核派に代わって、最近ではこの社学同の方がより積極、果敢に機動隊と衝突、ゲバ棒や投石を繰り返している。

青ヘルの社青同解放派。社会党の指導下に生まれたが、社会党の体内に寄生してその栄養分を吸いとって肥大し、社会党の腹を食いやぶって飛出すという〝寄生虫戦術〟をとなえ、一時、社会党が手

を焼いたほどの活動家集団である。それでも他派の学生たちからみれば、社民的な弱さはまだ克服できていないと批判される。ゲバ棒ひとつにしても、羽田や佐世保のときは中核や社学同の学生と一緒に手にしたのに、成田や王子では世論を気にする社会党から待ったがかかり、ゲバ棒を捨ててしまったというわけだ。日本共産党―民青全学連の関係ほどではないにしても、社会党からのしめつけはまだかなりあるとみてよい。早大、明大、電通大などに拠点がある。ただ、この社青同解放派は、最近では反帝学評（反帝国主義学生評議会連合）という名称の方を好んで名乗り、高校生組織として、反帝高評というのも作りあげた。三派の中ではやや柔軟な方で一般学生も参加しやすいのか、デモの動員力は上昇中である。かつて社青同東京地本が母体となっただけに、中心はいまでも東京都内。美濃部都知事の選挙の時には一生懸命手伝ったが、その後、都電などの料金値上げ、東交合理化政策では美濃部知事と完全に対立、いまでは〝右翼社民〟だとして他派に劣らず同知事を攻撃する。

以上の全学連列伝を見てもわかるように、ヤマタのオロチのように分裂を深め、派閥抗争を激化させているが、これも学生たちにいわせれば「学生左翼の間に、理論的思想的選択の自由が完全に保証されていることの現われである」「また日本はもちろん、世界の左翼戦線が分裂しており、さまざまな思想が星雲状態にあることを素直に表現しているのである」（秋山勝行他著『全学連は何を考えるか』）ということになろうか。

ゲバルトの論理

あからさまに暴力を肯定

「学生は、指導のいかんでは革命的に変革し、プロレタリアの同盟軍となりうる」

活動家は、そう信じ込んでいるようだ。闘うことによって運動の主体が練磨され、力をつけるというのは左翼運動の力学的法則である。

それにしても、これほどあからさまに暴力を肯定し、積極的に正当性を主張する団体が、かつてあっただろうか。四十三年一月十七日、エンプラ阻止闘争の〝緒戦〟のあと、佐世保駅前で秋山三派全学連委員長を取り囲んで記者団が聞いた。

「機動隊がめっぽう強くって、君たちは傷つき、市民に同情が出てきた。この機会に、大衆を説得して君たちのいう正しい方向にひっぱっていく方法は考えないのか」

秋山委員長は、にこやかに、しかし冷然と答えた。

「感傷的な同情はありがたいが、拒否したい。同情からは何も生まれないから……。説得してもわからない人は、どうしてもわからないものです。われわれが正しいのだったら、それは勝つことです。それによって真の正しさは証明される。大衆は、そのときついてくるのです」

日共は、そういった考えをトロツキスト特有の大衆蔑視と非難しているが、それは、とりもなおさず彼らのゲバルト（暴力）の論理を語っている。

正門突破戦術にもウラが……

国家権力の暴力装置である機動隊は、完全に武装し、われわれを叩きのめそうとしている。だからわれわれも自分の生存をかけて武器をとり闘う。これは何ら非難されるスジ合いではない――というのだ。

そのため、三派全学連のゲバルトの特徴は「正門突破主義」とされていた。奇策を弄することを邪道とし、機動隊に正面からぶつかるところに、彼らの生命があった。だが、それほど単純ではない。

第二次羽田流血デモで警官隊に突っ込む学生たち（昭和42年11月12日，大鳥居駅付近で）

エンプラ闘争直前の年の暮れ、三派全学連の吉羽忠常任中執ら数人は、ひそかに佐世保にはいり、市街地と米海軍基地を結ぶ橋や基地とはかなり離れた名切米軍宿舎をカメラにおさめて帰った。

この入念な実地踏査が、佐世保駅から引込み線づたいに基地に突入するという奇襲を生んだし、佐世保川の干潮時をみはからっての側面渡河戦術となり、ついには帰りがけの駄賃とばかり、名切米軍宿舎にアタックするなど、千変万化のゆさぶり作戦となった。

戦術的にいえば、三派全学連の方が、どうも機動隊より上手(うわて)のようだ。四十三年三月十日の成田闘争で中核派は、集会場近くの基地裏に隠匿していた角材をゲバルトの直前に持ち出し、あれよあれよという間に武装し、電車でやって来た社学同は、途中下車、別動隊が準備していた角材を手に成田駅に乗り込んだ。そして、公衆の面前で部隊を編成、突撃訓練をしてみせたのも、このときであった。

羽田事件以来「全学連のキバ(角材)を抜かなければ」と歯ぎしりする警察当局も、ときどき裏をかかれる。秘密の〝武器搬入ルート〟は、ヘルメットをかぶっていない別動隊の手でいつ、どこにでも出来るから始末がわるい。王子に向かう途中、秋葉原駅で積み込んだ角材は、蛍光灯用ののダンボール箱につめてあった。駅の周辺は電気器具の問屋街だから、怪しまれるはずがない。

勝つためには手段を選ばない

「正門突破主義」とは矛盾するのだが、勝つためには手段を選ばないという論理も、彼らにとっては

当然至極なのである。

社学同委員長村田能利君(早大第一政経)は、ゲバルトの展望を次のように述べている。

「間接民主主義のもとでは、革命は実現できない。権力を倒すためには既存の方式ではダメであり、組織された暴力を行使する以外に方法はない。赤いヘルメットと棍棒は、闘争のあるところならどこへでも行く。これまでのゲバルトは、たぶんに自然発生的であったが、もっと意識的に強化するため、大隊、中隊、小隊とわけ、軍事組織として行動する。したがって、武器も、敵の出方によってはさらに強力なものにする用意がある。七〇年闘争には最低、火炎びんを投げ、竹ヤリを持つようにしたい」

まことに勇ましく調子のよい進軍ラッパである。

〝ゲバ棒〟――ゲバルト(暴力)、角材、棍棒の混成語。「闘う全学連」のシンボルでもある。このゲバ棒の論理は何か。

「第一次、第二次両羽田事件を通じてわれわれは何を学んだか。安保以来これまで七年間、われわれのデモは、敵の権力、機動隊によって不当にも弾圧され、屈辱的に圧殺されつづけてきた。サンドイッチ規制というメチャクチャなやり方がその象徴だ。しかし、われわれがゲバ棒を持ち、投石で抵抗すれば、この不当な弾圧もはねのけることができる。そういうことをわれわれは二つの羽田闘争を通じて学びとった」

秋山勝行全学連委員長はじめ中核派の上部指導団体、革命的共産主義者同盟の本多延嘉書記長、北小路敏、清水丈夫両政治局員、全学連中執の久保井拓三君(中大)、社学同の上部指導団体、共産主義

者同盟の高橋良彦書記長、佐伯武政治局員らは口々にこう語る。

「われわれ闘う全学連のことをマス・コミは〝暴徒、暴徒〟と書き立てるが、われわれ人民には政府、権力に抵抗し、反抗し、これを拒否する権利があることを忘れては困る。われわれがその正当な権利を行使しようとするのに、敵権力がこれに立ちはだかり、不当にも弾圧し、抑圧しようというのをどうして黙ってみていなければならないのか。相手は完全武装された権力集団である。その権力集団に、たかがプラカードの材料の一つにすぎない軟質の角材を持って立ち向かうのが何で悪いのか。われわれだって棍棒を持たずに自由なデモができるのなら、なにをすき好んで危険を冒してまで棍棒を持つものか。棍棒でも持たない限り、自由なデモができないことをこそ問題にすべきなのだ」

〝ゲバ棒は最低の抵抗〟

「それに、そもそも」と彼らの論理は豊臣秀吉の刀狩りにまで、話がさかのぼる。

権力が武装している以上、これに対抗して民衆もまた武装する権利があることをわれわれは知るべきだ。日本の人民も太古以来、身を守る武器を肌身離さず持ってきた。が、その当然の権利を秀吉の刀狩りによってわれわれは奪われた。以来、権力だけが武装し、人民はまる裸というおかしな関係が続いた。いつの間にか、それが当然のように人民の方も思い込んでしまったのだが、われわれのゲバ棒武装は刀狩り以前の状態にもどっただけにすぎない。人民が本来持っている〝武装する権利〟をと

りかえしただけのことなのだ。われわれが角材を持ってデモをするとマス・コミは大騒ぎし、警察は取締まりに躍起になるが、角材なんてあれに板をつければプラカードになるだけのこと。だいたい角材を持って道を歩いてはいけないのか。とにかく相手は警棒を持ち、ピストルを持っているのだ。われわれ民衆がこれに対抗して手にとれるだけのもので抵抗してどこが悪いのかというわけである。

もうひとつ、彼らが断言してはばからないのは、「われわれは〝歴史の産婆役〟としての暴力は肯定する」ということだ。いまはせいぜい角材や投石でしか権力に立ち向かうことはできないが、われわれはいつか、機関銃やそのほかの近代兵器で武装し、機動隊に立ち向かう。その時にはサンドイッチ規制、そのほかこれまでわれわれがたえしのんできた数々の辱しめをきっと仕返ししてやる。いつかきっと機動隊の群に機関銃を撃ちこんでやる。

歴史の産婆役としての暴力――を肯定する彼らは熱っぽい口調でこういいきる。七〇年安保を前に政治の興奮度、〝政温計〟はぐんぐん上がるばかり。六〇年安保以後、相互の憎しみがエスカレートするばかりのデモ隊と警備陣との対決から今後何が生まれるのだろうか――。

甘ったれラジカリズム？

「あれだけ激しいデモを繰返して、死者が出ないのがむしろ不思議なくらい」とある外人記者は首をかしげた。ヘルメットで頭を保護し、角材を振回し、コブシ大の石を矢のごとく投げつけて進む三派

系全学連。これに対し色は違えど、もっと頑丈なヘルメットに、これはさすがの全学連も調達できぬスネ当て、小手、胴着、左手にはジュラルミンのタテ、右手には警棒の、警視庁機動隊。これが双方、ウナリをあげ、トロイ戦争よろしく目をむいて真正面からぶつかり合う激しさ。

それでいて死者が出ない……。

命のかかった戦争や革命を幾度となくくぐり抜けてきた欧米人にとっては、それが不思議でならないのである。

日本人でも、たとえばある雑誌で、元暴力団・東声会員〝人斬り五郎〟こと藤田五郎氏は、作家・野坂昭如氏との対談で、三派全学連についての感想を求められたとき、こういっている。

「――あれだけの武装したかたまり同士がぶつかり合って、死人（しびと）が出ないのが不思議です。私たち死ぬか生きるかの境地を歩かされてきた者にはうらやましいような話です。それは、三派系全学連の人たちを、一億の人が情愛をもって見守っているからではないですか」

食うか食われるか、ではないところでやり合っているのが、うらやましいというのであろう。

フランス、西独をはじめ、欧米各国の学生運動をみても、学生たちは激しい実力行使を敢行している。しかし、それに対する警察側の鎮圧手段がまた容赦ない。騎馬警官隊がデモの中に乗入れて規制する（ロンドン、ニューヨーク）、デモ隊集結前に地下鉄入口などで全員検挙（パリ）、ときにはサーベルを抜いて追い散らす（ブリュッセル）、それもまだいい方で、フランス、西独では射殺、あるいは〝射殺未遂〟事件にまで発展している。断固たる態度でのぞむのである。

キング師暗殺のあとの黒人騒動での死者四十三人は特殊ケースとしても、欧米でいまの日本の三派

全学連並みのデモをやったら、そのつど死者の四、五人ぐらいは出るのが常識であろう。

韓国では、学生デモの高揚期に、警官隊はデモ隊に向けて一斉に発砲した。学生たちは学友のシカバネを乗越えてなおも突入していった。インドネシア、南ベトナムの例をひくまでもなく〝暴力デモ〟とは本来そういうきびしい情勢の中で、文字どおり「決行」されるものであった。命をかけて、学生たちは「正義」と信ずるもののために戦った。戦争、革命、暴動……は、学生にかぎらず、そういう命とひきかえの〝止むに止まれぬ〟行動でしかあり得なかった。

三派系全学連の〝過激〟なデモと、国家権力による規制のさまざまなケースをみると、それが全く革命とは異質な状況下にあることがわかる。警棒で頭を割られる（したがって場合によっては半身不随となる）おそれはたしかにあるが、デモに参加するそのことだけで命が保証出来ない、あるいはその覚悟がいるという極限状況はない。

だから学生たちは「状況に応じて」角材をふるい、石を投げ、機動隊の警棒に向かって突撃し、形勢不利とあらば逃げることが出来る。逃げ込んだ自宅や下宿にまで警棒が、つまり国家権力が追いかけてくる心配はまずない。

国家権力という最大の暴力（ゲバルト）に挑戦することによって大衆を目ざめさせる、と学生たちはいう。だがその目標はたかだか国家権力の末端の機動隊というものにすぎない。真の意味のゲバルトを正視し、それと戦ったマルクスやレーニンにいわせたら、マルクス・レーニン主義の矮小化（わいしょう）ときめつけるかもしれない。甘ったれラジカリズム（過激主義）という批判は、そこのところをついているのであろう。

その台所

「一日五十円で闘う」

デモのたびに多数の負傷者と検挙者が出る。たった一回のデモで二百人、三百人の大量検挙者が出ることも最近ではめずらしくなくなった。そのたびに彼らは保釈金を調達し、治療費をまかなわなければならない。〝少数精鋭〟の彼らには、十分な後続部隊がないから、そうしなければたちまち組織の壊滅——他派勢力の伸長というピンチに見舞われるからだ。「われわれの全精力の半分は金集めに向け、あとの半分で闘っているといってよい」(岩本・中核派書記長)というのも決して誇張ではない。

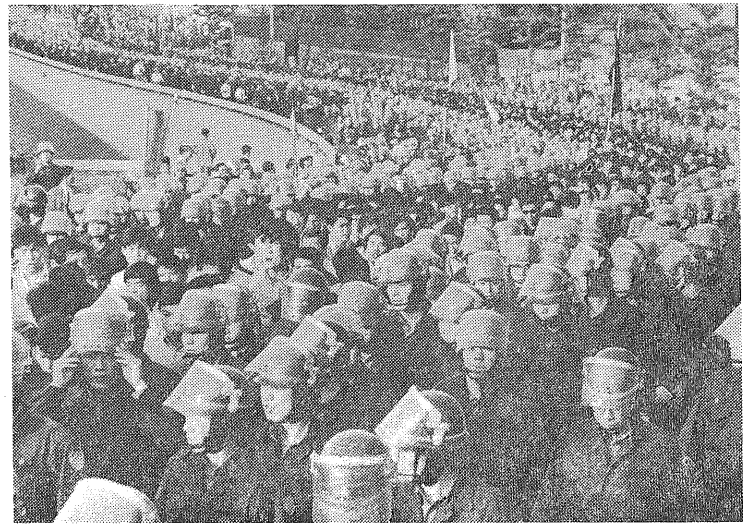
彼らの資金源——といっても、その第一にあげなければならないのはまず、学生一人々々がほとんど〝自前〟でデモに参加していることである。活動家には中流家庭の子弟が多い。食費や交通費、ヘルメット購入費などは自前で調達するのが普通だ。アルバイトをやりながらの活動家もいる。宿泊は学生寮や大学の教室にもぐり込むので無料。〝遠征〟の場合も学割を使うから割安だ。それに食事も「コッペパン一つにナマネギをかじりながら」といわれるように、若さにものをいわせて最低ですませてしまう。延々十数時間に及ぶ戦術会議でも、インスタントラーメンに牛乳一本でがんばる。警官隊の一日の食費が五百円と聞いた中核派の幹部は「僕らは一日五十円で闘える」と豪語した。なによりも危機意識を背景にした使命感があるから、「下宿以下」の生活でもエネルギーにはこと欠かない。

さてそうはいっても、やはり組織活動であり、激しい闘争を組むからには、まとまった金がなければ戦えないのである。彼らの大口の資金源には、

①翼下各大学自治会費
②資金カンパ
③一部の商社の寄付

の三つがある。

第一の自治会費は、学生一人当たり年間額は、たとえば北大、東大で百円、早大で三百円(一文、一法)と安いところもあれば、千円を越す私立大学もあり、平均で四、五百円程度。しかしこれが学部や大学単位で集まれば軽く百万単位の金額になる。しかも自治会費はほとんどの大学が授業料と一緒に窓口で徴



砂川基地拡張に反対，両側を機動隊にはさまれてデモする学生たち(昭和42年5月，東京・溜池付近で)

収してくれる。いわばサラリーマンが天引きされる税金のようなもので、一番固い財源である。だから自治会の指導権を握ることは各派にとって財政面からも最大の関心事になる。

治安当局の資料（四十三年四月現在）でみると、全国大学七百五十自治会のうち、

▽日 共 系　三百十六自治会

▽反日共系
- 三　派　七十六自治会
- 革マル派　二十二自治会
- 構 改 派　三十一自治会

▽中立または態度不明　三百五自治会

となっており、それぞれの所属学生数から自治会費の収入額（年間）を概算すると、

日 共 系　一億八千万円

三 派 系　一億円

革マル派　二千五百万円

構 改 派　三千万円

という数字が出る。ほとんどは各単位自治会で使われるが、そのうち、ごくひかえ目に一割が各派執行部の活動費に回されるとみても、かなりの額だ。全学連の勢力の強い大学では、自治会費の収支は一切執行部が握り、非公開で運用しているので、意のままに自派の伸長のために使えるわけだ。

自治会費は学年末に収支を公表する仕組みになっている。しかし会計報告はガリ版刷りの簡単すぎるものだったり、学生新聞の片すみに小さく〝広告〟されたりで、概して不完全な報告ぶり。そこ

で、早大商学部、専修大などで自治会費の取扱い方が問題となり、早大商学部では会計に不明朗な点があったとして四十一年九月から約一年間、自治会費の徴収をうち切った。

案外集まる街頭資金カンパ

第二は街頭や学内における資金カンパ。

三派全学連の街頭カンパに対する市民の反応はかなりよい。特に佐世保のエンタープライズ事件のときは、全学連でもびっくりするほどの金があっという間に集まった。佐世保で〝ヒーロー〟になった中核派を例にとると、〝一日休戦〟の一月二十日に佐世保八十万、博多七十万、終了後の二十二日に博多六十万、二十三日佐世保三十万――わずか三日間で二百四十万円という記録を作った。

第一次羽田事件のあとでも、その〝暴走〟ぶりにかなりの批判があったにもかかわらず、五日間で全国の主要駅や大学構内で二百万円を集めたという。この事件ではその後、水戸巌、日高六郎、小田切秀雄、野間宏氏らの学者、文化人を発起人とする〝救援グループ〟が独自のカンパを開始、第二次羽田事件、佐世保事件と継続、四十三年五月までに合計百七十万円を集め、引続き活動を続けている。

成田闘争、王子野戦病院闘争とカンパの集まり具合はやや下火になったが、それでもヘルメットにホウタイ姿の彼らが街頭に立てば、たちどころに万単位の金が集まるといわれる。

四十二年十二月と四十三年六月には三派系支持の社青同、反戦青年委などの労働者によって「ボー

ナスの一五パーセントカンパ」の訴えが出され、これも好成績をあげた。

学内カンパは、クラスやサークルの友人や教授を個人的に説得して集めるのが主といわれるが、都内A大学で〝千円以上出した一般学生百人〟、B大学では〝一人で一万円出した学生〟、C大学では〝一人で十万円出した大学教授〟などの「記録」がある。

第三の一部商社などによる資金寄付については、羽田事件の捜査で社青同解放派、社学同ML派などが家宅捜索を受けたとき、日中貿易関係商社数社が五万円から十万円の寄付金を出していたとみられる証拠書類が押収されており、こうした〝友好商社〟筋を通して三派系に年間百万円単位の資金が流れているのではないかと治安当局ではみている。しかしこれもその規模、出所などについてはほとんどウワサの域を出ておらず、「国際的な資金ルート」「右翼スジからの資金供給」などについて、三派系全学連は真っ向から否定している。

かさむ保釈金

さて、こうして集めた金の行く先は——。

まず大口は、逮捕学生の保釈金である。第一次羽田事件と王子デモで二度にわたって逮捕され、二度とも保釈で出てきた秋山勝行全学連委員長の保釈金は各三十万円。学生には大金である。第一次羽田事件から第二次羽田—佐世保—成田（第一次—第三次）—王子（第一次—第十二次）の各事件の起訴人員

は二百七十七人、うち保釈金を積んで出たのが二百二十二人、保釈金は千八百七十万円に上った。一人平均八万四千円である。これに弁護士の依頼費など法廷費用が相当かさむから、台所は苦しい。

つぎに大口は負傷学生の病院治療費だ。機動隊との乱闘による負傷の程度は、数ヵ月たっても退院の見込みのつかない重傷者から、病院での手当てだけの軽傷者まで含めて、さまざま。しかも大半は親がかりの自費治療なので、全体の金額はつかみにくい。全学連各派では、闘争を持続するためにどうしても保釈金の方へ優先して金を出してしまうので、一部の入院学生の治療費の一部を負担するのがやっとだという。入院先の治療費が未払いというケースも多い。

こうした大口のほかに機関紙やビラの印刷発送費、立看板費、電話代、バスのチャーター代、オルグ代などがあるが、活動家個人の衣食住にかかる費用は一部の幹部を除いてはほとんど自費でまかなわれる。たとえば佐世保デモに参加した東京の学生は、東京—佐世保間の往復汽車賃七千円をはじめ、七日分の食費などギリギリに切りつめても一万円はかかったというが、費用は自分持ち。執行部は「一万円以上用意しない者は行かせない」という方針を出した。ほとんどの学生は学内カンパ、個人カンパ、借金などで一万円を調達して出かけた。こうした遠征以外は、中大籠城事件などのような場合、貸ぶとん代百五十円に食費を含めて一日五百円でまかなうというのが常識だ。

一個四—五百円のヘルメットもほとんどが自前。乱闘のたびになくしたり、へこんだりし、買い替え費用もばかにならない。飯田橋事件のとき、中核派は新宿の材木店から、長さ二メートルのタル木九十本とベニヤ板を四万円で買い、一個五百円のヘルメットを二百個買って活動家に配った例もあるが……。

安保ＯＢ

闘士の変身ぶり

昭和三十八年二月二十六日。この日の夜九時半から三十分にわたってＴＢＳラジオから流された「録音構成」は、大変なショックを世間に与えた。大げさにいえば、学生運動に対する一つの大きなイメージ転換につながるものでもあった。

ＴＢＳの放送は「ゆがんだ青春――全学連闘士のその後」と題して、安保闘争当時の花々しい全学連の指導者たちの三年後（当時）の姿を暴露してみせたのである。

当時の録音構成の一部をここに再録してみると――。

音楽がやむと、最初にナレーターの声で、

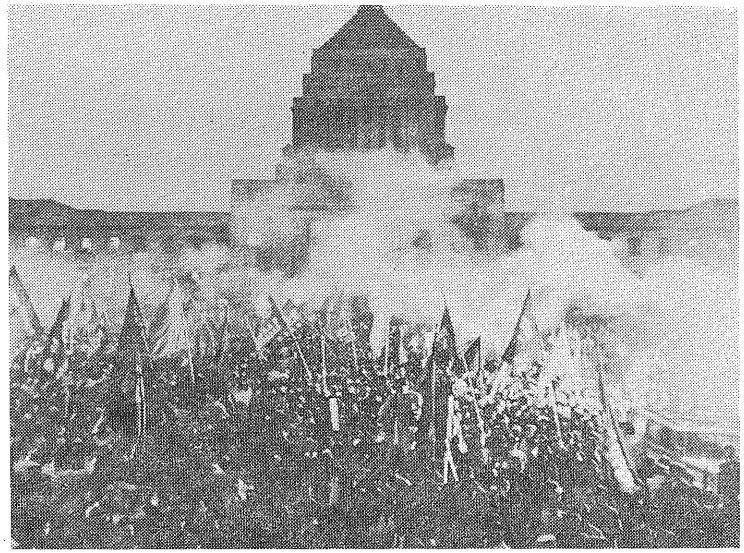
「一九六〇年、忘れもしないこの年、国会は連日のごとく、安保条約に反対する人びとの波で埋まった。多くの人びとは靴をへらし汗にまみれ、傷つきながらデモを繰返した。あらしを呼んだ安保闘争の主役、それは若いエネルギーに満ちた学生たちだった」

ここで安保闘争当時の社会主義学生同盟委員長、篠原浩一郎君の国会前での勇ましいアジテーションがはいる。

「政府の権力とピストルと棍棒に監視されたなかでェ、ショボショボとした請願デモを行なうがァ、どれが本当に安保を打開する力であるかということをォ、わたしたちはきょうここで示さなければならないッ！　それは何によって達成されるのかァッ！　警官隊が何千、何百繰出されようともォ、装甲車が幾十台並べられようともォ、催涙弾が投げられようともォ、消防車が出動しようともォ、われわれの要求を国会につきつけるためにィッ……（以下略）」

つぎにまた短いナレーションが続き、三年後の神戸港の場面となる。アナウンサーのインタビューに答えているのは、いまは港内のある荷役会社で働いている篠原君。

「まあ、いってしまえば、安保はつまらんしね、もう終わってしまったんやしね。ほかにやっていくこともないからね。まあ、ぼくら



国会議事堂前で安保改定阻止の全学連デモ（昭和34年12月）

はいまのこの二十世紀にマルクスに帰ってみても、方法だけを知ってしまっても、これは、こんどはどうするのか、ということはなにもわからんわけやな。……（中略）いやぁ、現在、革命をやるような条件というのはどういうふうになっているのかと、まあそういうようなことから……（中略）それじゃ、しばらくのんびりして、みつけてゆこうか、というようなことですね」

録音構成はそれからつぎつぎと、安保当時の全学連指導者たちのその後の姿を紹介していく。委員長の唐牛健太郎君は右翼で名高い田中清玄氏のもとへ走り、財務部長の東原吉伸君は尼崎の土建会社の現場監督となっている。そして彼らが、安保当時、田中清玄氏はじめ〝敵〟側の財界人から闘争資金をせびり歩き、その一部を自分たちの生活費にもあてていた事実が、彼ら自身の口から語られてゆく。

森田実君（元書記長）「安保のころは資金が必要だったんで、いろんなカンパ活動を実際やったわけですね。……（中略）そのころにはもう、戦後世代のドライな考え方ですね。坊主が憎くもケサは憎くない、というわけで、だれから金もらったって、金は金じゃないかと……」

全学連の一人「ぼくらはね、安保のころはヒトラーをいっしょうけんめい研究したんですよ。それに戦前の日本の戦術要綱とかね。いま、いっしょうけんめいいわれている徳川家康だとか、ああいうのを読んだんですよ。……（中略）とくに技術的な面なんかではひじょうに教えられるとこが多いんですよ。ぼくらはそういう予想をもって右翼の人たちともつき合ったしね……」

それから数ヵ月後の毎日新聞社会面には、彼らの一部が、田中清玄氏を通じて暴力団とも深いつながりを持っていたことが紹介されている。共産主義者同盟の書記長、島成郎君（東大医学部）が、篠原君らとともに、関西最大の暴力団、山口組の田岡一雄組長配下の暴力団員の家に寄食していたときのことなどが……。

闘争予備軍の〝安保世代〟

昭和三十五年の安保闘争当時、全学連を理論的にも実際面でも支えていたのは、その上部団体の共産主義者同盟（通称ブンド）だった。ブンドといえば、当時の活動家学生たちの総司令部であり、バックボーンであり、一枚岩的な権威を持っていた。全学連委員長をはじめ、主だった幹部はみなブンドの書記局員でもあった。その中枢部を握っていた島、森田、唐牛、篠原らの意外な半面が、明るみに出されたことは、安保当時、デモに参加した学生やＯＢたちに、驚きや幻滅、敵意をもって迎えられた。

しかし同時にまたそれは、学生運動に（したがって学生活動家に）従来は考えられもしなかったある新しい要素――異質な価値観が入り込んできつつあることを気づかせた最初の〝事件〟でもあった。引用したＴＢＳの録音構成の中の彼らの発言は、いまの三派全学連の一部にみられるドライな一面と、驚くほど似通っているところがある。

革命のための「殉教者」的イメージは、安保以後の学生活動家の間からは急速に後退していく。

「組織」やそれによって支えられた「権威」は、これ以後、多極化の方向へ向かう。

学生活動家が大学を卒業すると、あるいは卒業が近づくと、あっさりと足を洗い、大企業を求めて就職していく、あるいは暴力団でも右翼でも利用出来るものは利用してはばからない、といった傾向が、ほとんど内面の抵抗なしに行なわれる風潮が一般化してくるのも、ちょうどこのころからである。

戦前の共産主義的人間像とは異質の、ケロリとした顔つきの〝革命家〟たちが登場してくる。戦前がマジメで、安保以後が不マジメと断定することはできない。時代は変わりつつあるのだ。

それに大学を卒業し、各企業の中に埋没しているとはいえ、いったん事があると非常に燃えやすい予備軍的役割をこの〝安保OB〟〝安保世代〟が果たしていることもまた、無視できないところである。

篠原浩一郎、唐牛健太郎両氏のような〝不幸な出来事〟も事実なら、その他多勢の無名の安保OBが、それぞれの分野で地道な活躍をしているのも、より大きな重味を持った事実である。その活躍分野も司法界、学界など比較的自由な姿勢がとれるところはもちろん、各種の大企業から中小企業まで、ほとんどどこに行っても〝安保OB〟にぶつかる。だから佐世保にしろ、王子にしろ、新宿にしろ、全学連のデモをとりまく何倍かの数の〝群衆〟の中にはこれら〝安保OB〟が必ずといっていいほど存在する。彼らはデモと群衆、学生と労働者の橋渡し、パイプ役を果たしているのだ。その意味で現役の全学連の学生たちにとっても、この〝安保OB〟は頼りになる存在だ。「〝安保世代〟と呼ばれる大量の青年労働者が、今日労働運動や若手知識人の中におり、日共を相手にせず、社会党を軽べつし、自主的な先進的闘いを支持しているのは、安保闘争時の学生運動を支配した思想の蓄積なのである」という次第である。

いまも指導者として残る

しかし、そういう、いわば予備軍的無名の安保OBのほかに、安保以後も一貫して全学連の理論面・実際面の指導を果たしてきた〝ブレイング・マネジャー〟的OBも存在する。というより、全学連のほとんどすべての派が、安保OBによってひっぱられているという状態なのである。

この安保OBがいちばん多いのが中核を翼下におさめる革命的共産主義者同盟全国委員会派。書記長の本多延嘉氏（早大OB）はじめ北小路敏元全学連委員長（京大）、清水丈夫同書記長（東大）、陶山健一、倉石庸、藤原慶久、田川和夫、山村克などの各氏が顔をそろえる。社学同を指導する共産主義者同盟の高橋良彦書記長も労組（全電通）安保OBであり、ほかに岩田弘（立正大経済学部教授）、佐野茂樹（京大）、服部信司などの各氏がいる。ついで革マルには教祖的存在である哲学者の黒田寛一氏のほか、根本仁、鈴木啓一の各氏。フロントでは名だたる安仁こと安藤仁兵衛氏などがいる。いずれも安保以後も一貫して全学連とのかかわりあいを持ち、七〇年安保に備え、いわば彼らをトレーニングする役割を果たしてきたのだ。

なかでも象徴的なスターは北小路敏氏。彼が六七年の第一次羽田事件で逮捕されたとき、「北小路はまだ学生運動の先頭に立っているのか」と数多くの安保OBたちを大いに驚かせた。その驚きのと

おり、北小路氏らは安保後も一貫して全学連および青年労働者の中に入り、彼らのいう、真の前衛、革命家の組織づくりに突進している。その動機、エネルギー源はなんといっても六〇年の安保闘争を通じて得た闘いの自信と同時に挫折感である。象徴的には六〇年六月十八日、安保条約が自然承認されるのに抗議して国会をとりまいた二万余の学生、労働者、市民とともに徹夜で坐りこんだときのこと。「なぜ、再び国会や首相官邸に突入して政治をゆり動かさないのか」というデモ参加者からの突上げに、北小路ら当時の共産主義者同盟（ブンド）の指導者は必死にこらえた。前夜、彼らは戦術会議で「革命の時、いまだ熟さず。労働者大衆の支援がなければ、学生だけでは革命は起こせない」ということで、激論の末、国会、官邸突入はしないと申し合わせていたのだった。この方針転換が正しか

新安保反対、ハガチー来日阻止デモ（昭和35年6月、ハガチー氏はヘリで羽田を脱出）

ったのかどうかをめぐって、その後全学連は四分五裂を繰返すことになるのだが、このとき北小路らを強くとらえた思いは〝ブンドの限界〟〝労働者を味方にしなければなにもできない〟ということだった。それゆえに彼らはその後、より強力な前衛党づくり、労働者の中への浸透に全力を尽くしていった。

北小路敏氏はこれまで二回、左翼陣営の中での転向、ないし脱却を試みている。一回目は三十三年九月、共産党からの脱党だった。それより三年前の三十年七月、北小路氏は、高校三年のときに入党、京大入学後も学生党員として活躍してきた。しかし、共産党の平和路線への戦術転換とともに、彼にとって第一の苦しい選択が始まった。火炎ビン闘争（注1）、スターリン批判（注2）、ハンガリー事件（注3）などを通して共産党への疑問が強くなっていった。

〔注1〕**火炎ビン闘争**　日本共産党が一九五一年（昭和二十六年）―五二年にとった極左冒険主義的戦術。火炎ビンを自製して権力に抵抗したが、一般の支持を得られず、五五年第六回全国協議会で自己批判した。

〔注2〕**スターリン批判**　一九五六年、ソ連共産党第二十回大会でフルシチョフ第一書記が、スターリン政治の個人崇拝、粛清のいきすぎ、官僚化などをきびしく批判し、党の集団指導制を確立した。ソ連、各国共産主義陣営で神聖視されていたスターリンだけに世界的なショックを与え、今日の中ソ対立にまで尾をひいている。

〔注3〕**ハンガリー事件**　フルシチョフのスターリン批判をきっかけに、ハンガリー国内で民主化への要望がおこり、民衆の暴動にまで高まったが、一九五六年秋、ソ連は軍隊を出動して暴動を鎮圧、自由化への道を閉ざした。

「共産党を唯一の前衛だと信じていた僕たちは共産党を捨てるかどうかの瀬戸際に立たされた。共産主義は正しいが、共産党はまちがっている。その結論に達するまでは本当に苦しみました」というわけだ。

父親の昂氏は党員、息子の敏氏は脱党者。コミュニストとトロツキストの親子ということで世間に騒がれもしたが、その胸のうちはそれほど簡単なものではなかった。

〝安保を乗越えた〟意識

とにかくこうして共産党をぬけ出た学生たちが集まって共産主義者同盟をつくり、六〇年の安保闘争を果敢に闘ったのだった。その結果が、あのみじめな敗北感。北小路氏ら当時の全学連執行部は、「労働者を忘れて何が革命を起こせるか」という革命的共産主義者同盟（労働者派）の黒田寛一、本多延嘉氏らの批判を腹立たしいが、しかし反論のしようがない思いで聞いた。北小路、清水、藤原、田川、陶山、倉石ら現在、中核派の中核をなす安保ＯＢの二度目の〝転向〟がこの時始まった。彼らはこれまでの自己批判をしながら、ブンドを離れ、革共同へと走ったのだ。以後の彼らは六〇年六月のあのみじめな敗北感を二度と繰返すまいと心に誓いながら、「安保を乗越える」ことを目標に、学生の中や労働者の中に精力的にはいっていった。そして苦しみと屈辱の七年間。彼らは第一次、第二次羽田闘争のあと、ようやく「われわれは安保を乗越えた」と自信を持って口にするようになった。ひとつは六〇年安保の時には見られなかった労働者の支援、すなわち反戦青年委員会のバック・アップをかちとれたことである。もうひとつは六〇年安保の時とは比較にならないほどの全学連の激しい行動エネルギーである。羽田以後の三派全学連はまさに〝夜を日についで〟市街戦に陣地戦に出撃。とに

かく連日、うんざりするほどのエネルギーを発散させる。六〇年安保のときは一ヵ月に精々三回から五回のデモだったが、羽田以後は警備陣がアゴを出し、交通や警らの一般警察官までに助けをかりねばならないほど。たとえば四十三年六月一ヵ月をとっても、一、十二、十四、十五、二十一、二十六、二十八、三十と八日間もデモや集会が行なわれ、その間東大はじめ、東洋大、日大、慶大、立正大、上智大、東京医科歯科大、駒沢大、早大と大学紛争も果てしなく続く。この激しいエネルギー。確かに北小路氏らのいうとおり、いまの全学連は「安保を乗越えた」ことは間違いない。

パワーの周辺

〝大人〟の反戦組織

六・一五安保闘争から八年後の昭和四十三年六月十五日、ベ平連などの呼びかけで七千人のデモが銀座を埋めた。赤、白、黄、緑、黒と旗の色は種々雑多。旗に書かれた団体の名称もマチマチ。「革デ同」――さて、何だろうと歩道の見物衆は首をかしげたが、どうやら革命的デザイナー同盟というグループらしい。

「反戦、浪人」とだけ書いた旗もある。持っていたのは、クリクリ坊主のいかにも高校浪人生タイプ、それでいてむしろ誇らしげだ。日の丸の旗もあった。右翼の飛び入りかな、と一瞬、自分の目を疑った人もいたようだが、よく見ると旗の下に小さく「安保改定阻止」と書いてあった。

サイケ調の服を着た少女。髪をボサボサに伸ばし、土人のような首飾りをしたヒッピー青年もいる。混然として彼らは歩いた。

「いや驚きましたなあ。デモといえば、すぐ赤旗とインターナショナルの歌を連想するのですが、すっかり面くらいました」

戦中派サラリーマンのいつわらぬ感想であった。

その夜、日比谷野外音楽堂では、中核派学生と革マル全学連が棒切れを手に演壇の奪い合い。すりばち型のスタンド席では、各地区反戦の青年労働者たちが、息をのんでことの成行きを見守った。

反日共系全学連は、離合集散と抗争を重ねながら、共通の世代に働きかけ、勢力を浸透させている。

労働者層とのパイプ役を果たしているのが反戦青年委員会の組織であり、さらにその周辺には、反戦をスローガンに掲げる市民団体が続々と生まれた。

「七〇年闘争における統一戦線の中枢は、全学連と反戦青年委員会だ」と三派、革マルともに公言している。

四十年八月、社会党、総評が、日韓闘争の中で、日韓条約批准阻止とベトナム戦争反対の闘いにすべての青年、学生を立ちあがら

米空母の佐世保寄港に反対して警官と乱闘する学生たち（昭和43年1月）

せ、青年の広範な統一闘争として大衆運動の突破口を開かせるため社青同、総評青年部などを主要母体として結成したのが反戦青年委員会である。

行動の原理は、

①個人の創意を運動に反映する

②運動の自立性をかちとる

③青年学生の広範な統一を実現する

「創意」「自立」「統一」の三原則が、この組織をささえる骨となっている。

そして重要なことは、各団体相互の「下からの統一」を強調していることである。

行動方針を協議するため十四労組（国労、全逓、全電通、全農林、全林野、動労、全専売、都市交通、全水道、日教組、自治労、私鉄総連、合化労連、全日通）の青年部と「日本のこえ」が運営団体となり、三派、革マル両全学連とベトナム反戦自治会共闘会議（統社同）の学生三団体がオブザーバーとして参加している。

治安当局の調べによれば、反戦青年委員会の組織は、府県三十四、地区百八十、職場六十八、学校二十八、計三百十グループ。

人員は、個人加盟五千三百五十人、団体加盟九千三百五十人、計一万四千七百人（四十三年六月現在）。

組織の性格上、綱領や規約はない。中央、都道府県、市町村、地域、職場、学校に末端組織があるが、相互の上下、横の関係は、なかなかつかみにくい。

労組幹部の中には自分の胎内に出来たハレモノのようにいやがり、締めつけを加える傾向も出てきた。

もともと労組の既成指導部に対する反発から自然発生的に組織化され、機関決定にそっぽを向いて独自の行動を起こすバイタリティーを持っているからだ。

「デモに行ってみないかと先輩にはじめて誘われたときは、いやだなあと思ったんだ。ケガでもしたらバカらしいし、ましてや衝突に巻き込まれ捕まってごらんよ。クビだからね。そうなったら組合だって助けてくれませんよ。

すると、つぎのデモのとき、また先輩から声をかけられた。見物だけでもいいじゃないかと。それならば、と王子に出かけてはじめて機動隊が攻めてくるのにぶつかった。いや、もうムラムラときてしまって……」

東京文京区の製本会社に勤めるI君（昭和四十三年現在二十四歳）の話。彼は、もう王子デモのある日は、ヤッケと運動靴をカバンの底にしのばせて出勤する。会社を出ると、こっそり着替え「反戦」の旗の下に行動するのだ、という。

こうした青年労働者に対するトロツキスト・グループの浸透戦術の特徴として「宿借り方式」が挙げられる。

これと思う組織の中に寄生して大きくなり、やがてその腹をくい破って外に飛び出し、トロツキストとしての行動をするというもので、社青同と反戦青年委員会への侵蝕がよい例であろう。

社青同は、安保闘争のさい、幅広い青年を結集するという目的で社会党が結成を計画、三十五年十

月、正式に発足した。

ところが、トロツキスト集団の「革共同関西派」が、社青同に加入するという名目でなだれ込み、徐々に内部から組織をくいつぶし「社青同解放派」や「社青同国際主義派」と名乗って三派全学連の中へおどり出ていったのである。

次にねらっているのが反戦青年委員会というわけだ。

四十二年早々、全国反戦青年委は、闘争課題の一つに「砂川基地拡張阻止」をとりあげ、まず三多摩反戦青年委（トロツキスト系）が、反日共系全学連各派と共催で「二・二六砂川闘争」を組織、つづいて五月二十八日、七月九日の二つの砂川闘争を盛りあげ、十月八日の羽田闘争へ〝導火線〟の役割を果たした。

そして十月に、トロツキスト系各派の代表を世話人とする「東京地区反戦連絡会議」が結成されて以来、反日共系全学連との結びつきは強まり、いまや学生集団の支援部隊となっている。

治安当局の調べによると、トロツキスト系の指導政治団体が直接、指導権を持ったり影響を及ぼしているとみられるのは、東京、山形、群馬、愛知、福井、宮城、福島、埼玉、千葉、富山、岡山、広島、山梨、徳島の十四都県。地区組織では八十グループがトロツキストの影響を受けている。

派閥別にみると、社青同解放派がもっとも多く、ついで革共同前進派、諸派連合、第四インターとなっている。

ここでも指導権争いは多い。四十三年二月、東京都内で新宿地区反戦青年委の主導権をめぐり、社青同解放派と革マルが乱暴さわぎを演じ、五月十三日には、東京地区反戦連絡会議の世話人である共

産同（旧マル戦派系）が自派内の内紛からリンチを受け、全治一ヵ月の重傷を負った。

激しい分派闘争の中からまた新しい反戦組織はひとつずつ生み落とされていく。大衆消費社会の中に組込まれ、不満と反発のもっとも強い青年労働者と過激派学生とのかかわり合い。羽田闘争以来、佐世保、成田、王子と、トロツキスト学生の暴走する現場には、必ずこれと寄り添うように反戦青年委員会のメンバーが二、三百人。多いときは、千人もの青年労働者が、学生集団をかばうようにすっぽり包み、機動隊との間に〝防壁〟をつくる。

スチューデント・パワーとその周辺をくまどる反戦青年委員会――これを大衆社会にあらわれた、つかみどころのない金環蝕と表現した人がいる。

パリ五月革命は、学生運動が起爆剤となって青年労働者の欲求不満と疎外感を誘発し、山猫ストからゼネストへと立ちあがらせ、一時的にせよドゴール政権をゆさぶったのだった。

学生たちより一足先に、警察当局が、今後の治安対策の問題点として「パリに学ぶべきことは多い」と神経をとがらせたのも、そのためである。

後につづく〝高校生〟

〝成田空港デモ〟〝王子野戦病院反対デモ〟のころから、三派系全学連の大学生にまじって高校生の参加が目立つようになった。三十五年に安保デモがほうはいとして盛り上がったころも、高校生の大

量参加が見られたものである。大学生のデモはめずらしくないが、高校生の登場は、若い層の間に危機感が浸透していることを示す一つのバロメーターといえよう。

三月三十日と四月二十八日には、百人前後の小規模ながら、全く高校生だけのデモが米陸軍王子病院正門前に現われ、機動隊とぶつかって三人の逮捕者を出した。

四月二十六日の国際反戦統一デーには、東京青山の明治公園に集まった白、赤、青、黒のヘルメットにまじって、茶のヘルメットがさっそうと登場して拍手を浴びた。反戦高協を中心とする都内の高校生約二百人である。

六〇年安保のころ、彼らは小学校の四、五年だった。受験勉強の合い間にマルクスやカミュや吉本隆明を読んで〝目ざめた〟彼ら。七〇年安保には、彼らが学生活動家の中心的存在として活躍することになるかもしれない。

全学連各派も〝予備軍〟としての高校生の獲得にかなり力を入れ、現在ある五つの高校生グループはすでに各派の系列下に置かれている。

最大の組織は「反戦高協（戦争と植民地主義に反対し生活と権利を守る高校生協議会）」で、東京都委員会を中心に大阪、京都、長野にも委員会があり、加盟は高校単位ではなく各校の三人以上のグループ単位、全国で約三百人の現役と二百人の浪人が現有勢力という。東京の場合は学区別に下部組織を作り、ヘルメットにも「反戦高協」の横に「第〇学区」と白く染め抜いてある。拠点校は新宿、都立大付属、青山高など山の手地区に多い。第一次羽田事件で死んだ京大生、山崎博昭君は、高校生時代、反戦高協大阪府委員会に所属する活動家だった。

この反戦高協が中核派系であるのに対して「高校生会議」は社学同統一派系。東京では立川、大泉高、関西では灘高を拠点に約八十人が参加している。このほか「高校生解放戦線」（社学同ML派系）、「反帝高評」（社青同解放派系）、プロレタリア国際主義派高校生委員会（第四インター系）、革マル全学連高校生班（革マル系）があるが、人数はいずれも五十人以下十人程度のものもある。日共系全学連にも「民青高校生委員会」があり、これは全国で九百班、九千人の大世帯といわれる。

高校生独自の集会も最近活発化し、反戦高協が三月十七日に千代田区清水谷公園で「ベトナム反戦、国防教育粉砕集会」を開いたさい、参加者は主催者の見込んだ百五十人をはるかに上回り三百五十人を数えた。小グループによる討論会や読書会、夏休みの合宿なども盛んで、そうした集まりには上層団体代表として理論派のオルグが送り込まれ、マルクス主義理論、革命論などをテーマに集会をリードし、ときにはビラの文案づくり、印刷まで手を貸すこともある。

卒業生連絡会議という浪人だけの集まりもあって常時百人の動員力を持っている。

彼らは大学受験講座を聞いたり「傾向と対策」を読む一方で、初期マルクスの著作やニーチェ、カミュ、宇野弘蔵、梅本克己などに読みふけり、デモに参加した夜、地下喫茶でゴーゴーを踊ることに矛盾を感じない、新しいスチューデント・パワーのタマゴである。

右派学生の反発

三派全学連が、四十五年の第二安保を武装闘争の目標にかかげ、陣地戦と称する学園内闘争、市街戦と称する王子、成田などのデモを強化してくると、当然いわゆる右派学生の反発も強まってきた。反共を旗印にする反共学内団体、三派全学連などから暴力団呼ばわりされた私大の体育系学生、それに自民党支持を公然と標榜する各種学生団体や宗教団体の学内組織は〝四十五年〟に共通の危機感を抱き、三派、日共系をひっくるめた「全学連」批判組織として全国的統一戦線を結成する動きをみせてきた。

四十三年五月には、「全国学生団体協議会」が結成され、四十五年以前に自治会の主導権を奪回する運動をはじめ、六月十五日には、各大学の国防部が結集して「全日本学生国防会議」をつくった。四十三年夏の段階では、これらの団体は〝学内での対決〟を強調、また極右テロの介入をきびしく拒否しているので、政治闘争を大切にする〝パワー〟の範囲内に加えることは出来ないが、左派の安保破棄運動がエスカレートするのに比例して、学内から学外運動へ進出する可能性がないとはいえない。その意味では〝第三のパワー〟に発展する可能性を秘めており、無視することは出来ない。

反共団体が各大学に芽をふいた契機は、四十年から四十三年春にかけて、早大、中大、明大、日大などの相次ぐ学園紛争と四十五年を前にクローズアップされた各党の防衛論争である。とくに全日本

学生団体協議会は、一連の大学騒動の中から生まれた各種全学連批判グループが集まったものである。これらのグループは「お互いの運動がバラバラで孤立していては力に限界がある。戦線統一をはかって、自治会の主導権を奪い返そう」と呼びかけあって、組織結成に成功した。加盟団体は日本学生同盟、生長の家学生会全国総連合、国民協会学生部など六団体、四千数百人といわれ、各大学で活発な働きかけを開始している。

また防衛問題研究を表看板にして集まった「国防会議」は、早大国防部がリーダーシップをとり、早、明、中、日、一橋、神奈川、近畿、京都産業など約二十校の横断組織となり、自主防衛、自衛の増強を一般学生にPRしている。まだ自治会組織を舞台に全学連各派と対決する学生運動としての姿勢はとらず、あくまでもサークル連合会の範囲を出な

日大本部前でもみ合う学生たち（昭和43年6月）

いが、果たして、この姿勢がいつまで続くか、わからない。

このほか、かつて大きな組織だった全国私学学生自治会連盟（私学連）の再建計画も進んでいる。私学連は「全学連」に対抗する組織として、二十三年ごろ〝健全な学生運動〟をめざし結成され、最盛期には日大、同志社大など全国五十八校が加盟、私学振興運動や学費値上げ反対運動を政治色抜きで進めていたが、三十年代にはいると、次第に勢力が弱まり、有名無実となった。しかし羽田事件を境に、三派全学連の〝ハネ上がり〟が目立ってくると、日大、東洋大、近畿大などで再建の声が出ている。

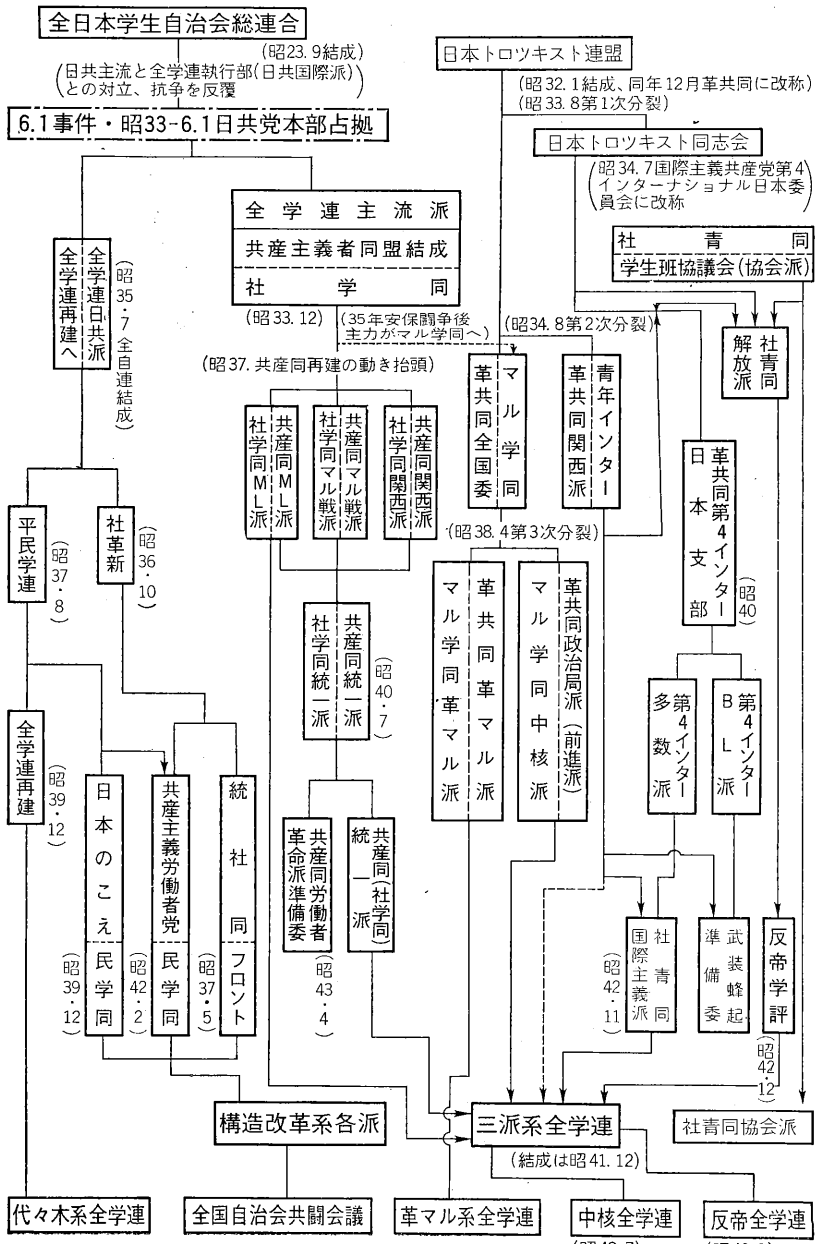
各地方でも反共団体の結集は進み、四十三年三月、九州で三十七校の四十二サークルが九州学生自治体連合会を、五月に中国地方で広島大など五大学の反共学生が中国学生協議会をつくり、北海道では、北大など九大学の「北方領土復帰全道学生実行委」がさらに幅広い組織づくりに動いている。

自治会奪取に動くにせよ、サークル活動の範囲にとどまるにせよ、これらの団体は、まだ王子、成田などに現場視察団を送ったり、ビラ張りをしている程度で、トラブルを起こしていない。だが、今後、全国組織づくりで自信を持った場合にも、強い反共、反トロツキズム運動を展開する恐れもある。とくにこの組織に、先輩―後輩の強い連帯感をもつ体育会学生グループが合流したときには、一種の〝武装組織〟化することもないではなかろう。

明大紛争のとき、幕切れ直前、社学同になぐり込みをかけられた体育会学生のテロに近い反発ぶりは物すごかった。明大の社学同が作ったバリケードは一朝にして破られ、リーダーはリンチを恐れて、公然とは登校できぬ有様だった。結局、社学同は（中核派の言葉をかりれば）〝屈辱的な和議〟を大学当局に乞わなければならなかったのである。

全学連ならびにトロツキスト組織系統図

（43.7現在）



ゆれる大学——自治の神話の崩壊

食い違うタカ派とハト派の見解

「最近における一部学生の行動を見るに、最高学府に学ぶ学生でありながら、学問を放棄して学園の秩序と平和を破り、あるいは社会の治安を乱すがごとき暴挙を繰返していることは、みずから大学の自治を脅かすのみならず、民主主義社会の基盤をそこなうものであって、大学はもとより国家社会の期待に反すること甚だしく、まことに憂慮にたえないところであります」

四十三年六月二十七日、東京・赤坂の三会堂ビルで開かれた文部省招集の国立大学長会議で、灘尾文相は大学の管理運営のあり方にふれ、大学の責任をつぎのように追及した。

「このような事態は最近の欧米諸国の事例にも見られるところであり（中略）すべてがひとり大学当事者の責任のみでなく、また大学のみで解決し得る問題と断言することは出来ません。それにしても事が学生に関する大学の問題である以上、まず大学自体の問題解決への意欲と、不断の努力がもっとも大切であり、大学の果たすべき役割のきわめて大きいことが痛感されるのであります。

わが国の大学は、教育・研究はもとより、大学の管理運営についても、その機能を真に発揮するためには、大学の自治が最大限に認められることが不可欠であるとし、そのことはよき慣行として

尊重されてきましたが、同時に大学の自治の主張は、社会一般の理解と支持を受けるに足る実態を伴うことが必要であります。しかるに最近の一部学生の行動をめぐる一連の事象については、遺憾ながら大学にせる国家社会の信頼と期待にそわないものがあるといわざるを得ません。また現状のまま推移するとすれば、わが国の教育・研究の立ち遅れを招来するのみならず、大学の伝統的立場に対する支持が失われる結果ともなることが危惧されるのであります。

（中略）わたくしとしても、この問題の重要性にかんがみ、国の将来を考え、社会の批判にも耳をかたむけ、文教行政上の責務を果たすため、最善の努力をいたす所存であります」

灘尾文相のこの開会あいさつは、事務当局で九回も書き直しするほどに表現には細心の

学生の大量処分に反対して安田講堂前でデモする東大医学部学生たち（昭和43年3月）

注意がはらわれた。それでも〝大学は一体何をしているのか〟という強い不満がはっきりとあらわれている。

〝国家社会の期待〟を判断の基準とし、いまの大学はこれにこたえていない、というのが大学を非難する論理になっている。

これに対して、秋月康夫群馬大学長、大政正隆宇都宮大学長らは「大学としては、社会に対する責任があり、反省すべき点はある」と前置きしたあと「事件がおこってからは手おくれなのだ。大学の各学部において、学生との接触が日ごろから欠けていることに問題がある、対症療法だけでは間に合わない。一般学生の良識が、一部の活動家学生の行動によって阻害されることのないよう、キメのこまかい対策が必要である」という趣旨の発言をした。さらに学生との長時間にわたる〝団交〟を経験している京大の奥田東学長は「学生寮や学生会館の整備など、大学の名にふさわしい施設の拡充が急務であり、これによって大学の体質改善をはかることが必要である」と力説し、早急な〝対症療法〟だけでは根本的な解決は期待出来ないことをあらためて強調した。

この奥田発言に対し、井上吉之鳥取大学長は「いまごろ施設拡充とは何ごとだ」と激しくかみついた。これを受けて国立大学協会のタカ派の中心といわれている三輪知雄東京教育大学長は「ここまで事態が悪化しているいま、大学はまず国や世間にわびなければならない。国立大学として、国民の税金でまかなわれている以上、なおさらのことだ。大学の自治が乱用されすぎている。とかく大学は、外部からはキレイに見られすぎている。キレイごとではすまされないのがいまの学生問題なのだ。しかも大学教授の中には、学生たちが大学の自治を暴力行使の最大の武器として利用しているのに、そ

の学生にこびへつらっている者さえある。責任を他に転嫁することは許されない。大学人は率直に反省すべきである」ときびしい口調で反論した。

奥田、三輪両学長とも、「社会に対する責任を強く感ずる」という言葉の上だけでの共通点は持っていた。しかし従来からある国大協のハト派とタカ派のくい違いは、この日の発言でもあらわれていた。

そして奥田学長は「長い目で解決に努力する」と討論をしめくくった。この間出席した灘尾文相はじめ宮地茂大学学術局長ら文部省側はひとことも発言しなかったが、討論を終わったところで灘尾文相が立ち、はっきりした口調でつぎのように述べた。

「国立大学長が大学内のすべての問題について責任を持っているのと同じように、私は国会に対して責任を持っている。私は学長が今後責任をもって善処することを期待している。私に〝大学の内部については心配するな〟と言い切ってくれるならば、私は安心して大学にすべてをまかせる気持である」

〝国会に対する責任〟のくだりでは、口調は一段とはっきりしていた。〝心配するなといえるのか〟という問いに対し、学長たちからはなんの答えもなかった。

〝学長の責任〟と〝大学の自治〟といっても、「学長の責任において、長期的な観点から解決をはかる」という奥田京大学長と、「学長はまず国家・社会にわびるべきであり、自治の乱用をいましめるべきである」という三輪東京教育大学長の考え方には、へだたりがある。両学長の考え方の違いを掘り下げる前に、この日集まった学長たちの頭の中には、〝学長の責任〟〝大学の自治〟はどのように考え

られていたのだろうか。灘尾文相は、学生の破壊的な行為をおさえきれないという論理によって、いまの国立大学の自治能力を「遺憾ながら……国家、社会の信頼と期待にそわない」ときめつけ「わたくしとしても……文教行政上の責務を果たすため最善の努力をいたす所存である」と、〝大学ができないならオレがやる〟という姿勢をのぞかせた。学生問題が大学の自治全体を左右する材料とされたのである。そもそも学生問題は、どのようなすじ道によって大学の自治とかかわりをもってきたのだろうか。

学生問題と大学の自治

現代の大学の自治とは何か――それが大学人によって真正面から取り組まれたのはそんなに古いことではない。いわゆる当面の大学の自治論争の口火を切ったのは、四十年十一月に東大の公式見解として公表された「大学の自治と学生の自治――最近の学生自治活動について」である。タイトルに示されるとおり、学生の自治活動と対置されるかたちで、はじめて大学自身の手で大学の自治論が展開されたのである。その内容は、大学の管理運営の主体は教授会であり、学生の自治会活動はこの範囲をこえるものではないことを明らかにした。

この「東大パンフレット」は学内外に強い批判をまきおこした。すべての決定権は教授会にあるとして、学生を排除することは、教官と学生の共同体という大学本来の性格を否定するものである――

批判の最大公約数は学生参加を認めるべきだという点にある。

翌四十一年五月二十二日、東大の第四十回五月祭で、東大パンフの原案執筆者である大内力教授、最終責任者の大河内学長ら大学当局者と学生代表、学外の学者を集め「大学の自治と学生の自治」のシンポジウムが開かれた。当然のことながら学生側は強く反発した。「早大の警官導入事件でわかるとおり、権力はあらゆる機会をとらえて学生運動を弾圧しようとしているのだ。〝大学の方針に従って静かにしていろ〟というだけで大学の自治が守れるはずがない」「学生の自治活動を本当に教育上の目的として考えるのなら、アルバイトなしで安心して勉強のできる環境を作るよう文部省に働きかけるのが先決だ。それに大学内部だけで自治を考えるべきでない。国民の基本的人権を守るものとして学問の自由をとらえる国民的観点に欠けている」（いずれも東大中央委員会代表の発言、四十一年五月二十三日付毎日新聞朝刊より）

これに対し大学側は「学生諸君の努力に水をさすつもりはなかった。大学の研究と教育を外部勢力から守るための最終的な意志形成の権限は、教授会、評議会といった教官組織にある。しかし運用面で学生、職員の意見を取り入れることは当然である」（大内教授）「四十五年の安保改定期は日本の将来をきめる分岐点になろう。大学もそのときは外部に対してなんらかの発言をする必要にせまられるかも知れない。このとき学内で教師と学生の意見がバラバラなのは悲劇である。このパンフレットは学内で自治論を巻きおこすためのテキストと考えてほしい」（大河内学長）

いずれも弁明に近い口調であり、大学当局者として〝ものわかりのよさ〟はのぞかせていた。

双方の考え方の対立を残したまま、この東大見解をオリジナルとして、この年十一月三十日、国大

協の学生問題特別委員会（委員長、奥田東・京大学長）は「学生問題に関する所見」を公表した。内容は東大見解と本質的に異なるものではなかったが、大河内学長が公表にあたって「原案では〝学生の自治は大学の自治と不可分に結びついている〟と明確に定義づけようとしたのに対して、各大学から〝学生の自治の範囲が過大に受取られるおそれがある〟という反論が強く、表現を変えた」と語っていることに示されるように、〝ものわかりのよさ〟とは反対に教官と学生の共同体という考え方に積極的に挑戦し、「大学のワク内で」を強調したものとなった。わが国の国立大学長たちは「大学の自治は自分たちが担い手なのだ」と大見得を切ったわけである。

ここで注意しなければならないことは、東大見解も国大協所見も、早大の授業料・学生会館紛争を頂点とし、それ以前から各地で続発していた学生会館・学生寮の管理運営問題、授業料値上げ問題など、学内紛争を対象として大学の自治と学生の自治活動とを論じていた点である。学生の学外における行動までは大学の自治のカテゴリーでは考えられていなかった。この点について、東大見解は本文の終わりにつぎのように述べていた。

「以上は本学における最近の学生の自治活動に関連してとくに注意すべき点を述べたのであるが、このことは、たとえば諸君が政治問題について強い関心を持ち、研究的態度をもってその認識を深めることや、あるいは学外において市民としての正当な権利にもとづいて行動することを妨げる趣旨のものではない。ただ学外の行動においても、学生諸君がつねに法にのっとって理性的態度を維持することを期待しておく」

この時点では、学生の自治活動が大学の管理運営にどの程度まで関与できるかという、いわばスチ

ューデント・パーティシペイションだけが大学自治論の関心事だったのである。学外の行動はあくまで大学外の出来事であり、一市民として行動する以上、大学としては「理性的態度の維持を期待する」という態度をとって、学内問題とは明確な一線を画していた。学外の政治的な動向は、それが学内に導入され、混乱を起こした場合にのみ否定される行動だったのである。この点は国大協所見でも同様である。

「学生も国民の一員として、憲法の保障する思想、言論、結社などの基本権を享受し、個人として学生が政治的、社会的運動に参加し、市民としての意見を表明する自由は当然尊重されるべきである。しかし外部の勢力と連携して、大学内に政治的紛争や党派的イデオロギーを持ちこむことは、大学本来の秩序の維持を困難にするものであり、大学の自治を脅かす事態を生じかねない」

こうして学生運動対策を学内問題だけに限定し、しかも〝大学自治の決定版〟ともいうべき国大協所見が公表されてから一年もたたないうちに〝大学の自治〟は再検討されなければならなくなった。四十三年十月八日の羽田事件がそのきっかけである。ヘルメットに角材という学生運動のニューモードが登場するにいたり、〝大学の自治〟は学生の学外の行動にも責任を持たなければならなくなった。というよりは、大学は学外事件の責任をおしつけられたという方が真実に近いだろう。第一次羽田事件の直後の十月十四日、剱木文相は国大協首脳部を招集し、過激化の一途をたどる学生運動への対策を協議したが、この席で「大学当局は学外の学生運動についても教育にかかわる問題としてとらえ、従来のような無関心的傾向を反省する」という重大な合意に達した。この合意が、東大見解や国大協所見の精神と全く違っていることは明らかである。それでは大学は、学生の学外行動について、どの

ような方法によって、〝大学の自治〟の名のもとに責任を持とうとしたのか。

第二次羽田事件後の十一月十七日に、検挙者を出した国公私立大学の学長と剱木文相との懇談会が開かれた。ここで焦点になったのは大学への警官隊導入問題である。第二次羽田事件の前夜、三派の学生たちは〝出陣〟前の拠点として東大駒場キャンパスに突入、大きな混乱はなかったものの、ヘルメット学生がスケジュールどおり羽田に向かう時刻まで、大学側は何の手も打たなかった。第一次羽田事件でも法大、中大が拠点になった。学外者が不法に大学を占拠した場合には当然排除すべきである。そうすれば羽田事件はあのような組織的なものとはならなかったはずだ――羽田事件をきっかけに、学生の学外行動対策を協議する席で、警官隊導入問題がクローズアップされた理由である。

三輪東京教育大学長は「学生たちが力によって大学の機能をマヒさせるような事態になったとき、力に対する力を持たない大学として、外部から物理的な力――警官隊を導入することは、むしろ大学の自治を守ることである」と言い切った。これに対して大河内東大学長は「完全に大学が事態を収拾出来ず、大学の機能がマヒした場合には、警官導入もやむを得ないだろう」と前置きしたあと「いまの大学が最善の努力をしてきたと自信を持って言えるだろうか。お手上げになったらすぐに警官隊を呼ぶ、それでは大学教授としての見識を疑わざるを得ない」と反論した。現実に駒場占拠のさなか、何人かの教授は説得活動を続け、占拠学生たちもキャンパス内で破壊的行動はとっていなかったのである。学生たちを時間をかけて説得し、日常の対話のつみ重ねによって学生運動が暴走しないようブレーキをかけよう。それになによりも新入生にとって、教養課程に魅力がないことが学生運動に走らせる原因であり、そのためにはマスプロ教育の解消が先決である、というのが共通した考えだった。

時間をかけた対話と説得、一般教育の改善、マスプロ教育の解消――学長たちが気の長い対策を口にしている間に、文部大臣は灘尾弘吉氏にバトンタッチされた。就任直後の十二月一日、国大協総会の席で学生の学外行動にふれ「大学管理について法的措置は考えていない。大学の自治は尊重すべきものと考える。しかし大学自体がその責務の自覚を一段と深め、責任体制を確立するための具体的な討論を行ない、事実によって責任の発揮を示されることを強く期待する」と述べた。〝事実によって責任の発揮を示すこと〟とは、羽田事件に参加した学生をきびしく処分することを求めたことにほかならない。ここで学生を処分することが〝大学の自治〟の証明であるという新しい論理が登場した。この論理はのちに〝官製学部長会議〟の勇み足にエスカレートする。

学生処分の強行論

学生問題を担当する国大協の第三常置委員長、三輪東京教育大学長は、灘尾文相の高姿勢ぶりに応ずるかのように「学内で〝佐藤訪米反対〟といった立看板も認めるべきではない。これまでの学生処分がしばしば寛大に過ぎたことは反省の要がある」とまで言い切った。〝暴力学生〟はビシビシ処分しろ、それが学生運動の暴走をくいとめるポイントなのだ――この力の論理は文部省の態度と共通している。

しかし三輪学長がこの日示した強硬態度は、四十三年二月九日、第三常置委が出した「最近の学生

運動に関する意見」では、かならずしも十分に反映していたとは言えない。「羽田、佐世保で学生たちが過激な暴力的行為に出たが、目的のいかんにかかわらず暴力は許されない。学生が学内規則をふみにじってかえりみないとしたら、自らの手で大学の自治を掘りくずし、大学の自治の存立を危うからしめるものである」と前置きし、「教職員はそれぞれの立場で学生指導の責任を負う。全教官はあらゆる機会をとらえて学生との接触をはかり、相互理解に努めなければならない」と〝精神訓話〟を述べている。文部省が〝大学自治の証明書〟として要求した〝きびしい処分〟については、「学内秩序の維持」の観点から「処分しないことによって教育的効果があがる、という理由によって回避すべきでない」と明快に言い切った。しかし本当に文部省が期待した学外行動に対する処分は「その

学生たちと話し合う早大の時子山総長（昭和43年7月3日，早大記念講堂で）

事実が確認された後、その行動が学生の本分に反するかどうかは慎重に検討して決定すべきであろう」と、ふやけた表現になっている。事実確認を必須の条件としている以上、事実確認の手段を持たない大学が本当に学外行動を処分の対象に出来るのかどうか。検挙、起訴、判決といった大学外の材料を判定の基準にすることが、大学の自治の名による学生処分に適切であるのかどうか――このような疑問が学長たちの心の底にあったことは否定出来ない。結果としては学外行動に対する〝大学の自治〟の責任を明確にすることは出来なかった。たしかに当時の報道では「暴力学生にきびしい態度を」というのがメイン・タイトルになっていた。しかし学内外での学生の暴走を防ぐ手段としては、むしろ一般教育の拡充、対話の繰返しという長期的なやり方が主柱になっていたのである。

このような大学側の態度に、文部省がイライラし続けてきたことは、現在の大学行政への姿勢から考えて当然である。とくに年中行事となった東大医学部の紛争が、四十三年には図書館点検から大量処分、それに対抗する卒業式典阻止と全学に発展したことが宮地茂文部省大学学術局長に〝学部長を呼びつけてしかる〟という、前例のない文部省招集の学部長会議開催を決心させる大きな原因になった。「羽田、佐世保事件で学生があれほどあばれたのに、ロクに処分も出来ない。しかも一部学生のハネ上がりによって東大は卒業式さえ出来なかった。一体いまの大学に自治を主張する能力と権利があるのか――」宮地局長は四月十五日の教養学部長会議を招集するに先立ってきわめて強い口調の見解を用意していた。この詰問に答えることが出来ないなら、文部省が法的措置も含め、大学管理のやり方を〝指導〟するぞ――〝官製学部長会議〟構想の底に、このような意識があったことは、容易に想像出来る。しかし、このやり方が、いまの大学問題に新しい混乱を巻き起こすことは言うまでもな

い。大河内学長が「学長をとびこえて文部省が直接学部長を招集するのは大学の自治への侵害である」ときっぱり言い切り、四月十五日の教養学部長会議をボイコットすることにより、官製学部長会議計画はあっけなくつぶれてしまった。

このときの東大の態度は、学生処分など学内の問題はあくまでも大学自身が処理するのだという、ごくあたり前の原則を再確認したという以上に、その能力があることを公言したことにもなる。ゲタをあずけられたのは大学だった。その東大で、大河内学長が宣言したように、自治の名による解決への努力がどれほどなされたのか。あれほど機動隊導入に慎重だった大河内学長も、ついに六月十七日、安田講堂を占拠した学生に対して、機動隊を要請しなければならなかった。この「遺憾な事態」の原因は、医学部の紛争である。紛争の原因は学生、研修生が要求している〝研修協約〟という言葉に示されるとおり、スチューデント・パーティシペイションを認めるかどうかにあった。医学部教授会は、東大見解や国大協所見の「自治の主体は教授会」という原則を忠実に守り続けた。そして全学のドロ沼紛争へと発展したのである。

確かに大河内学長は、機動隊導入の責任を一身に負い、また病気をおして大勢の学生相手の話し合いの席にも臨んだ。しかしこの間、医学部教授会は、ほとんど手らしい手を打っていなかった。三月の卒業式、四月の入学式の前には、連日のように学部長会議が開かれた。この席で豊川医学部長に対して、他の学部長から激しい非難が浴びせかけられたといわれている。

自治能力を失った東大医学部。そこでは「教授会、評議会といった教官の組織が最終的な意志決定機関」であり、すべての問題を解決するという大学の自治は神話にすぎなかった。わが国の大学の自

治は、戦前の暗黒時代の経験から、外部の権力から学問の自由を守るトリデとして強く意識されている。大学人が大学の自治を口にするとき、単なるセルフ・ディフェンス（自衛）だけにとどまっていなかっただろうか。本来の意味でのセルフ・コントロール（自治）は不在のまま、自治の神話が作られたのではなかっただろうか。神話の崩壊をあからさまにしたのは学生たちである。東大見解、国大協所見がえがいた大学の自治像は、一方では学外行動の責任を文部省から追及され、他方では学生たちの参加要求運動のつき上げにあい、よろめき続けている。

国際連帯への道

既成秩序への挑戦

スチューデント・パワーが、国家意識を超越したところに存在していることは言うまでもない。彼らは、既成の社会主義者が口にする民族の独立というスローガンすら「ナンセンス」の一語で片付ける。

すべての支配階級、既成秩序への妥協のない挑戦が、その身上であり、そのために新たな国際連帯がうまれつつある。

四十三年六月十一日、世界の過激派学生運動の指導者十二人が、英国国営放送のＢＢＣに招かれた。「反逆する学生」と題する特別テレビ番組に出演するためだった。この番組が、十三日に放映されると、英国の〝既成社会〟の側からはいっせいに非難の声が上がり、ＢＢＣ放送の電話は鳴りずめだった。

座談会の人気者は、パリ五月革命で一躍、スターにのし上がった、フランスの学生運動の指導者で「赤毛のダニー」ことダニエル・コーンバンディだったが、西独ＳＤＳ（民主的社会のための学生運動）のカール・ディートリッヒ・ウォルフ、地元の英国からはタイク・アリ。そのほかイタリア、ベ

ルギー、スペイン、アメリカ、チェコ、ユーゴなどの学生闘士たちが出席した。この中にただ一人、日本人がいた。東大医学部を中退した石井保男君である。

この石井君の経歴については、後で述べるが、その前に座談会の様子を紹介すると――

司会に当たったのは、ロンドン大学政経学部（ＬＳＥ）で、政治社会学を講ずるかたわら、テレビの政治番組司会者としても活躍しているロバート・マッケンジー教授。

出席者は、こもごも自国の学生運動の現状を説明し、世界的に学生運動がエスカレートしている理由は「ベトナム戦争と現代の官僚主義的政治機構だ」と意見一致した。

東欧圏から参加した学生代表も、それぞれ自国の現体制を批判したが、チェコ学生は「いまチェコで起こっていることは〝自由化〟ではなく、社会主義の前進である」と述べ、

ベトナム和平デモで米大使館前を行進するアメリカ学生たち（昭和43年）

また紅一点のユーゴ学生（ベオグラード大学英文科）は「チトー大統領を支持して改革を進める」と、それぞれ微妙なお国ぶりを見せていた。

それはともかく、各国代表たちは一団となってロンドン郊外ハイゲートのカール・マルクスの墓まいりをしたり、なごやかなところをみせたが、こうして一堂に会したのは初めてで、互いに面識のない者が大部分だった——。

東大医学部を中退した石井保男君は、三十六年から三十八年にかけ、全学連の主導権を握っていた当時の革共同執行委員で、そのころ、チェコスロバキアのプラハにある国際学連（略称ＩＵＳ）書記局に常駐として派遣されたままである。

三十八年には〝母体〟の革共同が真っ二つに割れ、革マル派は、引き続き全学連の本家を名乗って居坐り、飛び出していった中核派は、四十一年末、三派全学連を結成したのだから、石井君の組織上の戸籍は、その後、一体どちらにあるのか、さっぱりわからない。

安保闘争で「ゼンガクレン」の名前が世界にとどろき渡っていたため彼は、ＩＵＳ副議長の要職にもついたが、いまは書記局からもパージとなり〝プラハ無宿〟なのだ。

ＩＵＳは、ソ連共産党路線に沿ってトロツキストを排除した。その一環として四十三年二月十三日、来日したのがＩＵＳ調査団の一行三人だった。三派、革マル、日共系と三つの全学連のうち、果たしてどの団体が日本の真の学生運動を代表するのか、調査のうえ代表権を決めようというのが調査団派遣の目的だった。

日共系全学連は、すでに四十二年三月末、モンゴルの首都、ウランバートルで開かれた第九回国際

学連大会にオブザーバーを派遣、多数派工作に力をいれていた。全国大学自治会の七割を結集している日共系としては、トロツキスト・グループの攪乱を排斥し、さらに勢力を伸ばしていくため国際的な承認が必要であったとの見方が強い。

片や、追われる立場にあった革マルと三派は、この国際競争でも唯我独尊ぶりを発揮し、ＩＵＳ訪日調査団長ヌーリー書記長（イラク）と東京都内のホテルで非公式に接触した吉羽忠三派全学連常任中執（中核派）はこうタンカをきった。

「どの団体が日本全学連の正統派であるかを決めるのは、日本の学生自身がなすべきことだ。国際学連がわれわれの闘いを支持するか、それともわれわれの前進を阻む日共系を支持するのか、前提がハッキリしない限り正式な会談には臨めない」

結果は、日共系全学連に軍配があがった。三月にプラハで開かれたＩＵＳ執行委員会で日共系全学連の正式加盟が決まったのである。ＩＵＳ常駐の元日本代表、石井保男君は、こうして完全にハシゴをはずされたわけだが、ロンドンでは、ＢＢＣの座談会のあとダニエル・コーンバンディ君らとマルクスの墓に参り、国際的な反帝学生組織の構想を打ち上げるなどまだまだ気炎をあげている。

日本のスチューデント・パワーに国際的評価が生まれたのは、第一次羽田事件からである。事件の翌十月九日朝、北京放送は、全中国向けニュースで羽田デモをとりあげ「勇敢な日本の学生は、数年来、なかった激烈な抗米愛国闘争を繰広げ、日本の親米売国の首相、佐藤栄作の南ベトナム訪問に断固として反対した。……山崎博昭君は、壮烈な死をとげたが、学生たちは残酷な弾圧の前に少しも恐れず反撃し、多くの警官を負傷させた」と称賛した。

二日遅れてロンドン・タイムスが「全学連は六〇年のデモのさいよりはるかに少ない同情しか得ることはできないだろう。今回のデモでは、全学連は左翼の同情さえ失ったかにみえる」と冷ややかな論評をしたのとは対照的であった。

中国側の全学連賛美は、羽田事件当時、日共が多摩湖畔で盛大に「赤旗まつり」をやり、実力闘争を避けたことに対する露骨な攻撃と表裏一体をなしていた。

十月十七日、山崎博昭君の追悼中央葬（日比谷野外音楽堂）を呼びかけたのも、代々木と対立している日中友好協会（正統）本部など親中派であり、ここでも日、中両共産党の〝代理戦争〟が演じられた。

追悼中央葬の席上、成島忠夫三派全学連副委員長は「われわれのたたかいが世界の人民をはげましている。中国人民は熱狂的にわれわれを支持している」とあいさつしている。

ところで、反日共系全学連は、すべて中国びいきなのか、毛沢東思想をお手本にしているか、というとそれが全然見当違い。社学同、その中でもとくにＭＬ派が毛思想で理論武装しているのを除いて、どの派も中国をスターリン製と同様の既成社会主義国家としてとらえ反発しているのである。

山崎博昭君追悼中央葬にソッポを向いた革マル全学連の機関紙「解放」の次の文章がそれをあらわしている。

「彼ら（三派全学連）は、10・17中央葬においては北京放送の『抗米救国の英雄的たたかい』なる主張に自己の闘いの慰めを求めつつ、中共派の呼びかけのもとでズブズブの幅広『中央葬』への参加を決めるという腐敗ぶりを示した」

反日共系全学連の国際連帯は、やはり外国の〝怒れる学生〟たちに求められる。

三派全学連は、四十二年九月「全学連―日本学生のたたかい・一九六七年夏」という英文の資料・写真集を出した。この年の春から夏にかけ砂川基地をとりまいた、〝ＺＥＮＧＡＫＵＲＥＮ〟の雄姿を紹介したもので、おもな送り先は、

アメリカ　ＳＮＣＣ（学生非暴力調整委員会）黒人学生運動組織
　　ＳＤＳ（民主的社会のための学生運動）学生反戦組織
西　独　ＳＤＳ（社会主義学生同盟）
英　国　百人委員会（Ｂ・ラッセル卿など）

といったところだった。

エンタープライズ寄港阻止を訴える「佐世保アピール」も諸外国の学生運動団体に送られた、というが、次のような珍談もある。

プラハの国際学連書記局に舞い込んだ佐世保アピールの差出人の全学連代表は「秋山庸治」と書いてあり、書記局の所在地は「東京都中央区神田〇〇ビル内」だった、という。

三派全学連の委員長は、秋山勝行。革マル全学連の委員長は、成岡庸治。なんのことはない、「秋山庸治」とは、実在の二人の名前をつなぎ合わせた思想の〝混血人間〟であり、書記局の所在地は、革マル全学連が書記局をおいているビルであった。

日本の学生運動を調査にきた国際学連ヌーリー書記長ら一行は、事実を知って「一体、どうなってるの」と肩をすくめたそうだが、これは日共系全学連幹部の話であって、真相はわからない。三派と

革マルが、国際学連の舞台では、ともに日本の学生運動を代表すると主張し、半面、日共全学連が、この奇妙な佐世保アピールをとりあげ「いつもは、派閥争いで血を流しているくせになれ合い、インチキもはなはだしい」と冷笑したことだけは事実である。

まず、ともに行動を

組織上の連帯よりも「まず、ともに行動を」と考えるのが、世界のスチューデントの共通した体質であろう。

四十二年十月二十一日、国際反戦統一行動の日、ワシントンでは二十万人のデモ隊がペンタゴン（国防総省）に押しかけ、東京では日比谷集会から米大使館へ突入をはかろうとした。

続いて四十三年四月二十六日のベトナム反戦国際ゼネストデー。三派全学連には、アメリカのＳＭＣ（学生動員委員会）から参加を呼びかけるアピールが届いた。王子米陸軍病院開設反対闘争にあけくれていた彼らも、この国際統一行動には、全力投球の態勢をとった。

「アメリカの学生はペンタゴンをねらうでしょう。われわれは、防衛庁に突入します。東西呼応して反戦のノロシをあげるのです」社学同の幹部は、こういって防衛庁をはじめて攻撃目標に設定したことを明らかにした。防衛庁の幹部を大いにあわてさせ、機動隊の厚い壁に阻まれ、作戦は、挫折したものの、彼らにとって実現の可能、不可能ははじめから問題ではないのである。帝国主義に向かって、支配階級に対して、世界のスチューデント・パワーが期せずして爆発する、というそこに意義を認めているようだ。アメリカの黒人運動がベトナム反戦と結びついてからというもの、三派全学連の諸君は、ブラックパワーにも大いに連体感をもっている。

カーマイケルのあとを受けて、ＳＮＣＣ議長となったラップ・ブラウンが、ニューオーリンズの監獄にとらえられ、ハンストの抵抗をはじめたという連絡をうけると、革共同は、ただちに米大使館に抗議電を打ち、秋山三派全学連委員長も、ＳＮＣＣに檄電をとばし、連帯を表明した。

そこにはスチューデント・パワーの〝本家〟意識もたぶんにある。

社学同の村田能利委員長は、三月下旬、新聞記者会見後の雑談で大見得を切ったものだ。

「八月の原爆投下記念日に広島で反戦集会を開くが、ゲストには、まず黒人運動のカーマイケルを招きます。それに西独からＳＤＳ、キューバからＯＬＡＳの代表、中国から紅衛兵も来賓として来るでしょう。国際反戦会議にするのです。楽しみに待っていてくださいヨ」

大言壮語と笑えないほど大まじめだった。スターをそろえて悦に入るほど子供っぽいのか、夢が多いのか。五月十日、ソルボンヌ大学学生が学生街、カルチエ・ラタンで路上にバリケードを築き、機動隊と衝突、ゼネストを誘発してパリ五月革命が燃えあがると、彼らは「学生に起爆力があることは、パリで証明された。われわれの先駆性理論は、やはり正しかったのだ」と神田学生街を東京のカルチエ・ラタンに見立てた〝ミニ革命〟をみせてくれる。

東西のスチューデント・パワーは、目に見えぬ糸で結ばれ、既成の「出来上がった社会」の顔を逆なでしてやろう、といつも待ちかまえている。

激動路線をさぐる

座談会

「群衆」あるいは「市民」

A　羽田事件以後、学生運動の主役を果たしてきた三派系全学連の学生たちの生活と意見を主として紹介してきたわけだが、彼らのねらっているのは、当面、国内に騒擾状態をつくり上げ、その中に市民を巻込んで七〇年安保になだれ込もうとしている、といっていいかと思う。そこで問題となるのは、いわゆる市民が学生の行動をどのように受取っているのか、どう評価しているのか、そのへんのところから始めたい。

B　市民の受取り方といっても、デモで窓ガラスを割られるといった、デモ現場の周辺の市民、いわゆる当事者の市民と、デモには参加しないけれども、群衆としてデモに参加している市民、それから、現場にも行かないいわゆる一般の市民によって、それぞれ反応の仕方が違うんじゃないか。

C　佐世保のときは、市民が意識しない間に自分から巻込まれていった。王子のときは、意識して巻込まれた者もいた。神田、新宿では、学生の方も意識して巻込もうとしたし、群衆の方もわざと巻込まれようとした光景が見られたね。群衆の考え方もだんだん変わってきているし、主役の全学連の群衆に対する考え方も変わってきているんじゃないか。

D　いわゆる十九世紀的な飢えたる群衆というか、せっぱつまった群衆という概念とは違う。いわゆる豊かな社会で、一部の学生がはね上がっても、孤立するだけだというのが、ふつうの考え方だったわけだが、そうじゃなくて、なんとか食っていけるけどどうも世の中がつまらない、あるいは息苦しい、そこで何かいいこと、面白いことないかというようなことで、そこになにかがあれば、ワッと噴出する可能性が、かえって出てきているんじゃないか。問題があるからじゃなくて、逆説的にいえば、問題がないからこそ、群衆は容易にその状況によって、いくらでも噴出する。

B　神田でも新宿でも、彼らは意識的に群衆をねらったが、そこにはいろんな人々がいるんだ。ただ一つ特徴づけていうならば、朝、ラッシュにもまれて会社に出勤し、行列して昼めし食べて、勤務終わって家に帰り、テレビ見て寝るという毎日の繰返しをしている人にとって、きょうはここで何が起こるかわからないから、家でテレビ見るよりも、ここで見ていた方が楽しいぞといった心理、いまでは、おみこし見てもあまり喜ばないけれども、昔だったら、おみこしを見るために集まったような集まり方だね。そういう意味での〝好意的野次馬〟がまことに多い。

D　民衆にとっての一種のカタルシスだね。

B　デモには積極的には加わらないけれども、ともかくその雰囲気は好意的なんだ。だから、逆に機動隊が排除しにくくなる要素に発展していく。

A　それは漠然とした社会的不満か、それともはっきりした政治的不満なのか。

E　どっちともいえないと思う。学生運動と一般市民の間にかかわり合いが出てきたのは佐世保からだ。その前の羽田のときは、佐藤さんの訪米目的のひとつは、沖縄の返還交渉なのに、学生はなぜ阻止するのだろうか、という市民の素朴な疑問があったし、とにかくすさまじい暴力に世間はおどろき、〝けしからん〟と袋叩きにした。

ところが、佐世保のときに市民が積極的に反応を示した、ということは、ベトナム反戦の問題提起というか、抵抗の論理がわかりやすかった、ということではないか。目の前に米軍基地があり、北爆の飛行機を乗せた原子力空母が入ってきたのだから。それに、全学連は捨身でやる、血を流す。太平ムードの中で失われた「行動」に対する大人たちの心情的な共感も加わって反応を呼んだようだ。

ただ、さすがに一週間も続くと、ああいう暴力戦術だけでは問題は解決しないし、とてもわれわれはついていけない、という空気が濃厚にでてきた。

カンパは集まり、拍手を浴び、逃げればかくまってくれ、手厚く看護してくれるのだから、学生たちは、市民を後方支援部隊にできると、いっぺんに自信をつ

けた。

おもしろいことには、そのころから市民の熱はさめはじめた。甘ったれるなというわけだ。

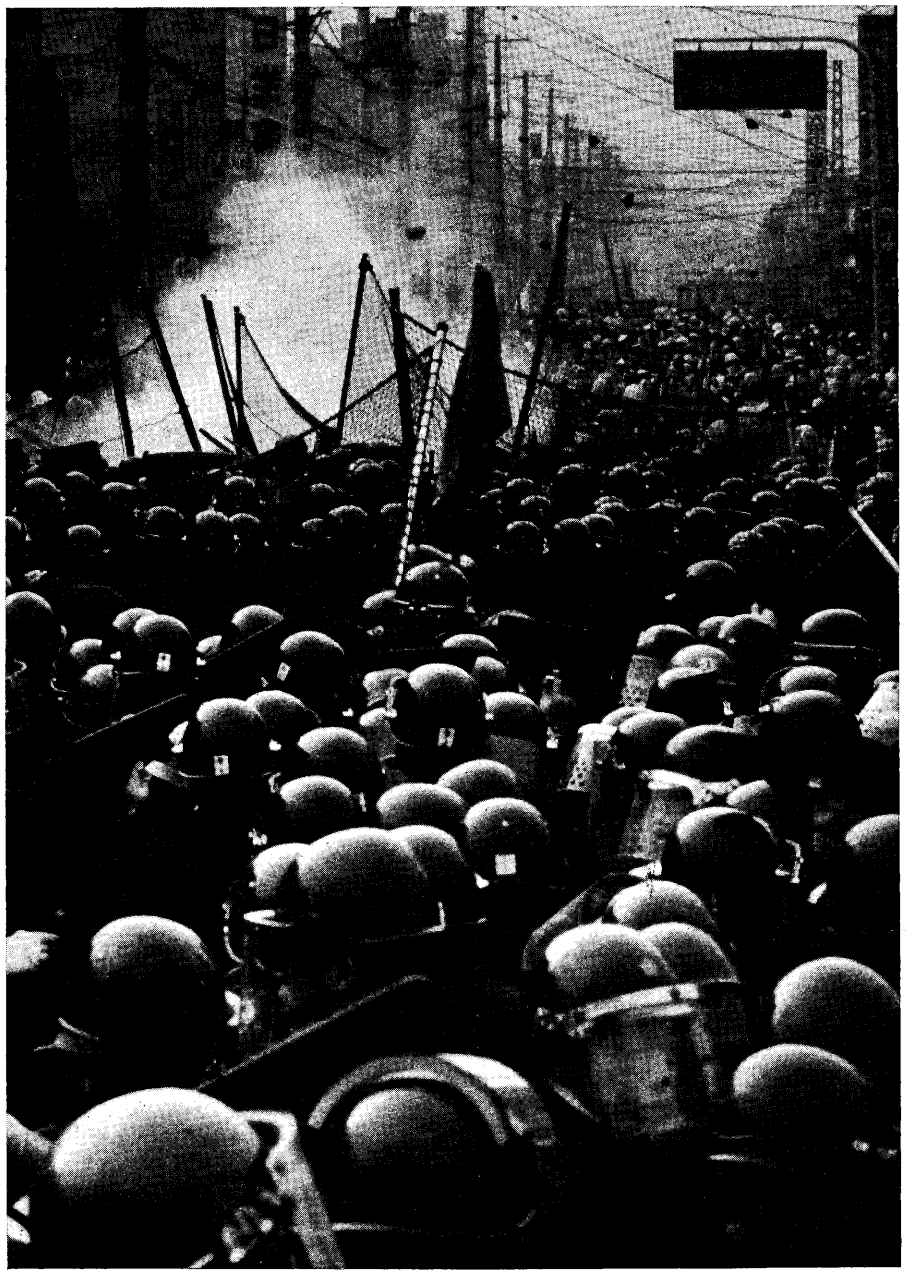
C　その次の王子でこんどは群衆が積極的に登場した。地元民の間には王子野戦病院はけしからん、町なかにヘリコプターが飛んでくるのもいやだし、米兵がうろうろするのも過去の経験から好ましくないという気持があった。都政にしても、国の政治にしても、そういう不満は吸い上げてくれないのに、全学連は実力行動でやってくれたという気持があった。その後は、全学連の闘争自体が自己目的化したのと同様に、集まってくる市民の中には、とにかく騒乱状況を見ようという単なるヤジ馬連中がふえてきた。だから彼らは学生がゲバルトをやらないと、キョトンとして、自分の方からちょっかい出してみたりするんだな。

B　全学連のデモは、どんなに荒れても攻撃目標は機動隊でしょう。僕らがいても危害を加えない。けれども、群衆が暴徒化した場合にはそういう理性がない。だから、王子闘争が進むにつれ、僕らもけとばされ、こづかれ、石を投げられた。新宿でもそうだった。全学連のデモと群衆のデモとの違いはここにある。そういう意味では、少なくとも危険なきざしは出ているという感じだ。

F　いってしまえば、社会心理学の対象であるような、群衆の話だと思うが、もう一つは、政治的不満をはっきりと持っている群衆もいるのではないか。ヘルメットや角材持ってやっている学生諸君の危機意識は、やはり一部の群衆の心の隅にもあるんではないかという気がする。

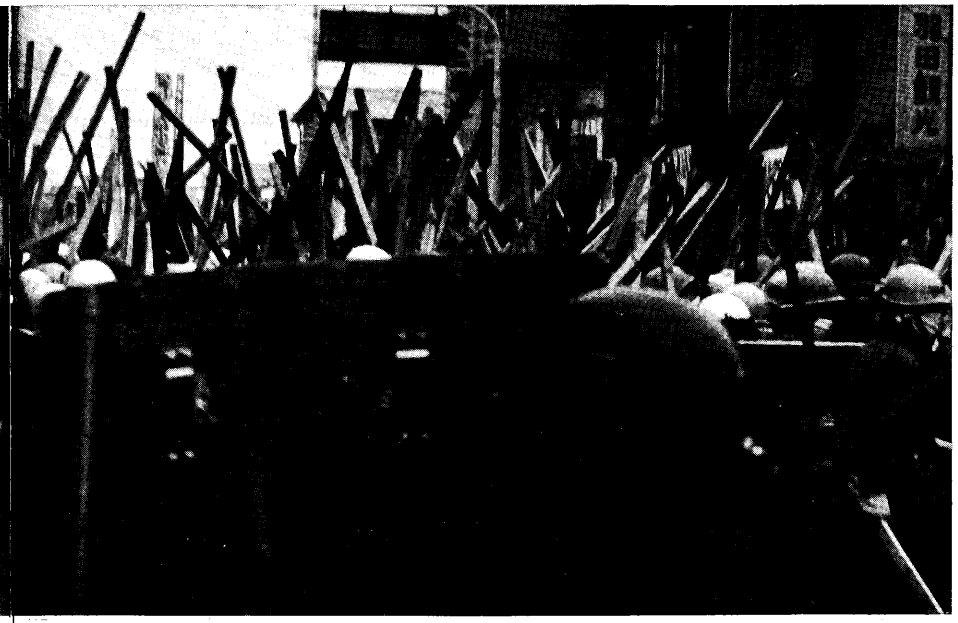
D　社会的不満、政治的不満というように分けるよりも、むしろ、政治的不満というものが、現代では鮮明な形では出ないで、民衆の間に拡散して、しかもモヤモヤと発散されないままよどんでいる。そういう意味では学生自身も、はっきりした政治的プログラムを持ってやっているといえるかどうか。

E　政治的危機感というよりもいわゆる〝でき上がった社会〟への欲求不満とか、疎外感といったもろうとしたものが要素になっている気がする。



対峙する警官隊と全学連。まるで市街戦の様相だ（昭和42．11．12　第二次羽田デモ事件）

パリの学生デモも大荒れに荒れ、自動車は次々に横倒しにされた(ソルボンヌ近くのゲイリュック通り　昭和43．5．11＝UPI)



学生たちはゲバ棒をかつぎ、隊列を組んで進んでいく(第二次羽田デモ事件)

ドイツの学生たちは十字架をかかげて警官隊にぶつかっていった（西ドイツの学生指導者ドゥチケ氏の抗議デモ　昭和43．4．11＝オリオンプレス）

警官隊は金属製のタテで厚いカベをつくり学生の攻撃をはばむ(佐世保の原潜寄港反対デモ　昭和43．8)

F　大学の内外を問わず、学生自身が歴史というか、政治というか、社会現象の主役として参加したいという意識がある。そこで学外運動では政治的参加になり、学内では、大学の管理に参加しようということになる。

E　「参加する」ということを身体で感じようとすれば、どうしても直接行動という形になりやすい。

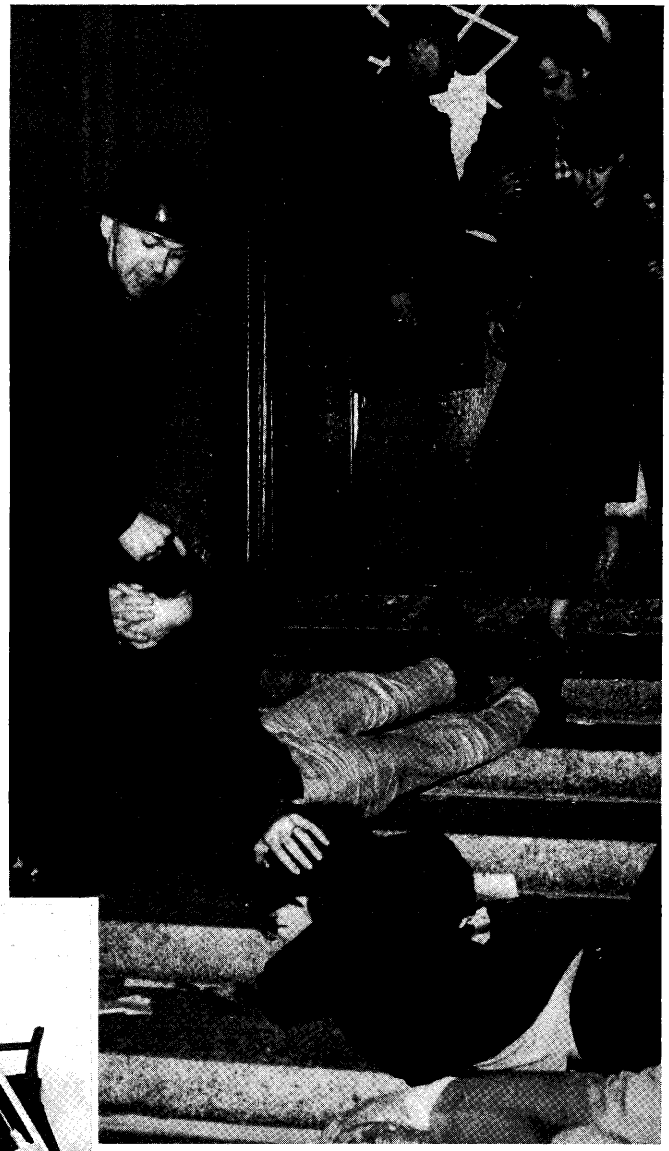
B　大学の学内で暴れる学生、外へ出て暴れる学生、それらを見守ってある場合には騒ぎを自らかき立てる群衆、みんなに共通していることは、何かを守らなければならぬという意識が非常に欠けていることだ。命を引きかえにでも守らなければならないものがあって、それをスクラムを組んでも守る、ということが、最近どこにもない。東大の安田講堂が四十三年七月はじめ再占拠されても〝いいじゃないか〟といった調子で、それほどに危機意識がない。つまり大学の中で守らなければならないものもなければ、外でも守らなければならないものもない。民家が破壊されようとしているのを見て、群衆が、破壊されたら困る、学生たちどいてくれ、というんでもない。守るべきものがないから、どこがどう破壊されようとこたえない。かえって面白いという面も出てくる。事あれかしという状況は、戦後二十数年たって濃厚に出てきていると思う。

C　事なかれ主義の中の、事あれかしだな。容易に火がつくが、そして燃え上がるのも早いが、消えるのも早い。こんどのフランスの〝五月革命〟の成行きをみても、なんかそんな気がする。

B　ただ、フランスの騒ぎで共産党は「選挙によってカタをつけよう」と、ドゴールの呼びかけに従った。その結果があの惨敗。結局、世の中は選挙などに頼ってもなんの変革もできない、やるなら直接行動以外にはないのだということを、あの事件は国際的に強く印象づけたのではないか。

ナショナリズムとハプニング

G　さっき守るべきものがないという話が出たが、そうじゃないと思う。学生のスローガンはすべてベト



〝若い力〟はアメリカでも爆発。ニューヨークのコロンビア大学では学生たちが副総長室にバリケードをつくって対抗したため（Ⓣ昭和43. 4. 23）ついに警官が導入された(Ⓑ昭和43.4.30＝UPI・サン)

ナム戦争が引っかかっている。まず戦争・平和という問題があり、平和を守る――これが至上命題として出てくる。これは佐世保でもそうだし、王子でも、成田でもすべてそうなんだ。ASPAC（アジア太平洋閣僚会議）もそうだ。事実、目の前に起こっている現象はベトナム戦争があるわけで、日本は平和ではない。つまり米国の基地であるという認識なのだ。

A　軍国主義復活とか、ずるずると戦争に巻込まれるぞ、だから戦いは防がなければならない、という意識だな。

G　日本が中継基地となって、アラスカからベトナムまでのしかるべき航空路線は、米軍専用機に押えられているという認識では、彼らはいちおう共通している。一番人を集めやすいのはベトナム戦争であり、事実、実感としてやってきた。これは中道ないし中道左派のナショナリズムも刺激する。

また、ナショナリズムをうんぬんする場合、一つ指摘しておきたいことは、戦後、つまり昭和二十年代以降生まれた彼らは、先輩が戦争で負けて作ったマイナス面を背負い込んでいるという認識が全くないことだ。やはり後続する世代として、負債はわれわれが返さなければならないという歴史に対する責任感が断絶している。だから、これが悪だと思ったら、歴史のマイナスという負債を抜きにして、いきなり米国は悪いというふうに出てきてしまう。戦後派の独特なナショナリズムというものの中には、民族独立というような考え方が、非常に強く見受けられると思う。

A　彼らが生まれたときから、日本はアメリカの支配下にあった。頭を押えつけるオヤジに、物心がついてくると理論より先に生理的、心理的に反発するようなものだ。

B　対米感情は、いまの学生たちのいう自民党だから、あるいは社会党だから、共産党だからじゃなくて、何歳以上だから、何歳以下だからということでずいぶん違うようだ。戦争体験のある人たちは、何党支持だろうと、ある程度リーズナブルなアメリカ占領観をもっている。とにかく戦後一時期、彼らによって民主主義が与えられ、食糧が与えられることによってわ

れわれは米国に救われたんだ。だからいま米国がいるということがとにかく、リーズナブルにわかっているんで、その意味では、共産党の人々だって、〝米国出ていけ〟ということは、スローガンとしていうけれども、いまの若者ほどつきつめたものではない。いまの大学生を中心とした人たちには、自分たちが米国のラ物資によって飢えをしのいだという記憶は毛頭ない。そういう意味で、ものごころついたときから、米国の存在は邪魔だったと思う。その上にベトナム戦争の激化があり、日本が基地として使われていることにカチッときている。これは日本だけでなく、ドイツやフランスなんかの反米感情もそういうことのようだ。僕らではわからない反米感情というものを、いまの学生たちはもっているんだ。それがたまたまベトナム戦争の激化ということで、火がついて爆発しているということではないか。

F　戦争までは、国民にはエリート層とそれに率いられる一般国民層があったわけだ。たとえば亡くなった吉田茂氏のような人にとっては、八月十五日の断絶があって、米軍が進駐してきたことはさほどショックではなかったが、盲目的に超国家主義的な考え方を押しつけられてついていった人にとっては、占領ということを、しっかり受けとめられないような状況じゃなかったかという気がする。そういった層にとっては、戦後の世代がもっているナショナリズム・反米意識が、なんとなく共感を呼ぶんじゃないだろうか。

A　戦後生まれた世代の反米感情というものは、生理的な反発みたいなもので、もっと上の世代の反米感情とはちょっと違うんじゃないか。

F　はっきりとしたものではなくて、漠然とした反米意識、感覚という点で一致しているんではないかという気がする。

E　それは右翼の学生にもある。連中は、〝第三のパワー〟と称している。たとえば早大の国防部とか、日学同のグループの考え方はそうだ。とにかく、日本は、米国に対して毅然とすべきである、われわれは米国に従属したくないといっている連中が師と仰いでいるのはドゴールだ。〝ゲベック万歳〟だね。あれに触

発されている。

B　世界各国の歴史のなかで、これだけ長い間ひとつの大きな国を、よその国が事実上占領、支配しているのは非常に珍しい。そういう意味でも反発運動が起こってくるのは当然だと思う。昔の愛国主義に結びつくか、それとは形の違ったものになるかは別として、いまの日本の状態が、決して望ましいものでないことだけは明らかなことだ。この異常な状態が二十何年間続いたうえに、ベトナム戦争の激化という要素が加わり、日本がその後方基地に使われていることがはっきりしてきた。そういうことが重なった以上、この程度の異常な動きが起こってくるのはあたりまえで、押えつけようとするのが無理だ。

G　全学連がその同調者を周辺に集めながら、街頭での行動力をつけてきた背景には、日本の現実の社会情勢が、全学連の運動を結果的にバックアップしている状況がある。たとえば佐世保のエンブラ入港反対闘争がその後、原潜ソードフィッシュの放射能問題に、基地反対闘争が板付基地の米軍機九大構内墜落、ベトナム反戦が王子の野戦病院伝染病患者収容問題などに結びついていた。そして運動の方向性が、まんざら見当はずれではなかったとの印象を国民に与えているのではないか。この特殊な風潮が、思想的に無色の学生も全学連の同調者にはめこんでいっているのではないだろうか。

A　世界の学生運動との関連はどうだろう。

B　五月十日、カルチエ・ラタン（パリの学生街）でソルボンヌの学生が路上にバリケードを築き、警官隊と衝突したさい、実力行使があまりにも手荒だったので市民の同情をさそい、ゼネストへと発展していった。二十一日の社学同のお茶の水事件はその戦術をいただいたわけか。

C　お茶の水事件が起こったとき、すぐ現場に行ったが、いったいなんのためにあんなことを始めたのか最初はさっぱりわからなかった。あとでカルチエ・ラタンうんぬんの理由を聞いて、ヘェーと思った。

A　とにかくなにが出てくるかわからない。ハプニングショーみたいなもんだ。

G　大学のアナーキズム研究会の中には、新宿のフーテン族とつきあっているのもいる。王子病院にヘルメットをかぶっていったフーテン・グループも、アナーキストではないかとの見方が強い。学生運動のなかにアナーキズムが頭をもたげてきたことを感ずるとともに、ヒッピー的要素があるとも思える。

C　注意しなければならないのは、東大や日大の紛争にしても、学内問題ではあるが、一般学生が大量に参加しはじめたことだ。安保闘争のときも、砂川闘争、原水禁運動、警職法反対運動などを通じて一般学生のデモ参加者がふえ、ついに六・一五流血事件へと発展した。かりにハプニングであっても一般学生が参加するようになったら、ちょっと新安保以前のエスカレーションの段階とよく似てくるのではないか。

A　三年前、四、五十人で始まった市民運動のべ平連系統のデモが、ついに四十回を越え、六千五百人もの動員力をつけ、検挙者まで出す激しい行動を見せ出したことも、七〇年を考えるうえでの一つのカギだ。日共系全学連の政党色の強さにも、三派系の激しさにもついて行けない学生が〝市民運動〟には合流している。このように一般市民と一緒になった反戦運動も今後、まだまだのびそうだ。日共系、反日共系、市民運動に加わった学生の三つのグループが、スチューデント・パワーとなって、そのうち爆発しないとはいいきれない。

E　警察のあるおえら方は、どうもニガ手だが、これからは、ハプニングやアングラも研究しなきゃいかん――といっていたヨ。

七〇年はどうなるか

A　政治的な不満、危機意識が程度の差こそあれ、日本に内在し、ハプニング的要素がいまの学生たちの心の中にあることは、だいたいわかった。その意味では、確かに全学連は一部の共感を呼んでいるだろう。しかし、感情的な〝共感〟だけで終わるおそれはないのか。全学連のいうように市民を巻込み、七〇年安保を目標としたエネルギーにする可能性はどの程度ある

のだろう。

E　三派系の学生がやっている運動にはたしかに限界がある。というのは、フランスにしても、米国にしても、日本とは条件が違う。米国は現に戦争をやっており、米国の学生にとってはいつベトナムに行って、弾に当たって死ぬかもしれないといった、いまの日本では考えられないような危機意識、というよりも、自分の生命、安全さえおびやかされているという切実性がある。フランスはドゴール体制にはいってから、いわば国民生活をある程度犠牲にしながら国家威信の高揚をやっている。その反動があることは当然なんだ。それに比べて、日本は、頭の中では反米意識のようなもの、あるいはネオ・ナショナリズムがあるかもしれないが、実際に生活の上で、切実な危機意識があるかどうか。非常にシニカルないい方だけれども、一種のゲームに近い形の印象を受ける。ここから七〇年安保に向かってどう展開するかというと、むしろ、いまヘルメットをかぶっている学生の行動がそのままつながるというんじゃなくて、別のファクターがある。それがいま学園の中にいる一般学生ではないかという気がする。

C　一つのサンプルになると思うのだが、フランスは日本より一足先に大衆社会状況が現出した。それが五月革命であれだけ全国的な盛上がりをみせた。しかし、ドゴールの選挙提案で、シューッとしぼんでしまった。日本でも、規模の差こそあれ、決定的なことが起こる前に、フワッとふくらんでまたフワッとしぼんでしまうようなことがあるんじゃないか。

B　七〇年を占う大きな外的要因として一つにはベトナム戦争がある。それが終わっていれば、盛上がりは非常に欠けてくるだろうけれども、もし、まだベトナム戦争が続いていれば、七〇年はたいへんな爆発状況になろう。国際的にみてもほかの国の学生運動がどうなっているか、それも、一つの影響を受けるだろう。しかし、そういうものを抜きにして、特殊日本的な状況として七〇年はどうなるかといえば、まず学生の方は必死になってエスカレートしていくだろう。これから七〇年まで、うんざりするほど公安事件が積重

なり、そのたびにデモそのものもエスカレートして、最終的には、機関銃なども出てくるかどうか。とにかく現在の投石や角材だけじゃなしに、もうちょっとシリアスな、何人か死人が出るような状態にまで発展していくと思う。そのとき、無関心層の市民がどう反応していくか、政府・警視庁がこれをどう受けとめ、対策を出すかが問題である。フランスの場合をみると、ドゴールは非常に上手だった。自分の危機をうまく利用して、逆に結果として足場を固め、あとでドゴールが学生たちにお礼したいくらいの状態になった。しかし、日本の政府はとても総辞職・解散にはもっていけない。岸さんがやったように、騒ぎが鎮まるまでは総選挙もやらずに、権力的にゴリ押しにデモを押える一手だろう。もしそうだとすると、ゆゆしい事態が起こりかねないと思う。

A　政府、自民党が巧妙に収拾策を講じても、やはり決定的なものが起こるだろうか。

C　住民あるいは群衆が、「われわれの体制を守ろうじゃないか」と考えるほどの意識を、政府、自民党がこの二年ほどの間に植えつけることができればいいだろうが……。いまデモをとりまく群衆にはそういう意識は全くないだろう。機動隊が出てくれば、機動隊をヤジっちゃう状況なのだ。だから政府が彼らに危機意識、現体制をなにがなんでも守ろうという意識を持たすのは不可能だ。

F　いまいろんな大学で学園紛争が起こっているが、いままでマージャンやるとか、ろくに学生運動していなかった一般の学生が、そういう学生運動に関心をもち始めている。安保は一般学生が学内の問題だけじゃなく、学外に噴出する一つの足場になると思う。

C　学園内は一種の実験室にすぎない。ちょっとしたことでも純粋培養されて大きくなる。しかし、外には、警察権力も含めて、行動の秩序とか、町には保守的なおじさんもいれば、交通が混乱すると怒るとかいった市民社会の秩序がある。

E　学外に噴出してきている全学連の諸君は、非常に大言壮語癖があるから、機関銃を撃ったり、火炎ビンぐらいは使うと高言しているが、そんなことやった

って、連中がいう体制の変革ができるとは思わない。たとえ群衆の蜂起が起こっても、何ら体制の変革にはつながらないと思う。王子のデモはたいへんな騒乱事態だと思うが、一方では、パチンコを一生懸命やっているような、平和な世の中なんだ。一部の人間がどれだけ意識的であっても、それだけで息の長い運動はできない。この体制はみんながつくりあげた体制で、ほかに変えるものがないからいまの体制を守っているのだ。別の体制が具体的に提示され、実現性をもってこない限り、そんなにもろくないですよ。その点、全学連の連中は妄想しているという気持が僕らにはある。群衆革命的なものだけでは、絶対に七〇年を連中のいう意味ではかちとることはできない。カギは労働者がどういうふうに動くかにかかっている。この間の新宿の事態でも、労働者として混乱をつくるだけでは、いわゆる労働組合の政治闘争はだめなんだということで、場所を新宿駅の構内から淀橋浄水場に変えてやったわけだ。しかし、労働者にすれば、もし暴発すれば失うものもたくさんある。たとえば、自分の家とか、安定した職場とか、それを考えると、学生のリードぐらいで暴発するとは思えない。

D　同じことを大学について考えると、あちこちで学園騒動が起こっているが、いったい何が変わっているんだろうかというと、たかだか老いたる学長の血圧を上げるとか、せいぜい首をすげ替えるとかいったくらいで、マス・プロ教育がどう、大学自体がどうといったとこまでいっていない気がする。いったい、何が変わったというんだろう。

F　日本がフランスと違うのは、革命の経験がないことも忘れてはならない。日本の学生の行動をみていると、革命というものはいったいどういうものなのか、場合によったら自分の命も失うんだと、考えて行動しているとは思えないんだ。

E　たとえばフランスの場合と比べた場合、非常に大ざっぱなとらえ方だが、日本では燃える方にも、火の粉をかぶる方にも、短絡反応は強いと思う。かりに東京の国電が半日でもストしたら、たいへんな騒乱状態になる。と同時に、それはかなわんという声も逆に

強く作用して出てくるんじゃないか。

B　革命みたいなひっくり返りはないけれども、目をそむけるような状態になると、がまんしきれなくなった右翼の人たちは、われわれが現体制を守らなければならないということで、左翼の列に飛びかかっていくことも予想される。そういう意味で警視庁なり、為政者が、よほど右翼の動きに気をつけないと、手のつけられない騒擾状態になることも考えられ、六〇年安保のときより、より一層エスカレートした形で、七〇年安保は危機状態を迎えよう。そうなると、せっかくいままで築いてきた民主主義体制が一挙にくずされ、かえってデスペレートなものに追込まれていくことも十分考えられる。

C　フランスの場合でも、決定的なものはゼネストだった。いまの状態で日本の三派系、あるいは反日共系を見ても、彼らがゼネストを誘発することはできない。ゼネストは全部がいっぺんにやって効果があるのに、いまの状態では、社会党と共産党は原水爆問題一つにしても一致しないように、政策協定すらできないのでは、とても期待できない。また、群衆がいまの範囲に限定されている限り、騒擾事件にしても一部的なものにすぎないんじゃないか。

E　警察庁が四十三年七月にまとめた資料では、全国の大学で反日共系全学連の進出が目立っている。警察庁の最高幹部でも〝スチューデント・パワーは、ますます活発になろう〟と楽観をいましめているんだ。

日共系にくらべて反日共系が伸びた理由として、警察庁ではまず、警察や大学に有効な打撃を与えたかどうかで、組織の正当性や指導権の優劣をきそう戦術がそれなりに受けたこと、学費値上げ反対や処分撤回闘争でとにかくなにがしかの成果をあげていること、第三には穏健な日常闘争を進める日共系に対し、一般学生はあきたりないのではないか――などの点をあげている。

A　反日共系がふえたというのは、具体的にはどの程度か。

E　いま全国に大学の数は、短大もふくめて八百二十七校あるが、このうち全学連各派の指導下にある自

治会は五百十で、夏休み前までの役員改選の結果、日共系は六四・七パーセントにあたる三百三十自治会を握り、反日共系が三五・三パーセントにあたる百八十自治会という色分けになった。四月現在の勢力比は日共系七、反日共系三だったから、差は六・五対三・五に縮まったわけだ。主要拠点校の東大（教養、文）、九大（教養）、神戸大（教養）、明大（商）、専修大（一部）などは日共系から反日共系に政権交替している。日共系が進出したのは、あまり力のない地方の学生自治会が多い。

E　これから一番ポイントになるのは、基地問題だと思う。一般的に七〇年安保問題とか、政策論争の中でいわれているが、基地周辺のハダで感じている人は、基地のあり方を考えるのが安保問題だとして、具体的に考えるようになっている。それがどういうふうに動いていくか、注目したい。たとえば、九大の墜落事件といったアクシデントとか、沖縄の復帰問題とからんで、学生あるいは沖縄の住民がどういうような運動を展開するか、それによって、一般市民にどういう影響を及ぼしてくるかだ。

B　僕なりに結論づけると、七〇年安保を日本の勝負のときと思い、この十年間、全生活をかけてきた人たちが、一部だがいることは厳然たる事実だ。こういう人々を社会にとってじゃまな存在だからと、全員ひっくくって牢屋に入れてしまうということはできるはずがない。いまの法体系のもとで革命の自由はないだろうけれども、「抵抗の自由」程度なら憲法で保障されている。そうだとすると、そういう一部の人たちに、七〇年のための準備をやめなさいといっても意味がない。結局、そういう人たちの主張を為政者がどれだけ事前にとり入れていくかどうかが、大きな意味をもってくる。たとえば大学だったら学長や教授たちが、日本の権力機構だったら政府や警視庁が、彼らの主張や要求をどれだけ先どりし、現実化していくかが問題だ。われわれの〝スチューデント・パワー論〟の締めくくりとして、政府や大学当局が学生たちを力やいまの法規だけで権力的に押えこもうとしても、閉じ込めることは不可能だということを強調しておきたい。

スチューデント・パワー

欧米の旧体制を揺さぶる

フランス

〝五月革命〟の原動力

参加を求める学生たち

一九六八年（昭和四十三年）五月十三日、パリのソルボンヌ（パリ大学文学部）に、赤旗とアナーキズムの黒旗が高々とひるがえった。警官隊による一週間余の閉鎖が解除されたのだ。歓声をあげてなだれ込む男女の学生たち。若手の助教授、講師、それに青年労組員。あちこちの階段教室や講堂はたちまち満員となって、思い思いのテーマで討論会がはじまった。「社会における大学の役割」「学生と労働者」「反帝闘争と学生」「芸術と革命」「革命とセックス」――。どの会場でも討論はノンストップ、徹夜で続けられ、目をキラキラさせた青年男女が、あの教室からこの教室へ、さらに大講堂へと、自由勝手に出入りしていた。授業内容について自己批判する教授もいれば、それをさらに批判する女子学生もいる。率直な雰囲気であった。

壁はオップ・アートやサイケ調のいろいろな落書きの花ざかり。「神よ、ふり返るな。あなたの背後で世界は崩れる！　革命すればするほど恋人と寝たくなる」「完全なる自由を求む。マリファナ（麻薬の一種）を吸う自由を含めて」など、かなり刺激的な文面も見える。奥まった教室は「愛の室」と名づけられて、昼なお暗い室内ではフリー・ラブの「セックス・イン」も展開されていた。底抜けに

野放図な雰囲気。解放感――。

キューバ国旗や南ベトナム解放民族戦線旗も掲げられ、一部学生は泊まり込みの用意をはじめた。「ソルボンヌ・コミューン」はこうして誕生する。米国と北ベトナムのパリ会談が正式に始まった日。ドゴール政権登場のキッカケとなったアルジェリア駐留仏軍の反乱十周年記念日でもあった。国際場裏にフランスの栄光輝き、ドゴールの威信が最高潮に達したとき、おヒザ元の最高学府が反乱を起こし、パリ街頭には労組を中心とする八十万のデモ隊が気勢をあげていたのである。

学生はその後、国立劇場オデオン座も占拠し、ここでもノンストップの「無料の自由芸術劇場」をはじめた。パリ大学の校舎は、ナンテールはじめすべて占拠された。地方でもナント、ニース、ボルドー、ブザンソンなどの各大学が、たちまち占拠され、学生コミュ

ドゴール大統領のわら人形を焼く学生，労働者のデモ（1968年5月）

ーンの数は日増しにふえた。カンヌ映画祭は学生の会場なだれ込みと、若い進歩派映画人の同調で、中止となってしまった。しかし、日本から参加していた「初恋・地獄篇」は、ニース大学の自治会から「よい映画だから上映してほしい」と申入れがあり、曲がりなりにも公開されたという。スチューデント・パワーの実力十分であった。

労働者もやがて工場占拠をはじめ、待遇改善に加えて経営参加を要求しはじめた。外国資本に身売りしかかっていたプラザ・アテネ・ホテルの従業員たちは、ドアマンをリーダーに職場管理に立上がり、滞在中のフセイン・ヨルダン国王ら有名人の署名を集めてホテル所有者と交渉、ついに身売りを撤回させた。

競馬の騎手は競馬場を、プロ・サッカー選手はサッカー場を占拠して、それぞれの要求を押し通した。フォリー・ベルジェールの踊子たちは、劇場の楽屋を占拠、支配人をボイコットした。そればかりではない。財界若手の経営者たちまで団結して、経団連本部を占拠し、六十歳以上の老人ばかりで占めている経団連指導部の改組を要求した。

すべてが、夢のようであり、風刺小説のようであった。しかし、そのどれもが現実なのである。そして、すべてがソルボンヌの学生反乱から連鎖反応的に起こったものだった。

哲学者ジャン・ポール・サルトルは、こんなある日、ソルボンヌを訪れた。学生反乱のリーダー格のドイツ国籍の社会学科学生、「赤毛のダニー」ことダニエル・コーンバンディ（一九六八年現在二十三歳）をつかまえ、熱情をこめていった。

「君たちがやったことから、驚くべきこと、すべてを圧倒する事件が起こっている。それは現在まで

われわれの社会がやってきたことをすべて否定するものだ。それは可能性の限界を、ずっと遠くまで押広げている。やめてしまってはいけないよ」

英国の詩人スチーブン・スペンダーは、ちょうどこのころ――五月十五日から六月一日まで――パリに居合わせた。かつて共産主義に共鳴し、スペイン内戦では共和政府に加勢して戦ったが、その後、共産党の官僚性に幻滅した彼にとって、この「五月の日々」は青春の日の理想を再び燃え上がらせるものだったに違いない。ドゴールが立ち直り、五月革命失敗の大勢がハッキリしてきた六月三日、スペンダーはローマからロンドンのタイムス紙に速達で投書を寄せた。

「パリでの十五日間、私はソルボンヌとオデオン座で学生の討論をきき、あるいは街頭でバリケードを守る彼らを見守って過ごしました。彼らが敗れた反徒であるかどうか、私は知らない。しかし、彼らの勇気、正直、暴力を振るわれたときの自制――これらは花束以上の称賛に値することは、この私がよく承知しております。彼らは自らの学園を要塞にも戦場にもしようとせず、日夜、ほとんど眠らずに負傷者をかばいながら、話合いと思いやりに生き、消費社会から遠く離れた共同生活を送れる場所をつくろうと努めておりました。

彼らはまた、青年労働者を説いて、物質的な富は人生の目的ではない。人間としての生活を実現するための手段である。そういう考えに立った社会を築こう、と呼びかけておりました。

革命が成功しなければ大学もありえないという彼らの意見は、私には性急にすぎるように思えました。大学は、その含まれる社会に奉仕するためにも、反対するためにも使える道具なのですから……。

しかし、現在の時点では、彼らを批判するよりも、彼らが理想主義者であることを指摘する方がもっと重要です。彼らは理想主義者と呼ばれることをきらうでしょう。しかし、彼らは真の意味での理想主義者なのです。自らの信ずる理想のために生き、戦い、そうすることによって、その理想が現実でありうることを示したのです――」

だからといって、学生たちは称賛や花束に埋まっていたわけでないことはもちろんだ。ペールフィット文相（当時）は、学生暴動の中核は親中国派だとにらんで、「パリ会談開催を前に騒ぎを起こすのは〝平和の敵〟の陰謀だ」ときめつけた。またドゴール大統領自身が訪問先のルーマニアから急いで帰国しての第一声は「改革は結構。しかし、シアンリは許さん」というのであった。シアンリとは仏軍用語で「寝床で大便」の意味である。総選挙にあたってドゴール大統領が攻撃を共産党に集中し、五月革命の責任があげて共産党にあるように強弁したのをみても、学生暴動に対する彼の評価がうかがえよう。そして、総選挙の結果は、既成政党でただ一つ学生を支持したマンデスフランスの統一社会党がわずか一議席という完敗に終わり、議会政治のレベルではドゴールの評価が全く正しかったことが証明された。

既成政党のなかで、学生の反乱に最も厳しい態度に出たのは、皮肉なことに共産党であった。コーンバンディらを極左日和見分子と非難した。「ソルボンヌの乱」以後、共産党系の学生や労働者も大挙してデモや乱闘に参加していることがわかり、ようやく態度を変えた。しかし共産党系の労働総同盟（ＣＧＴ）は最後まで学生の労組への浸透を警戒し、学生運動の封じ込めを図った。五月十三日に学生弾圧に抗議して大デモを組織したのも、実は以後の主導権をＣＧＴと共産党の手中に収めるためで

あった。その点、社会党系の「労働者の力」（ＦＯ）とカトリック社会主義系の民主労働総連合（ＣＦＤＴ）、とくにＣＦＤＴが学生に同情的だったのと対照的である。

学生側も負けてはいない。コーンバンディらはフランス共産党を「反体制の旗を掲げて体制に奉仕する」もの、いや、いまや体制の一角、体制の裏打ちであるときめつけた。

〝警察力〟が反乱を誘発

こうして既成政党の敵意に包まれ、学生大衆のなかでも一にぎりの少数派でしかなかったコーンバンディら過激派が、なぜあれだけの反乱を引き起こし、一千万労働者のゼネストを誘発して、さすがのドゴールを剣が峰に追いつめることができたのか。それは①政府および大学当局の不手際、とくに無思慮、場当たり的な警察力の行使が、学生を団結させ、一般市民の学生に対する同情を呼んだ、②フランスの栄光のために国民生活の底辺をなおざりにしてきたドゴール政権十年のヒズミで、下級労働者、青年労働者の間に不満がみなぎっており、それが学生暴動の火花で一気に爆発した――ためといえよう。

フランスの学生運動は一九〇七年（明治四十年）に結成されたフランス全学連（ＵＮＥＦ＝正式にはフランス学生全国同盟）を主体として発展してきた。ＵＮＥＦは任意加入のサンジカ（組合）であり、メンバーは現在学生総数六十万人の約十分の一、五、六万人前後といわれる。サンジカである以上、労働

組合と同じく組合員学生の生活擁護を当初の目的としてきたが、第二次大戦のナチス占領時代にはレジスタンスの一角となり、四〇年（昭和十五年）には占領下のパリで反独デモをした輝かしい記録もっている。戦後六〇年代に入ってからはアルジェリア独立を支援して反戦運動に活躍したが、アルジェリアの独立後は中ソ対立のあおりを受けて派閥抗争が激化し、学生食堂の改善要求やスシづめ教室の解消要求などで、ストやすわり込みをやる程度だった。

活動の停滞は、一つにはドゴール政権が青少年対策の一環として学生団体の育成に乗出し、六一年に非政治色を看板に学生全国連盟（ＦＮＥＦ）を結成させたからでもある。この団体は政府の肩入れもあって、一応組織はまとまっているが、右翼系や無関心学生がリードしているため、その後は影響力が低下している。

ＦＮＥＦの向こうを張って、共産党が指導、育成しているのが共産主義学生同盟（ＵＥＣ）である。これも六一年に結成されたが、ＦＮＥＦと違って、ＵＮＥＦの下部組織となっている。ＵＥＣのなかに、さらにその下部組織としてトロツキスト系の革命的学生連絡委員会（ＣＬＥＲ＝六一年結成）、親中国系の共産主義青年同盟ＭＬ派（ＵＪＣＭＬ＝六六年結成）、トロツキスト系で国際連帯に熱心な革命的共産主義青年団（ＪＣＲ＝六六年結成）、ベトナム反戦委員会（ＣＶＢ＝六七年結成）などができている。このほか、ＵＮＥＦにはアナーキストの団体がかなり属しているが、アナーキストは組織の固定化をきらうため、その実体はつかみにくい。共産党系が多くの派閥に分かれているため、ＵＮＥＦの執行部は統一社会党系の勢力が強いが、任意加入という組織原理と、ＦＮＥＦに対する警戒心から少数派の脱退や、分裂さわぎが起こらないのが強味である。

ベトナム戦争の進展は、ＵＮＥＦを再び反戦運動へ動かしたが、アルジェリア戦争と違って仏軍が参戦していないので、盛り上がりはいま一つ欠けていた。一方、フランスの学生数は五八年の十七万人から、現在は六十万人と大幅にふえたのに対し、大学はつい最近まで十六、やっと二十三校になったばかりで、各大学の施設拡充も学生数に追いつかず、教室難は極度に悪化していた。バカロレア（大学入学資格検定試験）にパスすれば、誰でも自由にどの大学へも進めることになったため、パリ大学へは十六万人が押しかけ、ソルボンヌでは三万人の学生が常時「物理的にあふれて」いるといわれる始末。学生たちは講義が終わると次の教室へ走り、通路から教壇、さては教授の机の端にまで腰掛けて、それでも入れない場合が多いという、大変な「競争」を強いられていた。しかも講義の選択範囲はせまく、苦労して卒業しても、文科系の学生には就職難が待っている――。不満は教室に充満していた。しかし試験に追われるのが第二の本性となってしまった学生たちには、不満を正しい方向に噴出させるキッカケが、なかなかつかめなかった。

大学制度については、別の方角からも批判の声があがっていた。左翼ジャーナリストのセルバン・シュレベールがそのベストセラー「米国の挑戦」で欧州、とくにフランスの大学のナポレオン時代そのままの旧式な組織、運営をヤリ玉にあげ、米国の大学教育と比べてみせて警鐘を打ち鳴らしたからである。心ある教授や若手研究者、教職員らは、この警告に真剣に耳を傾けたが、彼らもまた長年の権威主義的伝統に守られた象牙の塔をゆさぶるキッカケをつかみかねた。

こうしてフランスの大学には、雷雲のなかのように不満と不安のイオンが満ち満ちて、ほんのわずかのキッカケさえあれば、たちまち雷雨を呼ぶばかりになっていた。そしてそのキッカケを与えたの

は、皮肉なことに、一にも二にも三にも「警察力」であった。

千里の堤防もアリの穴から崩れるという。ソルボンヌの反乱も、発端は小さな事件であった。六七年四月、ソルボンヌのナンテール分校の男子学生が女子寮にストームをかけ、ホールに泊まり込んだのである。ナンテールはパリ郊外、アラブ移民の建てた町で、周囲は沼地、校舎は新式のモデル校だが、まだ図書館もなく、周囲に娯楽施設もなかった。

男女寮生の相互訪問はフランスの大学ではご法度だった。「われわれは子供ではない」——学生らが何度も抗議して、ようやく女子の男子寮訪問は午後十一時まで認められたが、男子の女子寮訪問は許されない。「女子は誘惑されやすい」という古典的な理由からであった。四月のストームはこれに抗議したもので、何ら実害のない、他愛ないものだった。ところが学校当局は朝とともに警官隊を導入、男子学生を威圧して立退かせたのである。刺激された学生は政治意識を高め、アナーキストとカトリックの間に奇妙な同盟関係が成立した。そして六七年十一月、ナンテールの学生は①男女寮生の相互訪問、②施設の拡充、③教授との対話、④詰込み主義反対、⑤学問と学生生活の自由、⑥ベトナム戦争反対——などを掲げて、はじめてストライキを決行、反戦・反体制運動が活発になった。

赤毛のダニー登場

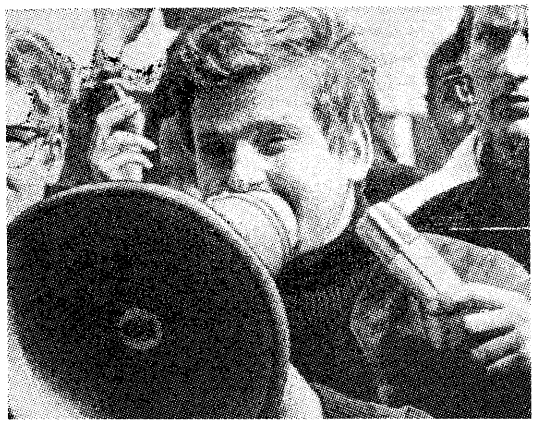
「赤毛のダニー」が脚光を浴びたのは六八年一月。ナンテール分校屋内プールの落成式のときである。式に出席したミソフ青年スポーツ相（前駐日大使）には「ミソフの青書」と通称される青年向け人生案内の著書があった。小柄だが機転がきき、弁も立つダニーは、すでに活動家として知られていたが、ミソフ氏と、

「あなたの本にはセックスのことが書いてない。これには全く同意できません」

「私が若いころは、そういう問題はプールで泳いで解決したものさ」

という対話をして男をあげた。ミソフ令嬢はダニーの同級生であり、学生たちはそれを知っていて喜んだのである。以後、ナンテールの学生騒動には、必ずダニーが指導者としてマークされるようになった。

三月十九日、パリのベトナム反戦デモでナンテールの前学生が一人逮捕された。三月二十二日、分校で開かれた抗議集会には八百人が集まり、その一部はダニーを先頭に、学長留守中の学長室に入り込み、机の上の万年筆一本だけを折り、あとは手を触れずに引揚げた。万年筆は大学の権力の象徴であり、警官隊導入の署名にも使われるもの、という理由であった。この「最初の直接行動」から「三月二十二日運動」というグループが生まれ、ソルボンヌ反乱の主役をつとめる



フランクフルト大学門前で1968年5月24日，西独政府の非常事態法案反対の演説をするダニー（UPI）

ことになる。

ダニーの処分に手を焼いた学長は、五月二日、ナンテール分校を閉鎖し、三日、ダニーをソルボンヌの教授らによる査問会に送った。ダニーは四百人の学友に守られてソルボンヌに乗込み、ソルボンヌの学生らと合流した。一方、右翼団体「オクシダン（西洋）」の学生会員らは、棒切れやチェーンで武装して、ソルボンヌから「アカ」を排除すると、突入の構えをみせた。ソルボンヌのロッシュ総長は結局警官隊を導入、ダニーらを構内から追い出し、ソルボンヌを閉鎖した。ソルボンヌの閉鎖は七百年の歴史でナチスが一回やっただけ。しかも警官隊の導入と重なって、学生の怒りは頂点に達した。「三月二十二日運動」より平均年齢の高い「五月三日運動」が生まれた。ＵＮＥＦはスト指令を発した。大学教職員組合（ＳＮＥＳ）もスト指令を発し、ＵＮＥＦと共同歩調をとることになった。ＵＮＥＦ、ＳＮＥＳ、三月二十二日運動、五月三日運動は四者共闘を組織し、デモやすわり込みを行なった。こうして第二の警官隊導入は学生と教職員を結びつけた。ＳＮＥＳは「学生をかばい、教職員としての義務を果たせ」との指令まで発し、以後の乱闘にも加わるのである。

第三の、最も運命的な警察力の発動は五月十日、血の金曜日といわれる、カルチエ・ラタンでの乱闘であった。警官隊が固めるソルボンヌ。それを取り巻いて学生、教職員は学生街カルチエ・ラタンの路上にたむろし、バリケードを築いて一種の「解放区」をつくろうとした。パリ会談をひかえたフランス政府は、治安確保をあせった。十一日午前二時十五分、警察機動隊と国家保安警察はデモ隊に突入、ベトナム戦争用の催涙ガス弾を使って通行人やレストランの客にまで襲いかかった。この〝市街戦〟の負傷者は一一五八人、逮捕者一〇八一人。しかし警察の行き過ぎに対する一般市民の反発

は、ついに労働組合を巻き込み、政府が十二日夜ソルボンヌ閉鎖解除などの融和策を発表したのも手遅れ、十三日のスト・デモ、さらに青年労組員の山ネコ的工場占拠から、なし崩し的ゼネストへと発展した。政府が組合に対し一律一〇パーセント賃上げ、最低賃金三五パーセント引上げ、週四十時間労働の漸進的実現など大幅譲歩をし、組合指導部が妥結気構えで各工場の大会に報告に行っても「ヌ・シニェ・パ（調印しなさんな）」の叫びに圧倒された。「国民投票で敗れれば引退する」とのドゴール演説（五月二十三日）は全く効果なく、投票用紙の印刷を拒否されて実現不可能となった。ドタン場に追いつめられた大統領が、五月三十日、一方では軍隊の支持をとりつけて反乱粉砕の構えをとり、他方では学生は大学の、労働者は工場の、市民は自治体の運営に積極的な参加が認められる「参加の社会」実現を放送で公約して、ようやく解散―総選挙のレールがしかれたのであった。

五月革命はこうして失敗した。「国家権力はあまりに強大」であった。そして学生たちは「あまりに民主的」であった――と過激派はいう。学生運動は抗議の意思表示としては強力だったが、抗議が〝成功しすぎ〟て大学コミューンが出来てみると、こんどは政治行動になかなか移れず、いたずらに討論を繰返した。警官隊の実力行使を媒介として発展してきただけに、警官隊がいなくなると、デモや抗議の対象もなく、積極的な意思表示をするには意見がまとまらず、大学コミューンは討論こそにぎやかだが、政治的にはマヒ状態だったというのである。

赤毛のダニーは五月十七日、ちょっと西独へ出かけたところをフランス政府から再入国を拒否されたが「フランスの国境線は長い」とうそぶき、二十八日シンパの税関吏に助けられ、自分自身に対する指名手配書まで記念にもらってパリへ戻ってきた。そして二十九日未明、ソルボンヌで記者会見を

行ない、

「暴力は資本主義につきものだ。暴力には暴力で対抗せねばならない。私は資本主義を転覆させたいが、資本主義が暴力を使うならこちらも同じようにせねばならぬ」

と間接的に同志学生らにハッパをかけた。

しかし学生たちの雰囲気は、十日前とはすっかり変わっており、暴力談義はもう沢山という空気。三月二十二日運動の仲間たちが、わざわざ別に記者会見をして、個人崇拝は排撃すると声明した。ダニーもアナーキスト色が強い。たちまち反省し「これからは皆のなかの一人として運動を続ける」と方向転換、暴力路線はタナ上げとなった。

暴力の是非はともかく、学生運動の側はドゴール政府に有効な打撃を与える能力をすでに失っていた。その一方、政府側は労働者の待遇改善と「参加の社会」の公約によって、労組と学生、一般学生と過激派学生を引き離すテコを手にした形であった。労働者はすでに待遇改善を獲得しており、経営参加が一応約束されれば満足できる立場にあった。

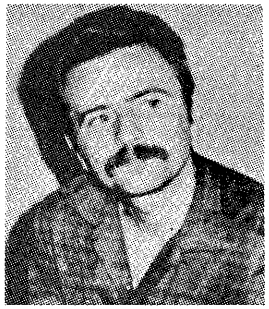
一方、各大学、各学部では、評議員会に学生の代表を参加させることにすでに決定しているところが大部分で、その比率は教授五〇、助教授・講師二五、学生二五というのが大部分。なかには学生の方が五〇というのもあった。医学部などではこれに加えて、カリキュラムに心理学を加えるなど、教科上の収穫も獲得していた。大部分の学生にとっては、五月三十日のドゴール放送はこうした既得権の保証と受けとられた。そうなると、それ以上あまり要求することもなかったのである。

学生運動のアイドルは……

労働者が学生と結んで政権をおびやかし、しかし結局政権に頭をなでられて学生から離れて行った経過は、現代学生運動のヒーローたちの株価を、いろいろに変動させた。ゼネストが続き、労働者への信頼感が高まったころは「革命的な条件がそろうまで必ずしも待たずともよい。条件は蜂起によって整えることができる」と積極策を説いたキューバの英雄チェ・ゲバラや、その友人でフランス人のレジス・ドブレの人気が急上昇した。ゲバラはボリビアでの悲劇的な最期もあり、最高の人気を集めている。

革命が結局失敗してからは、ヘルベルト・マルクーゼの理論がやはり正しかったと、再び声価を高め

ゲバラ



ドブレ

マルクーゼ

ているようだ。マルクーゼは一八九八年（明治三十一年）ベルリンに生まれ、第二次大戦前米国に亡命した哲学者。長いこと忘れられていたが米国のニュー・レフトがその著作の現代性を発見した。「一次元的人間」「抑圧的寛容」などの著書はその後西独でここ数年よく読まれ、フランスでも最近翻訳書が出版されはじめた。五月革命当時はちょうどフランスにおり、自論を〝検証〟するチャンスに恵まれた。現在カリフォルニア大学教授、ベルリン自由大学名誉教授。教祖的な風格があり、パリの女子学生のなかには本のカバーから顔写真を切抜いて壁に張っている者もいる。

マルクーゼによると「現代の技術が進んだ産業社会では、大衆は自己の欲望まで操作され、実際に必要でもないものをほしいと思い込まされ、それを一応十分に与えられて満足している。これは新しい形の全体主義であり、労働者階級は快適な〝民主的不自由〟に安住している。もしこれを目ざめさせ〝抑圧的寛容〟の麻薬の海から抜け出させようとすれば、官僚機構によってたたきつぶされる。インテリ、とくに学生だけが、社会の端の方にいる大衆に真の解放の福音を広げる先頭に立ちうる」という。「権力に打返されることを覚悟しての上なら、暴力デモも結構。自らの責任でやるのだから」といった論調である。「学生や社会的に差別されている人たちだけが革命をになう資格がある。労働階級は頼りにならない」という考え方が、現在のフランス学生活動家にピッタリくるわけだ。

アルジェリア解放戦争に従軍し、独立達成前に死んだマルチニック島生まれの黒人フランツ・ファノンは、第三世界出身のヒーローとして人気がある。彼もまた「植民地の労働者階級は反動的なことが多く、真の革命のにない手は農民だ」と説いている。毛沢東中国共産党主席も、ソ連共産党に対する反感から隠然たる人気を誇っている。文化大革命の官僚主義排斥も共感されているが、五十万人の

中国人がフランス学生支援のデモ行進をしたなどというニュースには「感心するよりもおかしくなって笑っちゃう」女子学生が多い。

「黒のゲバラ・ベレーをかぶり、外套のエリには毛沢東バッジ、壁にルディ・ドチュケのポスターを貼り、本ダナには真新しいマルクーゼの本。街を歩きながら、ときどき〝ホ・ホ・ホーチミン〟と叫ぶ——これが平均的なフランス学生活動家だろう」と皮肉る向きもある。

「赤毛のダニー」がなぜ登場しないか。ドチュケが撃たれて人気をさらったこともあるが、組織と指導者をきらうアナーキスト的傾向が、フランスにはとくに強いからでもあろう。ダニーはBBCテレビに出演のため英国に渡ったときも、学生仲間からはあまりモテず、カメラマンにばかり人気があった。「ボクは指導者なんかじゃない。拡声器だ。みんなの拡声器だ」と弁解していたという。

ドイツ系ユダヤ人の父とフランス人の母。父はナチスに追われてフランスに亡命、ダニーはフランス生まれだ。戦後ドイツに帰り、中等教育はドイツで受けたが、大学はパリを選んだ。両親は死去。孤児である。孤児には西独政府から年金が出るので、西独国籍にしているというチャッカリ屋でもある。ソルボンヌの討論場にフランス共産党員のルイ・アラゴンが党の態度について釈明しにきたとき、聞く耳もたぬといきり立つ仲間を押え、

「いいから聞こうではないか。ここでは裏切り者も発言の権利がある」

と、共産党を二重の意味でやっつけながら発言を認めるという切れ味もある。

指導者の素質は十分あり、実績も上がっていながら、というよりも、それだからこそ、当人も周囲も〝指導〟ということにアレルギー症状を起こす。そんなところに五月革命の純粋性ともろさがあ

り、過激派にとってのジレンマがあったようである。

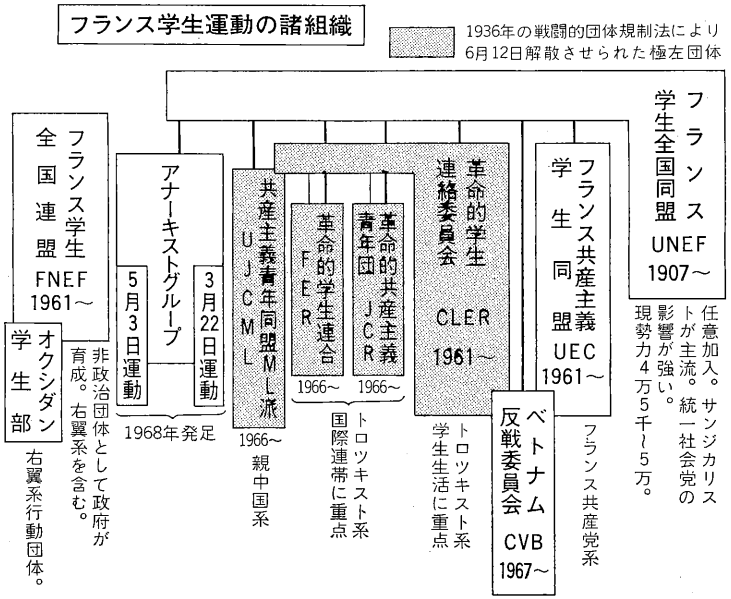
ダニーに比べると、UNEFのジャック・ソバージョや、先輩格SNESのアラン・ジェスマーは、やはり大組織を切り回してきただけあって現実的であり、権力アレルギーも少ない。闘争の収拾段階で、ともすればサムライ精神を発揮して玉砕的突撃をしようとするデモ隊をなだめては制止していたのが、この二人のコンビである。恐らく今後はこの二人で組織の維持にあたり、ドゴール政府の出方を見守るのであろう。そして秋、再び攻勢に出るようなときは、またダニーのようなリーダーが前線に躍り出てくるだろう。それがダニー自身であるか、別人となるか、誰にも予測はつかないのである。

ダニーの〝埋没の弁〟

ダニーの「運動への埋没」の弁を聞こう。

「権力は腐敗する。ボクは腐敗したと自分で思う。もういまのような地位は去って、運動のなかに姿を消すべきときだ。みんなの先頭に立つと、みんなから信頼される。これが腐敗のもとだ。なにかカッコいいことをいったりすると、みんなに頼られて〝あいつはOKだ。いいやつだ〟といわれる。これが腐敗なんだ。

とにかく、ぼくらは、きまった人間がいろんなことを取りしきることに反対だ。ぼくも二ヵ月とた



たないうちに、名の通ったリーダーではなくなるよ。リーダーとしてのぼくは、もう必要ないんだ。だいたい、五ヵ月前、いや、二ヵ月前でもいい、誰がダニーの名前を知っていたというのかね。

学生たちは社会での役割を見つけたとぼくは思うんだ。学生時代は就職するための勉強の時代じゃない。学生は一応特権的な状態にある以上、実際に政治的な行動をする義務がある。何かを望むなら、一生懸命努力して、行動して獲得しなければならない。ぼくらは大学を自分たちで運営したいと思った。やがて、労働者たちも工場を自分らの手で運営したがっていることがわかった。ぼくらが街頭に出て、労働者と接触して、それがわかったんだ。ついこの間まで、労働者は工場長と二パーセントの賃上げを交渉していた。いまは一四パーセント

賃上げだ。行動することがどんなに大事か、彼らにもよくわかったと思うよ。

だからといって、いつも警官隊と戦っていなければ、団結が維持できないというわけではない。ほかの行動形態も考え出さなければならない。ぼくらはここしばらく、理論を行動に移してきた。こんどは行動の経験をもって、理論に立帰るのだ。

革命後どうなるか、よくわかってからでないと、革命に参加できないという人があるが、それは間違っている。だいたい、最初のフランス革命の前には、革命後デモクラシーの時代になるなんて、誰も知らなかったじゃないか。ぼくらは予言者じゃない。理想主義者どころか、現実主義者だ。これから先どうなるか、誰も知らないではないか。ドゴールだって、ジョンソンだって、ウィルソンだって……。でもぼくらのいうことは、なかなかみんなにわかってもらえない。人々は誰かがどこかで、みんなの進む道を決定し、みんなを引っぱってゆくのだと信じ込まされているんだ。

一番心配なのは五月革命のハネ返りでフランスが右翼化すること。右翼が団結すればフランスは一九三〇年代のドイツのようになってしまう。そうなればぼくらも武装しなければならないだろう」

ダニーに焦点を合わせすぎたかもしれない。しかし、それは英雄やアイドルとしてではない。ダニーのいうように「みんなの拡声器」として、過激派学生の胸のうちをさぐる聴診器としてである。現代の西欧学生運動では、リーダーといい、ヒーローといっても、取替え可能な一種の道具と考えられており、そのことは、リーダーたちが一番よく知っているのだから——。

エピローグ

セーヌ河岸のパリ大学理学部には、総選挙後も学生たちがたてこもり、コミューンが生きていたが、一九六八年（昭和四十三年）七月五日、警官隊が突入し、学生を逮捕して、建物を占拠した。これに対し、ノーベル賞受賞者二人を含む同学部の教授ら七十二人は翌六日声明を発表「警官隊が学部の占拠を続ける限り授業もせず、試験も実施しない。警官隊の占拠による実験室などの損害については、政府が全責任を負うべきである」と強調した。同じく七月六日、フランス各界の著名な文化人は「フランス市民共同体運動」という新政治組織を発足させた。これは政党ではないが「議会制度はもはや時代の要請に十分答えることができない」とし、全国に支部を設けて「少数者の利潤に立たず、万人の必要に立脚する経済制度」と「教育制度の革命的変革」を推進するという。

一方ＵＮＥＦは五日グルノーブルで年次大会を開き、五百人の代表が暑さにハダ脱ぎになり、熱心に討議した。ソバージョ暫定委員長は「ＵＮＥＦのあり方を、もう一度ハッキリ規定し直す必要がある」とあいさつ、ＵＮＥＦが大学を労働者に利用させる計画を考えていることを明らかにした。

米メトロ・ゴールドウィン・メーヤー社はソバージョに対し、ロック・ハドスン、アーシュラ・アンドレスと共演、ハリウッドで学生運動の映画をつくるよう、百万フランの契約を提案したという。

病める社会への批判

アメリカ

ニュー・レフトの先駆者たち

「あなたは、動きのとれない自らつくり出した夢の世界に住んでいる以上、この社会のどこが悪いのか知りたいであろう。われわれは、ベトナム戦争が現実に行なわれている侵略戦争の一例であると指摘できる。あなたは、あなたの戦争をたたかわせるために、われわれを大砲のえじきとして利用していると指摘出来る。あなたの邸宅の窓の下には、あなたの不公平な労働政策、貴下の市政府と警察を通じて大学拡張政策を行なうために育ててきたゲットーが広がっている。

要するに、われわれは、われわれが受けている意味のない勉強、自己尊厳の危機、基本的に病んでいる社会の産物としての法人組織の歯車の歯となっていることに対するわれわれの目ざめを指摘出来る。

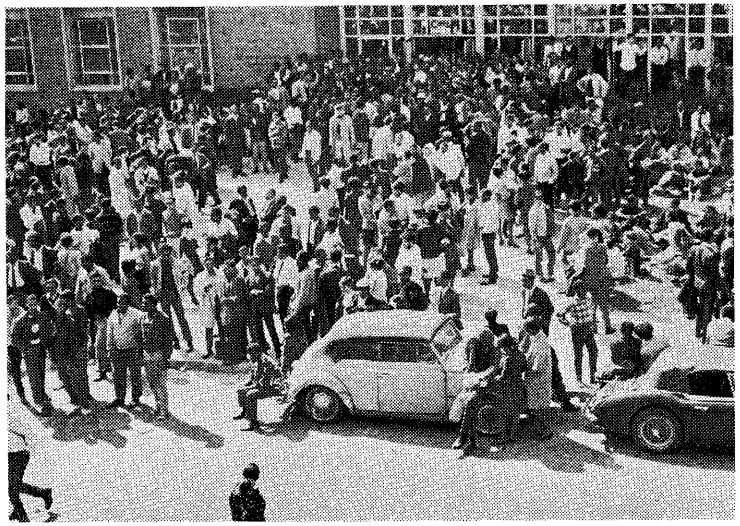
あなたの権力は、いま、直接の脅威にさらされている。なぜなら、われわれはあなたの世界、大学を引継ぐ前に、あなたの権力を破壊しなければならないからである」

一九六八年四月末に発生した、米大学史上最大の騒動の一つといわれるコロンビア大学騒動の指導者、二十歳のマーク・ラッドは、このような公開状をカーク同大総長に送った。

この騒動に参加、ストライキ実行委員会のメンバーとなったバーナード・カレッジ（コロンビア大の一部で、女子だけの学部）の女子学生ナンシー・バイバーマンは、こう言った。

「私たちが適合するようにといわれている社会は、良い社会ではありません。かなりの時間をかけて米国の歴史を勉強してきましたが、それは、暴力と抑圧の歴史です」

四月二十三日、大学広場に集まった約四百人の学生は、大学に隣接し、ハーレムと背中合わせのモーニングサイド公園までデモ行進し、大学が体育館建設用地として確保してあった区域のヘイを壊した。そのあと大学構内に戻ると、学部本部のあるハミルトン・ホールに向かい、同ホールを占拠、コールマン学部長室の前ですわり込みをはじめた。学生は学部長に会見を申し込んだが、学部長は「このような状態で話し合うことはいっさい出来



大学騒動は全米各地で続発。1968年３月20日、ワシントンのハワード大では、学生処分抗議のデモで約1000人の学生が大学本部にすわり込み、休校となった（ＵＰＩ・サン）

ない」と会見を拒否、そのまますわり込みを続ける学生を前に帰ることが出来ず、部屋にとじこめられた。

学生たちは、レーニンやチェ・ゲバラの写真やポスターを運び入れ、それを窓や廊下にかかげ「人種差別の象徴、体育館建設廃止」を叫んで気勢をあげた。

デモは、ほとんど白人学生によるものだった。学生たちは、占拠をつづけたが、その間、黒人学生が動き出し、約六十人のアフロ・アメリカン学生会は「白人学生は、十分に戦闘的でない。ハミルトン・ホールの占拠はわれわれにまかせるべきで、白人は退去すべきだ」と声明を出し、白人学生と交渉を開始した。

二十四日朝六時、黒人学生が白人学生にとってかわり、黒人学生はコールマン学部長を釈放した。ハミルトン・ホールを出た白人学生たちは、こんどはカーク総長の事務室のあるロウ記念図書館に移った。カギのかかった窓やドアを破り総長事務室を占領した学生たちは、窓に「解放地区」「自由に参加せよ」などと書いたポスターを張った。

こうした第一の実力行使に刺激されてか、ビル占拠に参加する学生はふえ、二十五日夕方までに他の三つの構内建物、計五つが学生に占拠された。

大学はマヒ状態になった。授業は当然中止となった。教授たちは緊急会議を開き、学生の占拠を非難する声明を発表した。学生たちは、大学がデモ参加者への処罰をいっさいしないと約束しないかぎり占拠をとかないと主張、大学管理者、教授会、学生の三者代表によって処罰問題を検討する委員会をつくろうという教授会の提案を拒否した。

膠着状態がつづくにつれ、デモや占拠に反対する学生も現われ、とくに運動部を中心とする学生は、大学当局に占拠学生を追出す実力行使を買って出る申し入れを行なった。しかし、学生同士の乱闘を恐れた大学はこの申し入れを断わり、あせりの出てきたカーク総長は警官導入を決意した。そのとき、学生の行動に同情的な若い教授たちが立ち上がり、ロウ記念図書館の前に約三十人の教授が腕を組み、手首をハンカチで結んで、警官の図書館内立入りを阻止する行動に出た。このためカーク総長は、警官導入を一時中止しなければならなかった。

若手教授たちは言った。「学生たちの言い分には、かなり正しいものがある。大学はもっと彼らの意見に耳を傾けるべきだ」

学生の言い分やデモを起こし、ビルを占拠した理由はいくつかあった。第一に、モーニングサイド公園の大学体育館建設反対である。これは、五九年以来の大学当局の懸案であったが、最近、ハーレムの指導者たちは、この体育館建設はハーレムのこどもたちから遊び場を奪うものと、建設反対の声を高くしていた。また、その構造が、大学に近い方に学生用の大きな入口をつけ、ハーレムの側に小さな入口をつけ、ハーレムの人々にも利用出来るように計画されたが、それがかえって〝人種差別〟のそしりを受けていた。だが、体育館問題の根底には、ここ数年大学が施設拡張計画をすすめるにあたって、周囲の住民や地域社会と十分な話し合いや連絡をとることなく行ない、周囲の住民とくにハーレム住民の生活を破壊しつつあったという事実がある。学生たちは、これを「大学の独裁制」と非難していた。

第二に、大学が、国防総省の下部機関である防衛分析研究所と密接に関係し、その下請け機関とな

っていることに対する学生の不信と怒りがあった。学生たちは、同研究所はベトナム戦争に関係があり、かつ黒人暴動の抑圧手段を研究していると主張する。学生たちは、大学はこのような軍事研究や軍産複合体の仕事に加担することを拒否し、防衛分析研究所の仕事からいっさい手を引くことを要求していた。

第三に、学生たちは、三月末、防衛分析研究所問題で、ロウ記念図書館内の屋内デモを行なったが、それに対し大学側はこのデモの指導者六人を処罰し、かつ屋内抗議を禁止する規則を出したことへの反対である。デモ指導者の一人はラッドであった。処罰反対の運動は、単に学生たちが処罰を恐れたからではない。そこには、より大きな問題がひかえていた。

体育館の問題はなにも降って湧いた問題ではなかった。すでに七十以上の地域団体が建設阻止運動を展開していたし、四月初め、教授会有志は、大学当局に対して「むやみな拡張政策」を変更するよう要望書を出していた。防衛分析研究所の問題も、ここ数年間、ベトナム反戦とからんで各大学学生たちの攻撃のマトであり、コロンビアでも大学側が、防衛分析研究所との関係を断絶するか、存続かを専門委員会に検討させていた。

学生をデモにかりたて、占拠を決意させた根底の問題は「学生は、自分たちの生活に影響を及ぼす諸決定に対して、みずから決定を下す民主的権利をもっている」というスチューデント・パワーの論理である。コロンビア大では、大学運営の一切の重要政策を決定するのは、二十一人の理事会で、それも卒業生代表理事はわずか六人、あとはニューヨークの大産業や金融資本を代表する終身理事という〝半独裁制〟下にある。二千五百人の教授陣には、全学教授会もなく、政策決定に意見を反映させ

マーク・ラッド

ることは出来なかった。

全処分撤回を主張する根拠には、学生の処分には当然学生が決定に参加すべきであるとの考えがある。体育館問題、防衛分析研究所問題という地域的および時局的問題をきっかけに、学生たちは決定参加というスチューデント・パワーの権利主張を行なったのが、コロンビア大騒動の核心なのである。

ラッドによると「学生は、不正な政策を変更させ、苦情を正す権利を持たねばならない。われわれの立場は、人間は仕事を持つ権利があるというのに似ており、それは合理的な主張だ」ということになる。

一週間、大学の主要建物を学生に占拠され、大学が無政府状態となったとき、カーク総長はやっと譲歩した。リンゼイ・ニューヨーク市長の要請もあって体育館建設は中止となり、今後地域社会、つまりハーレムの指導者たちとの協議なしに体育館建設は行なわないと発表、また大学と防衛分析研究所との関係は断ち切るとの決定を下した。リンゼイ市長の中止要請は、もし体育館建設が強行されればハーレムに暴動が発生するとの恐れから出た政治的なものであった。

しかし、カーク総長は、学生の処分全面撤回は、大学の秩序と権威の問題であるとして全く譲らず、二十八日教授たちが学生を非難し処分撤回に反対したこともあって、ついに警官導入を決意した。三十日午前二時半、隣のハーレムが寝静まったころ、千人の警官隊が大学に到着、五つのビルから占拠学生を追出し、約七百人を逮捕した。

警官導入は、学生を大きく刺激した。ビルを占拠した学生たちは、ニュー・レフト（新左翼）といわれる「民主主義社会のための学生会」（ＳＤＳ）の学生を中心とした過激な学生たちであったが、警官導入は、穏健派でビル占拠に積極的に参加しなかった学生たちをも、過激派支持に押しやってしまった。ただちにストライキが呼びかけられ、ストライキ実行委員会が設けられた。大学新聞と穏健派で占められている学生会すら、カーク総長とトルーマン副総長の辞任を要求した。約四百人の教授たちも、全学ストを支持した。

事態の急転で、教授たちやカーク総長はやっと動き出した。コロンビア大学史上初めて、全教授が会合、事態収拾と大学機構改善の討議を行ない、十二人からなる全学教授会執行委員会を設け、大学改革の研究をはじめることになった。カーク総長は、理事会が大学機構改善のための小委員会を設け、改革案を研究すると発表、さらに今回の騒動の原因を調査するため、大学外の委員による事実調査委員会が発足、ハーバード大学の憲法・行政法学者コックス教授が委員長になった。教授会はまた、五月五日、学部の正式授業と学期末試験の中止を発表した。

学生側は当初、急進派、穏健派ともに協力していたが、教授会が処分問題や機構改革について学生の討議参加を呼びかけたのに対し、急進派が討議参加の前提条件として、デモ参加学生への処分をいっさいしないことを大学に要求、再びデモを企てたことで、学生間にも分裂が生まれ、教授会は急進派に対して硬化してきた。

学生の分裂に乗ずるかのように、大学は五月二十一日、今回の騒動の指導者たちであるラッドを初め四人の急進派学生に一年間の停学処分を発表した。翌二十二日、処分反対のデモが自然発生的に生

まれ、約二百五十人の学生が再びハミルトン・ホールを占拠したが、警官隊が再度導入され、ラッドを含む百数十人が逮捕された。

六月四日の卒業式は大学内で開かれず、近くの教会で行なわれ、カーク総長の代わりにホッフスタッター歴史学教授が卒業生に演説を行なった。

このコロンビア騒動をラッドは「四月革命」といった。大学をひっくり返すことは出来なかったとしても、過激な一握りの学生の直接行動が、大学の巨大な権力を震え上がらせうることを全米に思い知らせた。ラッドをはじめ、過激な学生たちの行動の対象と目的はなんであったか。彼らにいわせれば、それは大人の世界の偽善と不正直であり、ベトナム戦争や人種差別を生む現在の米国社会である。もっとも身近な対象は、米国社会の産物である大学であった。ラッドはカーク総長への公開状で、大学とベトナム戦争が、人種差別と大学が直接つながっていることを、大胆に述べた。コロンビアの学生ストライキ実行委の一人は言う。「理事会がこの大学を二百年も運営してきた。そして彼らは間違った方向に運営してきた。彼らは、ＩＢＭ、ソコニー石油、エジソンといった大産業の連合体を代表しており、彼らの利益のために大学を運営している。学生や教授のためにではない」と。ここには、大学が、エスタブリッシュメント（既成社会）、大企業や軍事産業に適合し、その歯車となる人間をつくり出すサービス・ステーション化し、人間の価値や理想を教え、個人の価値と尊厳を育てる場ではなくなっているとの告発がある。大学が人殺しの軍事研究に協力し、教授たちが軍産複合体に奉仕することに熱中して、教育することを忘れているとの怒りが現われている。ラッドは、こんどの行動の目的を「学生を過激化（ラディカライズ）すること」だと言っているが、これは、学生一般に大

学の実体をみせつけ、行動のみが成果をあげることを知らせることだった。

〝大学の偽善性〟をつく

大学の政策決定への参加を要求するスチューデント・パワーと、既成社会の不正と偽善を糾弾する学生の運動は、コロンビアにはじまったわけではない。それは一九六四年秋にカリフォルニア州立大バークレー校で起こった「言論の自由運動」（FSM）から出発している。さらに、それは、一九五〇年代の「静かな世代」から六〇年代の「抵抗の世代」へと学生の意識・態度を変えていった公民権運動、人種差別、ベトナム戦争によって助長、推進されてきた。

バークレーのFSM運動は、大学正門前の広場で学生が政治活動を行なうことを大学が禁止したことからはじまった。カリフォルニア大では、大学構内での政治活動はいっさい禁止されていた。学生たちにとって、正門前広場は、同大のハイド・パークとして、政治運動のための資金集め、パンフレット配り、公民権運動への学生募集などの唯一の場であった。大学は、夏休みあけ新学期の九月十四日、その広場が大学所有の土地であることを理由に、政治活動禁止令を出したのだった。

六四年は、南部での黒人の公民権運動がいちばん活発化していたころであり、バークレーからは多くの学生が夏休みに南部へ応援にいっていた。広場がとりあげられたことは、学生の政治運動を弾圧することを意味していた。反対デモが数回繰返され、デモを指導した学生が停学処分を受けた。十二

月二日夜、FSMの学生たちは大学本部のあるスプロール・ホールを占拠、ブラウン・カリフォルニア州知事はただちに警察を出動させ、学生七百九十六人を逮捕した。全学ストがただちに呼びかけられ、教授陣もそれを支持した。十二月八日、教授会の仲介で①今回の騒動に参加した学生の処分を全面撤回、②政治演説の内容を大学が規制したり、構外の政治活動は学内規則の対象とならない――などの線で解決した。

FSM運動は、出発点において言論の自由を守り、政治活動の場を取返すことにあったが、この運動をささえ強化したものは、官僚的大学、偽善的リベラリズムへの反抗であった。カリフォルニア大は、世界最大の大学であると自負し、ノーベル賞受賞の科学者を多く抱え、カー総長をはじめリベラルをもって任じる学者が多くいた。だが、学生の目には、それが顔のない怪物であり、既成社会の歯車の歯を生産する一大協同体としかうつらなかった。物理学者は、軍隊に代わって軍事研究を行ない、社会科学者は政府の内外政策のための調査や資料提供に没頭している。民主主義と自由を教え、かつそれについて書きながら、政府と大産業の需要に適合するような教育しかしていない。そういった大学の体質が広場のとりあげを決め、言論の自由を抑圧している、と学生の目にうつったのだった。

FSM運動は、一つの団体、ひと握りの指導者によって始められたのではなかった。学内の人種平等会議（CORE）、青年民主党、青年社会主義連盟、青年社会主義連合、その他平和団体などあらゆるリベラル、左翼、また政治活動に関心を持つ団体が参加、運動の初期には青年共和党やゴールドウォーター支持グループまで加わったほどだった。多くの参加者は、過去に南部の公民権運動に参加した経験を持っていた。FSMの指導者、哲学専攻の優等生マリオ・サビオは、この運動にはいり、リ

ーダーとなった理由をこう言っている。

「私は、この夏をミシシッピ州で過ごした。そこで私は専制政治を目撃した。少数者が多数者に対してその意思を押しつけているのをみた。そして、私はカリフォルニアへ帰って来て、大学がミシシッピへ支援にいく学生を募集し、その資金を集める活動を阻止していることを発見した」

また、こうも言った。「大学は、民主党員、共和党員、さらに急進社会主義者をも寛容をもってうけ入れる。それらが討論していても見守っていられる。それはただ議論だけだからだ。しかし、大学は公民権運動を寛容出来ない。なぜなら、公民権運動は結果をともなうものだからだ」

大学のリベラリズムは口先だけで、行動に移らない偽善性に、彼らは怒りと不信をぶつけたわけだ。六四年の夏は、学生非暴力調整委員会（SNCC）が、北部の白人学生と協力して、人種差別のいちばん強固なミシシッピ州で、「自由学校」を運営し、黒人の投票権登録運動を支援し、黒人のミシシッピ自由民主党の建設を助けるミシシッピ夏期計画が展開され、サビオをはじめ多くの学生がカリフォルニアから参加した。SNCCの活動家三人が白人の差別主義者に同州フィラデルフィアで虐殺されたのはこの時であり、人種差別の暗さと残酷さをいやというほど知らされていた。

新鮮な息吹き……SDS

学生活動といえば、女子学生の美人コンテストとか金魚を飲込むことぐらいしかしなかった「静かな世代」を政治・社会活動に目を向けさせたのは、人種差別の問題であった。

一九六〇年二月、そのころから南部の食堂や公園など公共施設での差別に反対して黒人学生がすわり込みの抗議を積極化した。黒人学生にはそれまで組織らしい組織もなく、それぞれの地域で地域の活動家と一緒になって抵抗運動を行なっていたが、運動が広範かつ積極化するにつれ組織化の必要が生じ、四月、ノースカロライナ州ローレイでSNCCが誕生した。六一年五月、COREが主唱したフリーダム・ライダーズのバスに白人、黒人の学生が相乗りし、首都ワシントンから公共バスの座席を差別している南部へ向かい走った。途中で逮捕されたり、なぐられながら、抗議のバスはニュー・オーリンズまで走り続けた。その夏、SNCCは、ミシシッピで黒人投票権登録運動を開始、白人はこれを暴力で阻止しようとし、SNCCの一員ハーバート・リーが殺された。

公民権運動の経験、とくにフリーダム・ライダーズの経験は、北部や中西部の白人学生を目ざめさせた。

当時、米国の左翼は、五〇年代に吹きまくった赤狩りのマッカーシーズムのため、ちりぢりになり息の根がほとんど止まっていた。労働組合は保守化し、既成権力の擁護者と化してしまっていた。若い世代が没政治的になり、あるいはニヒリズムに走り、現実逃避のビート族になったのもこの時代であった。だが、マッカーシーズムの嵐がやっとやんだ五〇年代の末期、マッカーシーズムの残した同調主義、自己満足感、それを支える豊かな社会に対する反発として、新たな急進的左翼が芽生えつつあった。この新しい左翼を成長させる刺激剤となったのは、一つは、米ソの果てしない軍備競争、とくに核軍備競争に対する平和団体の反戦・反軍備運動であり、もう一つは前述してきた公民権運動で

あった。

平和運動は、クエーカー教徒など宗教者を中心に展開され、その行動の原理は、非暴力主義であった。この原理が公民権運動にも適用されたことはいうまでもない。

平和運動と公民権運動に刺激を受けた白人の学生の間から、新しい思想を求める動きが表面化し、ウィスコンシン大では「左翼研究」、シカゴ大では「新大学評論」という理論雑誌が生まれた。一九二〇年代に結成された産業民主主義学生連盟（ＳＬＩＤ）の後身として、六〇年には、「民主主義社会のための学生会」（ＳＤＳ）がミシガン大など、東部、中西部の主要大学に復活した。ＳＬＩＤは一九〇五年（明治三十八年）結成されたフェビアン社会主義団体である産業民主主義連盟（ＬＩＤ）の青年部にあたるもので、いわば古い左翼の団体であった。

だが、ＳＤＳの会員は、若い世代であり、公民権運動に経験を持ち、米国社会の悪をいやというほど体験してきた学生であった。彼らにとって、古い左翼の考えが水と油のようなものであったとしても当然だった。六二年ミシガン州ポート・ヒューロンで開いた全国大会で、ＳＤＳは親のＳＬＩＤから完全独立、ポート・ヒューロン宣言を採択した。

同宣言は、ニュー・レフトの基本的な考えを明らかにしてつぎのように言う。

「われわれはこの世代の人間である。すくなくとも心地よい環境のなかで育てられ、現在は大学生であり、しかもわれわれが継承すべき世界を不愉快に感じている世代である。

われわれがこどものときの米国は、世界一豊かで最強の国、原爆を持った唯一の国、国際連合の創始者であった……すべての個人に対する自由と平等、人民の人民による人民のための政治――これ

ら米国の価値をよきものとわれわれはみていた。多くのわれわれは、自己満足のうちに成熟しはじめた。

しかるに、われわれが成長するにつれ、われわれの心地よさは、無視しえない出来事で侵蝕された。第一に、頑迷な人種差別に対する戦いに象徴される、人間堕落の事実であり、われわれの多くを沈黙から行動へ余儀なくさせた。第二は、核爆弾の存在によって象徴される冷戦の事実が、われわれはいつ死ぬかわからないという意識をもたらした……この二つは、個人としてのわれわれが迎え撃ち解決する責任をとるべきものである……。

この時代の通俗的な道徳的用語、政治家の道徳――自由世界、人民民主主義――は現実をほとんど反映せず、それは支配的な神話として機能している。しかし、われわれの大学における経験は、われわれに道徳上の啓蒙を与えてくれなかった。教授や大学当局は論争をＰＲのため犠牲にし、カリキュラムは、世界の動きつつある出来事よりずっと遅れて変更される。彼らの技能と沈黙は、軍備競争への投資者によって買われ、熱情は非学問的と呼ばれる。

われわれは、所有、特権あるいは環境に根ざした権力を、愛、思慮深さ、理性、創造性に根ざした権力と独自性に代えたい。社会組織としては、われわれは、つぎの二つの中心的課題が保証されるような、個人参加の民主主義を確立したい――すなわち、めいめい個人の生活の質と方向が決められるような社会的決定に、ひとりひとりの個人が発言権をもつこと。また、社会が、人間の独立性をはげますように、また人々が共通してそれに参加出来る手段を与えられるように組織されること……」

この宣言は、当時のミシガン大学新聞の編集長で、ＳＤＳの創始者の一人、トーマス・ヘイドンが起草したものだが、そこには非人格化した人間関係を生んだ産業社会、コンピューター文明、それに寄生する大学への抵抗がはっきりと主張され、なによりも人間存在の回復を求め、個人の価値が認められ生かされる「決定に参加する民主主義」の考えが打出されている。

彼らがニュー・レフト（新左翼）と言われるのは、古い世代の左翼がイデオロギー論争にあけくれ、共産主義か、反共社会主義か、あるいはトロツキー派などの分派に分裂、討論ばかりしていたのに反し、彼らは非イデオロギー的で、物事を善か悪かの道徳的基準でみ、悪を正すためにすぐに行動に移る姿勢をもっている点である。

彼らからみれば、国内の人種差別も、ベトナム戦争も、米国という健全な社会の単なる非行ではなく、米国社会そのものが病んでいることの結果であることになる。

スチューデント・パワーの牙城は、この新左翼の代表選手ＳＤＳである。ポート・ヒューロン宣言後、ＳＤＳの主な活動は、ＳＮＣＣの南部での活動にならって、都市貧困地域でのコミュニティ組織化活動であった。これには、ＳＤＳ会員の公民権運動参加経験という背景があった。南部での黒人は、北部都市ではゲットーであった。六三年には経済調査行動計画（ＥＲＡＰ）をたて、ニューアークやシカゴなど七ヵ所にコミュニティ・ユニオン運動を開始した。これは六四年まで続くが、ベトナム戦争がエスカレートし、米国の介入が激しくなると、ＳＤＳの学生の関心はベトナム反戦に移った。ベトナム戦争は道徳的に間違っているとするＳＤＳ学生たちは、まずミシガン大学で六五年三月、ベトナム・ティーチ・インを組織、三千人の学生・教授を集めた。ティーチ・インはその後あっという

間に全国各大学に広がり、五月には全国的ティーチ・インが開かれ、米国務省は代表を送って政府政策を弁護しなければならなかった。四月、ワシントン反戦デモを組織、二万五千人を動員したのもＳＤＳだった。徴兵カードの焼捨ての運動を指導したのも、その後の反戦デモにおいて主力をなしてきたのもＳＤＳであった。

さらに、六四年秋のバークレーのＦＳＭ運動は、ＳＤＳの目を大学改革運動に向けることになった。スチューデント・パワーというスローガンは、この大学改革運動のなかで唱えられ始めたもので、その時期は六六年夏という。

ある調査によると、六七年九月、十月の二ヵ月に、七十の大学生デモが大学改革に関連して行なわれ、六八年は一月一日から四月末までに百以上のデモがあったという。大学改革といっても、寮の門限を延長せよ、黒人学生にスカラーシップ（奨学金）を増加せよ、予備士官訓練の強制受習をやめよ、女子学生の男子学生寮個室立入りを許可せよ――などその次元の高低はさまざまである。これまで米国の大学史上でも、そういった学生の要求にまつわる騒動や混乱はあったが、スチューデント・パワーの意味は、学生が学生にかかわる決定に参加する権利があるという自覚である。この考え方は、徴兵問題にも適用される。つまり、徴兵は学生の生活にとって重要な問題である以上、徴兵制の決定について学生が参加する権利があるとする。

ＳＤＳは、十一大学の代表五十九人で創立されたが、ベトナム反戦運動とともに組織は拡大、会員も多くなった。現在三百の支部と三万五千人の会員がいるというが、会員の多くは、問題に応じて参加する会員もおり、全国会員として会費を払っているのはそのうち六千六百人といわれる。興味ある

ことは、活動的な会員のほとんどが、豊かな社会の恩恵をうけている中産階級の子弟であり、かつ学業成績のよい者であることだ。大学のクラスの上から五―一〇パーセント内の成績を示すものばかりだといわれる。

コロンビア大SDS支部長のラッドを例にとってみよう。父は予備役陸軍中佐で不動産業者、ニュージャージー州の郊外に住み、ラッドの兄は弁護士という典型的な中産階級の家庭の出、大学の成績は平均以上のBプラス、苦労を知らないいわばお坊っちゃんだ。なぜ、ニュー・レフトの団体にはいったか。ラッドは言う。「他人はわれわれがなぜ強硬な立場をとるのかと聞く。つまりだね、リベラルの人々は現実世界を信じない。彼らは、なにごとをも合理化出来る。だが、常にスラムは存在し、戦争がある。多くの人々はこれを分析しようともしないし、挑戦もしない。ラディカルな人間は、スラムや戦争を認めるわけにはいかない」

米国社会の恩恵をいちばん受けているはずの中産階級の子弟、経済的苦労もなく一流大学へ行けるこどもたち、就職や将来の地位にも心配のない彼らがなぜ過激に走るか。その説明はこうなされる。彼らの親たちは恐慌を経験し、貧困からやっと豊かさと地位を得た人々だが、その子弟は豊かさのなかで育ち、貧困など知らない。これらの両親はニューディールの中で育ったから基本的にはリベラルな思想の持主であり、両親は貧しい者やしいたげられた者への同情や抑圧者への怒りを子弟に教える。そう教えられた子弟たちは、自分の周囲の豊かさとスラムの矛盾に敏感になる。経済的な心配はないから、こうした矛盾や不正義と闘う行動に走らせる。親たちのリベラルが口では同情的なことを言いながら、なにも行動せず、豊かさの中に安住しているのをみて、そこにリベラルの偽善性を見出

す――つまり彼らは親たちから教えられ、親に反発していく。しかし、ここには思想的な相違はあまりない。ラッドの父は、ラッドが逮捕されたとき、保釈金二千五百ドルを出して、息子を留置場から解放したが、そのとき「私は不況時代の人間だ。私の最大の関心事は生活をどうするかだった。マークが政治のような活動に使う時間を持てることは楽しいことだ」と言った。母親は「私の息子、革命家」と誇らしげに言ったものだ。彼らは、既成社会が押しつける順応主義を排斥し、行動の効果や支持を考えず、正しいかどうかを考えて行動する。個人の責任と尊厳を基本的価値として決定に参加する民主主義をとなえる彼らは、古典的といえるほどの民主主義への愛着をみせており、せんじつめれば、彼らは民主主義の申し子なのである。

繁栄の中の反抗

西ドイツ

絶えざる革命を求めるSDS

西ベルリンの銀座クアフュルステンダムはその日もせわしく息づいていた。午後四時三十五分ごろ、通りを赤い婦人用の自転車に乗って若い男がやって来た。鋭い目付きと荒々しいアゴヒゲがアルコーナ印の婦人自転車と奇妙な対照をなしていた。突然、一人の若い男が彼に飛びかかっていった。自転車の男は振り切って逃げようとしたが、車に足をとられて、立往生してしまった。この時だった。飛びかかった男の手に握られたピストルが火をふいた。至近距離から発射された三発の銃弾は頭、首、胸に次々と命中し、相手の男は大地にどうと倒れた。

突然の銃声にあわてて身を伏せた通行人たちもすぐ気を取り直して、倒れた男のそばにかけ寄った。見る間に黒山の人だかりとなった。

「お父さん、お母さん」「人殺し、人殺し、兵隊だ、兵隊だ」

撃たれた男が弱々しく叫ぶのを何人かの人たちは聞いた。

「クアフュルステンダムで男が撃たれた」

午後四時三十九分、西ベルリン警察の一一〇番に相次いで三つの通告電話がかかってきた。誰が撃

たれたのか一人として言わなかった。すぐに緊急指令が出された。午後四時四十分、無線カー〝ベルタ47号〟が現場に到着。二人の警官が人垣を分けてはいっていった。

四月中旬、復活祭をはさんで西ドイツ全土に学生の抗議デモを引起こし、世界的にも波紋を広げた西独学生運動の指導者ルードルフ・ドチュケ（一九六八年現在二十八歳）の暗殺未遂事件はこうして起こった。一九六八年（昭和四十三年）四月十一日のことである。

現場にかけつけた警官隊に、通行人の一人が言った。

「茶色の皮ジャケツを着た男がネストア通りをかけて逃げた。そいつが犯人だよ」

パトカーは直ちに追跡を始めた。通行人に追われていた犯人は現場から一〇〇メートルほどのところで脇道に入り、新築中の地下室に逃げこんだ。警官がまだガラスのはいって

ドチュケそ撃事件で警官隊に激しく毒づく学生たち（1968年4月）

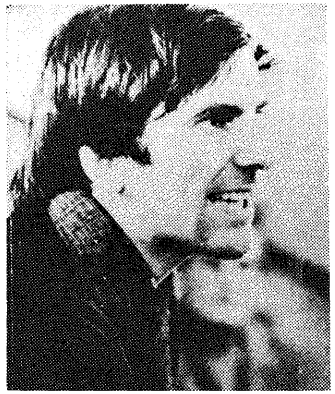
いない地下室の窓から威嚇射撃をした。警官隊の数は百人ほどにふえ、抵抗を続ける犯人に五十発もの催涙ガスが投げこまれた。だが犯人は屈服しない。パトカーにいた警官が一人、援護射撃を受けながら地下室にはいっていって降伏を呼びかけたが、犯人は物も言わずピストルを乱射し続けるだけだ。しかし射撃の腕前は警官の方が数段上だった。やがて犯人は胸と腕を撃たれて倒れた。

指紋から犯人はニーダーザクセン州パイネに住所を持つ前科二犯のペンキ屋ヨゼフ・バッハマン（昭和四十三年現在二十三歳）とわかった。実の父親を知らない私生児に生まれたバッハマンは、暗い生い立ちのせいか、十六歳の時、窃盗罪で逮捕され、六七年に、強盗罪で懲役一年の刑を満了したばかりだった。バッハマンの反社会的な性格はヒトラーへのあこがれと結びついていった。彼の部屋にはナポレオンと並んでヒトラーの肖像画がかけられ、書棚の中には、ナチ時代にバイブルだったヒトラーの自叙伝〝マイン・カンプ〟（わが闘争）があった。当然バッハマンは共産主義者に対し盲目的な反感を抱いていた。

このような男にとって、最近めきめき名を売出し、マス・コミにも大きく登場し始めた過激な左翼学生団体SDS（デア・ゾチアリスティッシュ・ドイチェ・シュトゥデンテンブント、社会主義ドイツ学生同盟）の指導的理論家ルードルフ・ドチュケが次第に憎むべき対象となっていった。四月五日、海の彼方アメリカで黒人運動指導者マーチン・ルーサー・キング師が反社会的な白人に暗殺された時、彼の心は決まった。洗足木曜日（復活祭前の木曜日）の四月十一日午前九時十分、バッハマンは西ベルリンのツォー（動物園）駅を降りた。そしてクアフュルステンダムのSDSベルリン本部に向けて歩き始めた。

〝革命家ルーディ〟の誕生

〝革命家ルーディ〟ことルードルフ・ドチュケは一九四〇年三月七日、現在東独領であるシェーネフェルトに郵便局員の子として生まれた。ルッケンワルデの高校にはいると、人並みに東独の青年団組織〝自由ドイツ青年団〟（FDJ）の一員となった。しかし同時に教会にもかよい、キリスト教社会主義の影響を受けた彼は、五七年、高校卒業の前に、学校のFDJ年次大会で、国家人民軍への志願を忌避した。



革命家のルーディ

一〇〇メートル十一秒五、棒高飛び三メートル八〇、円盤投げ四〇メートル以上の記録を持ちライプチッヒ大学で、スポーツ・ジャーナリズムを専攻することになっていたドチュケに対し、東独政府は入学許可を取消した。六〇年汽車で西ベルリンに出て来たドチュケは、西ドイツの大学への入学資格をとるため高校に入り直した。高校卒業後数日した六一年八月有名なベルリンの壁がつくられ、ドチュケは二度と東独の両親と三人の兄弟のもとに帰れなくなってしまった。

ドイツ語と歴史に〝秀〟の成績をとって高校を卒業した

ドチュケは六一年十一月、西ベルリンの自由大学で社会学を専攻し始めた。東独で兵役を拒否した反骨精神は西ベルリン、西ドイツの現状にも鋭い批判を示した。マルクス、エンゲルスはいうに及ばず、ローザ・ルクセンブルク、毛沢東から現代西欧の反体制学生に大きな影響を及ぼしているベルリン生まれの哲学者ヘルベルト・マルクーゼの著作を読みあさり、次第に独自の革命理論として、コミューンによる〝直接民主主義〟を形成していった。六三年には〝無政府共産主義者〟をもって自称する〝革命的活動〟グループに入り、六四年には左翼学生団体ＳＤＳのベルリン指導部に加わった。だが、ドチュケがＳＤＳの中で積極的に活動を始め、ＳＤＳ切ってのイデオローグとなって西ドイツの学生運動を指導しだしたのは六六年秋、ボンにキリスト教民主同盟（ＣＤＵ）と社会民主党（ＳＤＰ）の保守、革新二大政党による大連立の機運が生まれ、やがて同年十二月それが実現した時だった。

ＳＤＳはもともと社会民主党の学生団体として戦後の一九四六年ハンブルクで創設された。当時の創設者の一人カール・ウィルヘルム・ベルクハンによると「社会主義運動の再強化は修正主義から離れ、革命的志向によって再び導かれる時のみ可能である」との考えによってつくられたという。以後ＳＤＳは、社会民主党と歩調を合わせて進んでいった。ヘルムート・シュミット、ウルリッヒ・ローマーといった社民党の有力政治家はＳＤＳの出身である。だが五九年、社民党がバートゴーデスベルクで大会を開き、階級政党から国民政党へ歴史的な大転換を決定して以来、両者の関係は微妙となった。当初、社民党路線の支持を誓ったＳＤＳだったが、次第に党の右派路線に反旗をひるがえすことが多くなった。六〇年十一月、社民党はついにＳＤＳへの援助を打切り、これとの関係を断絶した。そして代わりに〝社会民主主義大学同盟〟（ＳＨＢ）を育成し始めた。

ＳＤＳ〝反乱〟の本拠は西ベルリンの自由大学だった。自由大学は東ベルリンのフンボルト大学に対する東ドイツ政府当局の圧迫から逃れた人たちによって一九四八年西ベルリンのダーレムにあったカイザー・ウィルヘルム研究所のあとに創設されたもので、米国の援助を受け、もともと反共の色彩が濃かった。学生大会は全学生の名で一九五〇年には西ドイツ政府の外交政策を歓迎し、五一年にはアデナウアー首相の力の対決によるドイツ再統一政策に同意、五二年には西ドイツの欧州共同防衛体への参加を支持したのだった。しかし五〇年代の半ばになると、創立当時の反共意識旺盛な学生は巣立ってゆき、あわせてスターリン死後の東西雪どけの機運は自由大学の雰囲気をアカデミックなものにした。だが六〇年代に入り、特に六一年八月十三日東ドイツが東西ベルリン間の境界線に壁をつくり、両ベルリン間の交通を遮断して、西ベルリンの孤立化に出ると、情勢は一変した。自由大学で政治学を教えるリッハルト・レーベンタール教授は次のように分析する。

一、ドイツの未解決問題がベルリンの壁に象徴されて以来、全ドイツの政治に関心を持つ学生がベルリンに集まり、政治学は一万五千人の自由大学の中でもっとも重要な学問となった（現在、同大学で政治学を専攻する者は約九百人。なおドイツの大学の中で政治学の学位がとれるのは自由大学だけである）。

一、西ベルリンの置かれた特殊な環境から政治家も市民も政治的な動きに敏感であり、それが学生たちに反映する。

一、自由大学は政治的に中立を保ってきた他のドイツの大学と違って創立当初から政治的色彩が濃かった。

ともかく、六一年のベルリンの壁を境に自由大学の学生の動向がボン政府に対し批判的となり、既

成の体制打破を目ざす新しい左翼思想が学園に強い支持を集め出したのである。その先兵が社民党から絶縁されたＳＤＳであった。

戦後の西ドイツの大学では米国など西側諸国の指導で学生による自治が強く打出され、学生大会は執行委員会を選んで自治を運営しているが、自由大学ではさらに一歩進んで学生大会は全学委員会や教授会にも投票権を持った代表を送りこんでいる。このように学生の意識が高いことは逆にまた、わずか四百九十人のＳＤＳベルリン支部の戦闘的な分子が、学生の不満をたくみについて理論的に扇動すると、学園全体の空気を急激に過激化することが出来る。

学生の不満は第一にフランスなどと同様、スシづめ教室。西ドイツの学生は現在約三十万人だが、産業社会の発展とともに増加の一途をたどり、八〇年には六十万人と倍増が予想されている。第二は教授の水準の低下。その大きな理由は大学行政当局の官僚化により、余分の負担が教授たちにかかるためだが、大学当局の官僚化はまた学生たちとの意思の疎通を欠き、学資の絶えざる増大と相まって学生たちの不満をかき立てる。

しかし学生たちの不満にもかかわらず、西ドイツ全体は経済的繁栄と平和の中で眠っている。一方、東ドイツ不承認を基本とする西ドイツ政府の外交政策は行きづまり、ドイツ国民の最大の願望であるドイツ再統一はほとんど絶望に近いものになっている。このような不満、絶望を反映するための期待を集めていた革新政党、社民党は伝統的な階級政党をやめて、国民政党へと大転換した。そのうえ世界各国共通の世代の断絶は、父子の対話を不能にしてしまった。荒廃したドイツを今日の繁栄に導いた高年層の世代は、自分たちの業績に酔って後進に道を譲ることを忘れ、社会の停滞を招き、青

少年時代を苛烈な戦争の体験の中で過ごした中年層は、現在の繁栄に無気力に満足している。このような現状に戦争も困苦も知らぬ若い世代は、現状の欠点に鋭く気付き、この改革を迫るのである。六八年春、フランクフルトで開かれたＳＤＳ特別大会をオブザーバーとしてみた社会批評家アレクサンダー・ミッチェルリッヒ教授はＳＤＳの若者たちを〝ファーターローゼ・ゲゼレン〟（父親のいない若者たち）と呼んだが、まさに若い西ドイツ学生は、〝ファーターローゼ・ゲネラチオン〟（父親と断絶した世代）なのだ。そして彼らは〝眠った社会〟を目覚めさせるためまずデモを繰広げる。

ドチュケはいう。「デモや抗議は人間として自覚する第一歩である。われわれは人々を自覚させ、政治的に動員、つまり、いまやっと二、三千人に過ぎない反体制陣営に彼らを引入れなければならない。そして抗議以上のことをなさねばならない。われわれは直接行動に移行しなければならない」

六三年二月、体制派の学生が西ベルリン自由大学の学生自治会委員長になったのを機会に、これをたたき落とすため同じ左派のＳＨＢ（社会主義大学生同盟）、ＬＳＤ（自由学生同盟）と共同戦線をつくり上げ自治会執行委の中で多数派になったＳＤＳは積極的な行動に出た。

六四年十二月十八日、数百人の学生が、ベルリンを訪問した当時のコンゴ首相チョンベ氏に対し「ルムンバ殺し」と叫んで抗議デモをかけた。六五年五月七日、自由大学のヘンリー・フォード館に五百人の学生が集まり、当時の学長ヘルベルト・リューエルス教授が学生自治会執行委員会が呼んだ進歩的ジャーナリスト、エリッヒ・クビ氏の構内立入りを禁止したのに対して抗議集会を開いた。六五年七月十六日、八百人の学生たちは全学部集会を開いてリューエルス学長の退陣を要求した。六六年二月五日、新任の学長リーバー教授が建築・消防行政上の理由から大学構内でのベトナム集会を開くこ

とを許可しなかった時、千五百人の学生が街頭デモを行ない「アメ公、ベトナムから出て行け」と叫んだ。その中の二、三十人が米国の建物にかかげてある星条旗を引きずり降ろそうとして警官隊と初めて衝突した。六六年七月二十二日、三千人の学生が初めてシット・イン（すわり込み）を行ない、政治的行事に大学構内を使わせるよう要求した。

シュプリンガー攻撃の波

ルーディ・ドチュケがSDS内で有力理論家として地位を固め出したのはこのころからである。六六年十一月二十八日、ウィッテンベルク広場で開かれたキリスト教民主同盟、社会民主党のいわゆる大連立に反対する大集会に出たドチュケは、千二百人の学生を中心とした聴衆を前に大連立反対をぶち、強力な〝議会外野党〟を組織するよう呼びかけたのだった。

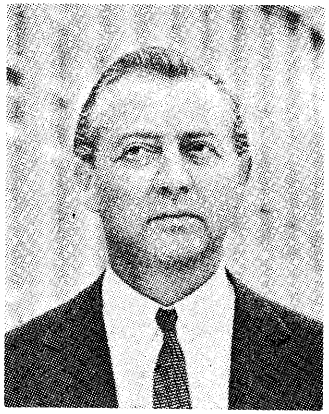
ドチュケにいわせるとキリスト教民主同盟も社会民主党もただ立身出世の道を歩もうとする人たちのプラットホームに過ぎず、その点ではソ連共産党も変わりない。そして人間が人間を支配するのを出来るだけ少なくするため革命の〝絶えざる継続〟が必要なのだ、と彼は言う。

「階級のない社会が歴史の最終状態だと主張することは、マルクスを間違って理解しているものだ。一面において労働過程という形式での人間と自然の間の絶えざる新陳代謝と人間の共同生活が到達した形式に対して、どのような形式に対しても人間の精神は危険な不安状態に達するということから、

人間の歴史に安心と最終というものは許されない。人間は新たに生まれてくるあらゆる可能性――労働の短縮、感覚的ビジョンの発展、貧困と戦争の絶滅――を実現することが出来るようにするため、絶えず、自己自身を不安な状態におかなければならない」

そこには毛沢東の文化大革命に似かよった絶えざる革命によってのみ人間は真の自由と解放を得るとのドグマティックな確信が顔をのぞかせている。SDSの学生たちが毛沢東語録に心酔し、ホー・チ・ミンをたたえ、キューバのゲバラにあこがれるのは同じ理由から出ている。しかもそれが西ドイツという世界の中でも有数の安定した産業社会の中で芽生えてきたのだ。もちろん、これら学生の動きの中心は西ベルリン、しかも政治意識の強い自由大学という特異な環境の中にある。そして全ドイツ学生三十万のうちSDS加盟学生はわずか二千五百人に過ぎない。しかしこれに同調する学生は八万といわれ、キリスト教民主同盟、社会民主党の大連立以来、既成秩序への不信感を強めた学生たちは、SDSを先頭に自分たちの精神の不安を街頭デモに表現していくのである。そして大学の改良という当初の学生運動の大きな目標は後退し、ベトナム戦争反対、西独の非常事態法反対、そして学生運動に徹底的な反対と憎悪を示す西独一のマスコミ・コンツェルン、シュプリンガー出版社に対する反対という政治デモの波がここ一年半ほどの間に繰広げられたのである。

六六年十二月十日には、約千人の学生が西ベルリンのクアフュルステンダムでベトナム戦争反対の無許可デモを繰広げ、七十四人が逮捕された。六七年四月五日、ベルリン警察はSDSの中の〝恐怖コミューン〟派の十一人をハンフリー米副大統領のベルリン訪問のさい、プディングなどを投げつける計画を立てたという理由で逮捕した。六七年四月六日、二千人の学生が西ベルリンでハンフリー米



西独の新聞王シュプリンガー

副大統領のベルリン訪問と米国のベトナム政策に反対してデモを展開〝副殺人者〟〝ホ・ホ・ホー・チ・ミン〟のシュプレヒコールがひびき、学生二十四人が逮捕された。この日また西ベルリンのシュプリンガー・ビルにもデモがかけられた。六八年二月西ベルリンでベトナムの解放民族戦線支持のデモが行なわれ、四月には全ドイツ各地でSDSを先頭に戦争など非常事態が起きた場合、西独政府に大きな権限を与える非常事態法に反対するデモが約十五万人の学生を動員して行なわれた。

こういったデモの波の中で、西ドイツの学生が激しい怒りを示したのが四月十一日のドチュケ暗殺未遂事件だった。

「友人・同志諸君。

本日午後、同志ルーディ・ドチュケは扇動された若者が放ったピストルの銃弾三発によって生命危篤となった。銃弾は頭、胸、首に命中した。ルーディが政治的共謀の犠牲者であるかどうかここでは問うまい。ただいいうるのは、この犯罪は、シュプリンガー・コンツェルンとベルリン市参事会がこの町の民主的勢力に対して加速度的に加えてきた組織的な扇動の結果であるということだ。

われわれは議会外野党に呼びかける。今夕二十時に工科大学大講堂に集まれ。

明日十五時、レーニン広場でデモを行なう」（西ベルリンSDS）

「ルーディ・ドチュケは彼の政治的見解のために撃たれ、生命をおびやかされている。われわれはキリスト教徒として今日、真実の言葉と抑圧された者への味方になることを暴力でもって沈黙させられているのはどこであるかを見きわめずには、キリスト受難の日を祝うことは出来ない……。

ここでキリスト教徒として無関心であり、沈黙しているものは主を裏切る者だ。この国が再びどの方向に歩み出したかを見ようとしない者はキリスト教徒としての責任を真剣に引受けていない者だ……」（マインツ福音派学生団体）

この種のビラが全ドイツに乱れ飛んだ。デモはまず西ベルリンで起こった。十二日午後、一万人の学生と若い労働者たちが市庁に向かってデモを始めた。彼らは赤旗をかかげ、〝ホー・チ・ミン〟〝ルーディ・ドチュケ、ルーディ・ドチュケ〟をシュプレヒコールしながら進んだ。午後五時、市庁前広場でデモ隊は警官隊と衝突した。待ち構えた警官隊はホースをいっせいに放水する……。

デモは四日間、全ドイツで荒れ狂った。西ベルリンでは一万人もの警官隊が出動、百時間にわたってデモを阻止し、三百八十八人を逮捕した。逮捕された者の中には社民党の党首ブラント外相の息子ペーター・ブラントもいた。デモ隊および通行人二百人以上と警官五十四人が負傷した。

ハンブルクではシュプリンガー・ビルと警察本部の前で三千人のデモ隊と千五百人の警官隊が二晩にわたって市街戦を演じ、デモ隊六十人が負傷した。

SDSの本部のあるフランクフルトでは、委員長のカール・ディートリッヒ・ウォルフ（一九六八年現在二十五歳）らの指導で三千人のデモ隊と千三百人の警官隊が衝突、デモ隊に三十人、警官隊に七人の負傷者が出た。ミュンヘンでは千二百人のデモ隊と千人の警官隊の間に衝突が起こり、百十人が逮

捕された。そのほかエッセン、ケルン、ハノーバーなどで衝突が伝えられた。そしてどの場合にもSDSがデモの先頭に立ち、シュプリンガー系の新聞、出版物の発行されているところでは、シュプリンガー・ビルが襲われ、発送が激しい妨害にあった。

情勢に驚いたキージンガー首相は、復活祭の休暇を打切って急ぎボンに帰り、十三日、テレビを通じ、学生たちに、もしデモを中止しないならより強硬な対抗措置をとると警告したのだった。だがデモは復活祭の十四日も、さらに翌十五日も荒れたのだった。

ドチュケも奇跡的に一命をとりとめ、米国生まれの妻グレーチェンの看護の下に、回復に向かって進んでいる。だが学生たちが巻起こした〝復活祭の嵐〟は経済的繁栄を謳歌する西ドイツ国民一般にはきわめて不人気だった。復活祭後行なわれた世論調査では、質問を受けた西ドイツの成人のうち、実に八四パーセントが学生たちの行動を遺憾とし、これを是認しているのは六パーセントに過ぎない（残り一〇パーセントは無関心）。国全体が中産階級化してきた西ドイツ国民の多数にとっては、社会不安を引起こす過激派学生の行動は受入れられないのだ。シュピーゲル誌の調査では、SDS八十人のうち、家族が加盟を認めたのはわずか一人で、残りは家族の反対を押切ってはいったという。SDSを中心とした左派学生の運動が過激なスローガンを唱えながらも、具体的にはマスコミ・コンツェルン、シュプリンガーに対する攻撃に最大のエネルギーを注いでいるのも西独学生運動の現在の限界を物語っている。

戦後、占領英軍の後援の下に、再び新聞発行に乗出し、またたく間に西独一のマスコミ・コンツェルンを築き上げたアクセル・シュプリンガーは現在七つの週刊誌、二日曜紙、七日刊紙を出し、日刊

紙では四百万と西欧一の発行部数を誇るビルト紙、高級紙ディ・ウェルトを中心に西独日刊紙の三一パーセント、日曜紙では八八パーセントを支配している。シュプリンガーにとって、ドチュケを初めとするSDSは社会の秩序を乱す〝社会の敵〟であった。当然、シュプリンガー系の新聞、週刊誌はドチュケらを激しく攻撃した。SDSなど左派学生はこれまた当然シュプリンガー・コンツェルンを目の仇にした。シュプリンガー・ビルにデモがかけられ、六七年九月にはSDSは代議員大会の決議で「学生および他の反体制、反資本主義少数派による社会民主化のための戦いの第一歩として〝打倒シュプリンガー〟のスローガンを掲げる」と述べている。

学生ばかりではない。シュプリンガー・コンツェルンのマス・コミ支配が西独の民主的存在をおびやかすとみている文化人は多い。だが学生たちが国家権力そのものに対して闘争のホコ先を向けているのではなく、一マス・コミ王国に向けられている事実は、現代の西独が現体制の下にかつてない繁栄と安定を享受し、少々の批判ではびくともしない堅固さを示しているのではなかろうか。

四月十七日、西独政府はSDSを非合法化しないことを決定した。わずか二千五百人の左翼学生の集団は確かに現在の西独政府にとってこわい存在ではない。またSDSは自分たち自身の会費や本を売ったりして予算をまかなっており、外国や他の団体の支援は受けていない。その意味からも、国家組織にヒビを入れるような勢力ではない。しかし平和と安定が単に現状の維持を意味するなら、そこには進歩はなく、腐敗が待ち受けるだけである。ドチュケらがキリスト教民主同盟と社会民主党の大連立に反発し、〝絶えざる革命〟を目ざすのもこのためである。そこには平和の中で生きる青年の本能的な不安がある。

紳士の国に押し寄せる波

イギリス

逃避から闘争へ

英国保守党議員ヘンリー・カービー大尉は一九六八年七月一日、サセックス大学総長に対し、つぎのような〝怒りをこめた〟辞表を送った。

「私はかつてサザンプトン大学理事会の末席をけがし、一九六一年、本学が創立されて以来は本学理事としてご奉公してまいった。しかしこのほど長期にわたり熟考を重ねた結果、本学理事を辞任させていただくことを決意した。最近サセックス大学で行なわれたギャラップ特別世論調査によると、本学学生のうち、学生デモが将来ますます暴力化すると考える者七一パーセントに対し、デモの平和化を予想するものは四パーセントに過ぎぬ。しかも過去一年間にデモに参加したという学生は、実に四〇パーセントに達しており、またローデシアのスミス政権に反対するもの七二パーセント、米国のベトナム介入に反対するもの七八パーセントと、それぞれ絶対多数を占めており、過去二、三年間にベトナム反戦デモに参加したものは二五パーセントに達しており、この驚くべき数字は最近、わが党のイノック・パウエル議員が〝英国は大学に金を使い過ぎ、中・小学校をないがしろにしている〟と述べられたことを裏書きするように思える。

こんにちの学生は、学生としての現在の姿では何の重要性も持たぬことを思い知らねばならぬ。実際、学生は社会に大変な負担をかけておるのではないか。学生の真の重要性は将来にあり、将来何者かになるまでは、学生は沈黙させるべきである。現在英国の大学に広まっておる〝スチューデント・パワー〟とやら申すけしからぬ傾向は、すみやかに抑制することこそ、善良な学生諸君のためであり、また国民全体の利益でもある――」

英国はこれまで、すぐれてエリート的、貴族主義的な大学制度を〝アングロサクソン的自由主義〟（ダニエル・コーンバンディ）で運営してきており、つい最近まで学生運動は〝激しさ〟〝暴力〟などとは全く無縁、むしろ正反対のイメージであった。しかしこの国もスチューデント・パワーにとって、決して聖域ではなかった。「ウチの子に限って……」と

西独の学生指導者ドチュケ氏そ撃に抗議する学生たち（ロンドンのベルクレーブ広場にある西独大使館前で　1968年5月）

信じ切っていた箱入り息子が不行跡。「おのれ、許しておくものか。勘当だ」と怒りにふるえる〝裏切られた家父長〟――カービー大尉の手紙は、そんな情景を思わせる。

英国の社会には、なお階級意識が根強く残っている。貴族の子は貴族、クツ屋の子はクツ屋――英国上流階級は賢明にも、下層階級からの社会改革要求につねに一歩か半歩先んじて、予想される要求の六～七割方を先回りして認める形で、支配体制を維持してきた（アジア・アフリカの旧植民地に早目に早目にと独立を与えた、あの手法である）。それはちょうど、トカゲが自分から尾を切り落として逃げるようなかたちであった。

大学制度の近代化にあたっても、〝トカゲ方式〟は維持された。古い伝統を誇るオックスフォード、ケンブリッジの両大学が「オックスブリッジ」と通称されて、アカデミズムばかりでなく、政財官界の人脈の最高峰を独占しているのはそのためだ。産業革命後、社会的要請で次々に生まれた地方大学は「レッドブリック（赤レンガ大学）」と通称されて、オックスブリッジよりすべての点で下風に立つ。両者の中間に首都の大学として独特の大組織をもつロンドン大学がある。また別格として、オックスブリッジにさほど劣らぬ伝統をもつセントアンドルーズ、エジンバラなど、スコットランドの大学がある。こうして厳密に組み立てられた序列の最後に、最近、テクノロジー時代の要請でぞくぞく新設された「アルミ大学」あるいは「コンクリート大学」がある。

序列意識が強いだけあって、大学設置基準も厳しく、大学教育の拡大が国策となってからも、設備や教師の裏付けのない学生増員は極力避けた。過去十五年間の学生数の増加はフランスが三・三倍、西独二・八倍、米国二・二倍に対して、英国は一・六倍。教師一人あたりの学生数はフランス二七、

米国一三に対し英国は一一――。学生数の伸びが小さいのが英国経済の停滞の一因だと指摘される半面、学生が少ないから優遇出来、教師が多いから行届いた指導が出来るともいえた。古きよき時代のオックスブリッジの学生にならって、大学生を〝紳士候補生〟とすることが理想であった。

試験制度も階級意識の温存に役立った。小学校卒業前、満十一歳の年に行なわれる「イレブン・プラス」という進学適性試験によって、子供たちは「進学中学」と「就職中学」に振り分けられる。さらに高校卒業の年齢でGCE（一般教育検定試験）を受け、その成績で希望の大学に行けるか、ちょっと序列の落ちる大学でガマンするかがきまる。こうしてオックスブリッジへ進学出来なかった学生、あるいは大学へ進めなかった生徒たちは、〝階級のカベ〟に加えて〝能力のカベ〟をいつも意識しなければならない。一方、上流の子弟は人並みの能力さえあれば、こうした階段をある程度無視して、私立学校からオックスブリッジへ、という特急コースがとれる。そんなわけで、英国の学生たちは、一部は優越感と満足感から、他の大部分はどうにもならない欲求不満とあきらめから、ビートルズやヒッピー、セックスなど、享楽主義に走って現実から逃避する傾向が目だっていた。ミニスカートが英国に生まれたのも、そうしたふんい気ゆえだとされてきた。

しかし、この英国にも、六七年あたりから変化の風が吹き始めた。それはまず、少数過激学生の大学内での実力行使となって現われ、それら学生の処分―学生大衆の抗議―紛争の拡大、というパターンをとった。六八年、とくに春になると、各国のスチューデント・パワーの刺激もあって、大学の紛争は広まり、激化し、連日新聞紙上をにぎわすようになった。パリに負けるなと〝自主授業〟を始めた美術学校もある。そしてついには名門オックスフォードで、学生監事務所が学生に一時占拠される

事件さえ起こった。大学の運営に発言権を要求する声も高まり、ケンブリッジなど、いち早くこれを認める大学も出てきた。

こうした情勢に刺激されて、これまで穏健な路線をとってきた全国学生同盟（NUS）も、奨学金増額など日常的要求について、秋の新学年からは実力行動も考えると、方向転換を行なった。もちろんこうした動きは学生組織の幹部や少数過激派が主で、学生大衆はまだまだ穏健。彼らが立ち上がるのは大学当局が過激派の処分でよほど不手際をやった場合に限られている。また〝暴力〟の実体も日本やフランスに比べれば「ままごとみたいなもの」（林・毎日新聞ロンドン特派員）だという。学生も当局者も、他国の場合に比べればまだまだ〝紳士的〟である。だが〝紳士の国の紳士的反乱〟は、静かな池の水面に広がる波のようにショッキングなもの。スチューデント・パワーは英国でも無視出来ない勢力に育ちつつあるようだ。

大義名分ふりかざす

英国の学生運動で、実力行使の口火を切ったのはロンドン大学の政経学部（ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス・アンド・ポリティカル・サイエンス＝通称LSE）である。シドニー・ウェッブ夫妻やハロルド・ラスキゆかりのこの学校は、もともと労働者向けの夜学から発展したという背景もあって、英国の大学では最も急進的な体質をもっていた。戦後はアジア・アフリカの新興独立国からの留

学生が多く「リトル・アフリカ」といわれた時代もある、異色の学校である。ロンドンの金融、行政、報道関係の中枢地区に近いため、実務界との交渉が多く、そのためかつての急進色はかなり薄れ、一般学生には穏健派が多くなっている。しかし、外国、とくに米国からはこの学校の歴史的イメージにあこがれて急進的な留学生が多い。

このLSEで六七年三月、一部学生がすわり込みやハンストを行ない、教授会も二つに割れる全学的な騒動に発展した。ローデシアのイアン・スミス白人政権のもとで、大学学長だった人が、新学部長に迎えられた。これに進歩的学生、教師が反発、エスタブリッシュメント派の教授たちと対立がこじれて、大学の運営に対する学生の発言権要求に発展したものである。騒ぎがおさまったあと、政府は捨てておけぬと調査委員会を任命、委員会は学部評議会へ学生の大幅な参加を許すよう勧告、学部当局はその実施についてなお検討を続けている。これが導火線となって、六七年秋から六八年春にかけ、リージェント・ストリート工科大学、レスター大学、サセックス大学、リバプール大学などでも発言権を要求する学生のデモやすわり込みが起こった。そして五月には、パリの学生暴動と並行して英国でも最もリベラルな教育方式で知られるエセックス大学で同様の騒動が起こり、全学生が大学当局に反抗、大学行政への参加を要求して教育界に大きなショックを与えた。

ことの起こりは同大学がポートンにある英細菌化学兵器研究所の科学者を講演に招いたところ、過激派の学生三人が「細菌戦争反対」をとなえて妨害した。学長は三人が「言論の自由」を侵害したとして「教育的意味も含めて」停学処分にした。ところが全学の学生は、細菌戦争に反対するのは、われわれとしても同じこと。学長のいうことはあまりに形式論理的でピンとこない。おまけに停学とは

はひどすぎるでないか――と、抗議のすわり込みにはいってしまった。そして、こういうことになるのも大学行政に学生の声が反映されていないためだと、評議会への参加・発言権を要求した。

エセックス大学では、教授陣と学生とが同じ寮で共同生活をし、教師は常に学生と接触をして、意見の交換もしている、ユニークな実験学校的な大学。六〇年代に創立されて歴史は新しいが、全国の注目を集めていた。その学校でこのような事件――学生を甘やかしたからだという強硬意見も出た。しかし、

「家父長的に学生と接触するのと、正式な発言権を認めてやるのとは別。共同生活するなら学生の人格も全面的に認めるのがスジではないか」

との良識派の意見が通り、結局は「停学処分の事実上の解消、学生の発言権の部分的承認」という線で解決した。

学園騒動の口火としては、細菌兵器やローデシア問題のほか、ベトナム反戦、有色移民の入国制限反対など、人道上、倫理上の大義名分をふりかざしたものが圧倒的に多い。男女寄宿舎の相互訪問などは、もうとっくに実現していて、騒ぎのタネにもならない。一方、ウィルソン労働党政権は、社会主義と人道主義の大義名分を説きながら、実際の政治ではローデシア白人政権に対して及び腰だったり、ベトナム戦争を黙認したり、有色人種の入国制限も、結局ひかえ目ながら実施してしまう。こうした、よくいえば現実的、悪くいえば偽善的な施政に対し、過激派が不満をもっていることはもちろん、一般学生も大いに幻滅している。そんなわけで、過激派の行動には一般学生の暗黙の了解、共感があり、これが学園騒動の背景となっている事情を無視出来ない。いうならばウィルソン流「コンセ

ンサス政治」――与党労働党の左派を怒らせても、保守党と妥協してゆくやり方――に対する反発でもあるわけだ。

謝った自治会

だが、過激派の直接行動は、学園騒動の必要条件ではあっても、十分条件ではない。たいていの場合、大学当局は心得たもので、処分などはやらないで放っておく。すると過激派は気勢をあげるだけあげると気が抜けてしまい、大事に至らずに終わるのである。三月、オックスフォード大学で人種差別反対のデモ隊が新移民法の責任者キャラハン内相にくってかかったり、ケンブリッジ大学でベトナム反戦デモ隊がヒーリー国防相をつるしあげたりしたが、暴力ザタはなく、処分―騒動の連鎖反応も起こらなかった。

過激派が暴走し、自分たちも〝しまった〟と鼻白むような事件もある。

一九六八年五月三日、保守党のパトリック・ウォール代議士夫妻がリーズ大学の保守党クラブに招かれ、講演した。英国の大学では保守党から共産党に至るまで、すべての既成政党のクラブが組織され、自治会の登録団体となっている。そして自分の党の政治家を招き、講演会や討論会を開くのが常である。

この日、ウォール議員は「英国優先」と題してローデシア問題について話し、イノック・パウエル

流の「白人危機に立つ」論をぶち、イアン・スミス政権承認を説いて、大いに警鐘を乱打した。そして講演を終わり、クラブの幹部らとともに大学食堂へ昼食に向かう途中、講演会場でヤジを飛ばしていた過激派学生が数十人、夫妻を取り囲んだ。

「ファシストのブタ野郎め！」

一人がこういって、議員の顔にツバを吐き捨てた。するともう一人が、ウォール夫人を蹴倒した(と、夫人は思った)。倒れた夫人の姿に学生たちがたじろぐ間に、かけつけた警備員が人垣をつくり、議員は夫人を助け起こして、その場を逃れた。この事件が全英に大きなセンセーションを巻き起こしたのはもちろんである。

新聞は「三百人の学生が暴動、泣き叫ぶ議員夫人を蹴倒し、踏みにじる」と報じた。女性に暴力を振るうとは！　世論が沸騰するなかで、当のウォール夫人はザ・タイムス紙につぎのように投書した。

「心配なのは、学生たちが下品な悪口雑言を口にしただけでなく、その言動がバカげていて、論理が通らないことです。一人の学生は、主人だけが講演のときマイクロフォンを独占していたのはフェアプレイではないと申しました。もう一人は主人に〝あんたが黒人だったらあんな演説をするかい〟と詰め寄り、主人が否定すると〝そらみろ、あんたは人種差別主義者だ〟と叫ぶのです。

つけ加えておきますが、私たちはともかく昼食をいただきました。また、私が泣いたという、あなた方の報道は正確ではありません。もっとも、かなり強い言葉を口走ったかも知れませんが……。こうした行為は、国会議員が大学へ行って話をすることを妨げるための、計画的なものと思われます。こんなことが成功すれば、アナーキスト的な一部少数グループに、言論の自由の否定を許すことになります。こんなことが英国学生の大多数の希望にそい、利益にかなうはずがありません」

〝蹴倒された〟とはいい張らぬこの冷静な態度が問題解決を容易にしたことはいうまでもない。

リーズ大学自治会のジャック・ストロー委員長は、全英学生連合の委員長選挙に左派候補としてかつぎ出された〝闘士〟だが、女性に対する暴力を支持するほど〝過激〟ではなかった。ウォール夫人に対し、直ちに個人的にも陳謝し、五月六日には自治会執行委員会を開いて「ウォール議員がツバを吐きかけられ、夫人が脚を蹴られたことを深く遺憾とし、これら事件に対し夫妻に謝罪する」ことを決めた。そして、

「自治会の会合に招かれた賓客には、しかるべき待遇の基準をもって対すべきであるのに、今回のような暴力事件が起こったのは嘆かわしい。夫妻には深く陳謝した。しかし平和的にデモを行なう学生の権利は擁護されなければならない。学生が暴動したとか、ウォール夫人が踏みにじられたとか、泣いたとかいう新聞報道は非常に不正確である。またウォール議員のきわめて挑発的、人種差別的な演説で興奮した学生の一団のただ中に、同議員夫妻を誘導した保守党クラブの不手際は遺憾である」

との執行委員会声明を発表、査問委員会を設けて事件の究明に乗り出した。

査問委員会はその後、自治会規律委員会の〝法廷〟に十七人の学生を〝起訴〟した。そのうち十一人には弁護士がついたというから、本格的である。結局、女子学生一人を含む五人の学生が〝有罪〟として一ポンドから五ポンドの罰金を課せられた。五月二十二日のことである。

こうして事件は警察力の介入なしに解決したのである。その背景にはウォール夫人はじめ当事者の自制はもちろん、大学の自治、学生の自治を尊重する社会的雰囲気がある。これこそが英国学生運動

の暴走にブレーキをかけてきた最大の抑止力だといえよう。

過激派グループの行動が、一般学生の穏健ムードからかけ離れすぎて逆効果を招くこともよくある。たとえばイースト・アングリア大学の場合である。

五月二十四日、この大学をエリザベス女王が訪問した。過激派は以前から大学当局が女王歓迎に法外な費用をかけていると反対し、それもこれも大学当局と学生との対話が欠けているからだと、訪問当日、大学構内でこの問題について野外セミナーを開いた。これはデモでないことが強調され、約三百人が集まり、平穏に行なわれた。しかし穏健派の学生はこの動きに刺激されて、同じく約三百人が女王歓迎デモを組織し「アナーキー・ノー、モナキー（王制）・イエス」のプラカードとユニオン・ジャックを掲げて女王を熱烈に歓迎した。自治会幹部も女王歓迎に協力して、反対派が実力行動に出れば押える意向を表明、委員長は訪問当日、野外セミナーをシリ目に、女王と〝一杯のお茶〟をおつき合いしたのだった。

動き始めたNUS

一般学生のこうした穏健ムードをそのまま代表しているのが、さきにも名前が出た全英学生連合（NUS）である。これはなかば官製、といって悪ければ大学当局から公認された各大学・学部自治会七百余の連合体だ。大学院をも含め、全英の学生四十万の大部分、三十八万余を網羅した、文字どお

りの全国組織である。委員長はジェフ・マーチン。しかしさる四月、レスター大学で開かれた年次大会で、トレバー・フィスクが九月からの新委員長と決定した。マーチンは過去一年間、奨学金増額問題などで政府・労働党の文教政策と協力する姿勢をとったため、下部の突上げが激しく、急進派はジャック・ストロー・リーズ大自治委員長をかついだ。フィスクはその対抗馬として主流派に推された中道派。ロンドンの法律大学院「インズ・オブ・コート」に籍がある。二十四歳（一九六八年現在）。急進派にいわせると、政治的野心家で、委員長になるためだけに学生の身分にとどまっていると攻撃された。しかし大会前、労働党政府が奨学金支給対象拡大の新政策を発表するなど、援護射撃をしたこともあって、フィスクは圧倒的な大差で、NUSはじまって以来の「若い委員長」になった。このことはこれまでのNUSが、いかに年長の〝学生らしからぬ〟職業的リーダーに牛耳られていたかを示している。

一方、「英国的妥協」かどうかは別として、ストローは副委員長に選ばれ、急進派はNUS執行部に橋頭堡を築いた形となった。NUSの方向転換は知らず知らずのうちに、着実に準備されていたのである。

ストローをかついだ急進勢力の中核体が、二年前に結成された急進学生同盟（RSA）である。NUSの穏健路線に対抗する組織だが、任意団体で、メンバーはNUSと重複、いまのところ千人足らずの小勢力だ。指導者としてはLSEのデビッド・エデルスタイン（一九六八年現在二十一歳）、ハル大学のトム・フォースロップ（同二十二歳）らがいる。各大学で騒ぎを起こす少数過激派は、たいていRSAと関係があるとされ、米国や西独など、外国留学生の活動が目だつこともあって、外国人ぎらい

の英国では、あまり評判がよろしくない。「英国の学生は騒ぎたくないのに、外人がはいってきてかき回す」という意見が、学生のなかにまであるのだ。ＲＳＡは共産党の指導下にあるとのウワサも流れている。

英国で一番ハデに動いて広く知られている学生運動家はタリク・アリ（一九六八年現在二十四歳）だ。パキスタンのラホール生まれ。六五年オックスフォード大学自治委員長をつとめ、現在はベトナム支援キャンペーン（ＶＳＣ）の幹部である。

「暴力はなげかわしい。しかし時には暴力しか残されていない。体制内だけで動いていては何も出来ない」と、西独流の〝議会外の野党〟建設を目ざしている。

こうしたなかで、六月十四日、ロンドンのＬＳＥで「革命的社会主義学生連盟」（ＲＳＳＦ）が約五百人を集めて結成され、新たな波紋を投じた。フランスの五月革命に刺激されたもので、アナーキスト的傾向、トロツキスト的傾向もかなり強い。ＮＵＳとは重複関係、ＲＳＡとは競合関係にあり、ＲＳＡの活動家もかなり合流したという。タリク・アリなどの〝名士〟も出席したが、演説させてもらえず、議事はすべて無名の活動家の手で進められ、記者会見に現われた数人も「指導者だとか、代表だとかいうのではない」と、自己紹介せず、ちょうどＢＢＣのテレビ放送のためロンドンに集まっていた赤毛のダニーなど各国の〝指導者〟も招待しなかった。ＲＳＳＦの発足は、ＮＵＳとＲＳＡに強い衝撃を与えずにはおかなかった。ＮＵＳのマーチン、フィスク両人はＲＳＳＦの設立前夜の六月十三日、ロンドンで異例の声明を発表し「最近、各大学で起こっている学生の改革要求に対し、当局者が神経質な不手際を繰返し、各地で混乱を招いているのは遺憾である。今後も改革交渉に応じない大

学当局に対しては、ＮＵＳは個別に制裁措置をとる以外にない」と述べた。

「制裁措置」が大学の内外での実力行動を意味することは明らかである。フィスク新委員長も四月の選挙にあたり「血なまぐさいやり方は〝理性のある交渉〟が失敗したあとでなければ正当化出来ない」と、暗に方向転換を示唆している。その後フランス情勢に刺激された英国各大学の学園騒動に押され、ＲＳＳＦの出現に刺激されて〝転換期〟を早めたわけだ。その背後にはウィルソン内閣が大学教授出身のゴードンウォーカー教育科学相をしりぞけて、小学校長の経験者であるエドワード・ショート氏を後任にあて、大学教育より中等、初等教育を重視するような印象を与えたという事情もある。ともあれ、これまで礼儀正しい〝陳情団体〟にすぎなかったＮＵＳが、急進派牽制の意図もあるにせよ、〝学生の組合〟としての方向へ転換したことは、今後の英国教育界だけでなく、社会全体へも大きく影響するだろう。

一方、ＲＳＡも負けてはならじと、個々の学生の学習上の不満や差別待遇などをとりあげて改善を迫るキャンペーンを開始するとともに、試験制度廃止の宣伝活動を強化している。最近はＲＳＡはエデルスタインが書いた「スチューデント・パワー独習書」とフォースロップが書いた「教育か試験か」という二つのパンフレットを発売した。そのなかでフォースロップは、

「試験地獄によって学習は学科自体への興味・関心からではなく、試験制度の要求にしたがって行なわれている。そして教育はそれ自身が目的ではなく、学位という〝商品〟を獲得するための手段となってしまっている。試験とは、結局のところ、教育の階層化であり、学生をバタリー鶏舎に飼ったニワトリのように格付けしてしまうものにほかならない」

と述べて、現状のような試験制度の廃止を主張し、とくに法文学系統では学位は「出席の証」として与えればよいと提案している。そして、試験廃止への道筋として、

①試験の方法、採点の割り振りなどについて、大学が学生に知らせる。試験に失敗した場合は、学生に異議申し立て、あるいは再試験のチャンスを与える。

②試験答案の作成時間は制限せず、教科内容の決定および試験の運営には学生も参加する。

の二段階を説いている。

フォースロップは五月末、自ら試験場を退場してこの主張の実践に乗り出し、五月三十日には彼を先頭に二百人の学生がハル大学の本部を占拠した。

こうして一九六八年の英国の〝うるわしの五月〟は〝反乱の五月〟となり〝騒然たる六月〟へ発展した。新聞は一斉に学生問題を特集し、世をなげく年配者の声は日ごとに高まった。しかしそこは自由の英国、学生への理解者は、どこにもいる。

エリザベス女王の夫君、エジンバラ公がその一人だ。五月二十三日、ニュージーランドのオークランドで演説して、

「近代政府は法律をつくることが仕事と考えて、どんどん新しい法律を施行する。だから世の中は、一世代ごとに住みにくくなってゆく。法律の必要な理由をまだ実感として知ってない若い諸君が束縛を感じて不満に耐えきれないのももっともだ。それに若い諸君は年長者の浅薄で利己的な態度には同調できない。また青年の存在を無視し、成人社会の抱えているいろいろな問題や可能性の検討に青年を引っぱりこもうとしないでおいて、〝若い者に社会意識がない〟などということは出来ない」

と「若者弁護論」を展開した。

変わったところでは「パーキンソンの法則」のノースコート・パーキンソン教授が七月はじめシティ・オブ・ロンドン大学の自治会雑誌に寄稿「大学教科課程のパーキンソン法則」を明らかにした。

「教授が君たちに教える内容は、だれか別の教授に教わったことばかり。そうやってずっとたぐってゆくと、その教科を教えた最初の教授にまでさかのぼる。この最初の教授は、何のことはない、自分のアタマに浮かんだことを教えただけなのだ」

というのである。教授はとくに歴史学について、これまでの伝統的史学教育が憲政史や経済史偏重であったとし、これからは技術史など昔の教授たちが関心をもたなかった教科にもっと重点を置くべきだとし、たとえばスペイン無敵艦隊の敗因は、英国の使った砲金製の大砲に比べスペインの銅の大砲が冷却がおそかった点にもあることをあげた。そして理工系の学生も教科中心でなく、特定産業を念頭において自主的なカリキュラムを編成し、最終学年にはビジネスマンとしての経営学なども学ぶべきではないか。そうでないから英国経営者に理工系出身が少ないのだ――と、ユーモアまじりに学生の要求を支持している。

ドゴール大統領の「第三の道・参加の社会」にヒントを与えたといわれるアンソニー・ウェジウッド＝ベン技術相の「参加する民主主義」論も、学生たちの大学運営参加の要求に有力な援護射撃となっていることは、いうまでもない。

トリノの反乱

イタリア

大学を学生の手に

「大学当局の権力に対して永続的な闘争を組織しよう。それは権力を取除くことや権力に抗議することを意味するのでなく、権力の行使そのものを困難にする事態を永続的につくり出すことである」

――一九六七年十一月二十七日、トリノ大学構内で同大学学生運動のリーダー、グィード・ビアーレ君（社会学科学生）は数千人の学生を前に、たたみかけるような口調でまくしたてていた。この日、トリノ大学は朝から機能を停止した。数千人の学生が校門にツクエ、イスを積上げ、バリケードをつくって学園を占拠したのだ。

イタリア北部の工業都市トリノは、それまでイタリア最大の自動車工場フィアットのストには慣れてはいたが、学生運動などまるで知らなかった。百年前に建てられたトリノ大学は工科系大学としての伝統を持ち、とくに自動車工学はイタリアでの最高水準を誇り、卒業生は高給をもって迎えられた。トリノ大学学生、それはその町ではエリート、紳士の代名詞だった。

だが、この日は違っていた。急を聞いてかけつけた教授たちはバリケードと学生のスクラムの前にストップされた。「古い権威主義の大学を改革して新しいほんとうの大学をつくるために占拠してるんです」

――キラキラ血走った目を教え子から向けられて教授たちは困惑しながら門の前で右往左往するばかりだった。

占拠は一ヵ月も続いた。学生たちは教授をボイコット、自分たちの手で、〝対抗講座〟（コントロ・コルシ）と名づけた自主的な講座を設けた。講座のテーマは「大学改革」「現代社会の矛盾」「現代資本主義」……。ここでは進歩的な講師、助手らを招いて講師としたり、学生たちだけで真に学生のためになる大学のあり方、働くもののための社会などについて討論した。

コミッティ（委員会）が設けられ、分担を決めて、広報活動、対抗講座の内容の検討、他大学との連絡などにあたった。学生たちは自ら大学を管理、運営した。彼らの目的は大学の古い権威主義、権力主義を破壊、真に学生

ローマ大では右派と左派の学生がなぐり合いとなった（1968年3月）

のための大学改革を行なうことにあった。

そのためには教授も、政党も信頼せず、自らの行動にのみ頼った。一部の〝活動家〟が指導するのではなく、学生の大半が直接討議に参加、決定するという〝直接民主制〟の理念がそこにはあった。当然〝全体会議〟（アンサンブレ）が最高決定機関となった。

イタリア学生運動の起源はファシズムに対するレジスタンスに求められる。共産党、社会党、行動党、自由党、人民党（後のキリスト教民主党）が結成した統一戦線の下に学生たちは、ムッソリーニへの抵抗運動を展開した。ファシズムが崩壊したあと、抵抗運動を推進したグループとその継承者が学生戦線の主翼となった。これは共産党、社会党の強い影響下にあった。一方、ムッソリーニ治下でも合法化されていたカトリック系の学生組織も、戦後新しいエネルギーを注入して組織を拡大、キリスト教民主党の指導下にはいった。六五年までの学生運動は政党の下部組織的色彩が濃厚だった。学生独自の運動としては、学内に「教官と学生の話し合いの場をつくる」「文化サークルを自由に設置出来る」よう要求するなど学園民主化運動であり、〝穏健〟そのものであった。

学生の反感かったグイ法案

だが、一九六五年五月、政府が大学制度改革法案（グイ文相の名をとってグイ法案と呼ばれる）を議会に提出したときから事態は一変した。世界の学生運動に共通した〝抵抗の精神〟がイタリアの学生運動

にも吹き込まれたのだ。

グイ法案というのは大学制度改革を目的としたものである。現在、四年制の大学を①二年間で大学修了証書をもらえる二年コース　②いままでの四年コース　③大学院コース――の三コースに分ける。さらにいままでの講座制をそのままにし、新たに付設講座を設置するというのが骨子である。一見、単なる機構改革のように見えるが、法案の出された背景から改革の根本理念が問題になってくる。

イタリアの学生は日本のように入学すればたいてい卒業できるのとは違って、所定の単位を一つでも落とすと進級出来ず、〝落第コース〟に入れられる。イタリアの大学生総数約四十万人のうちこうした〝落第コース〟在籍者はなんと十五万人。このため卒業出来る者はわずか二万五千人で、入学者の四人に一人の割だ。卒業出来る者は優秀であることはもちろんだが、経済的にも恵まれていなければならない。とくに落第コースにはいれば、授業料その他の必要経費が急激にふえ、卒業するためには驚くほど費用がかかり、貧乏学生にはとても無理。卒業生は社会の指導階級に、卒業出来なかった者は下積みになっていく。

また大学が古いだけに権威主義が学内のあらゆる面に蔓延（まんえん）し、とくに教授の権威が重んぜられる講座制では、教授の好みに合わなければ試験にパス出来ないという現状である。講座内容は伝統と同様古びたものが多い。

一方、産業の発展は大学生に社会に出てすぐ役立つ知識を教えるよう要求する。グイ法案は、二年コース新設により、古い制度である〝落第コース〟を廃止すると同時に、高度に発達した産業社会にマ

ッチする学生をつくり出そうとした。二年コースは社会に出てすぐ役立つ技術、実務的知識を教える商工業専門短期大学的性格をもつ。付設講座は実践的な知識を与える場となる。これは現代の産業社会に適応する卒業生がほしいという産業側の要請に答えたものであり、産学協同の精神が根本にあった。しかも大学を卒業出来る富裕層が現代社会のエリートとして君臨していく現実は、グイ法案でむしろ強化される。二年コース組は社会に出て現場を監督し、実務をとり、四年コース組がエリートとして二年組を指導する。いわば大学制度の中で支配階級と被支配階級が生み出される。旧態依然の講座制は温存され権威主義的、権力主義的な大学制度の本質は少しも改善されない。

加えて、古びた施設に対して収容限度を越えた学生数は、学生の不満をさらに高めることになった。たとえばローマ大学では二万人収容を予定として一九三〇年建築された建物を現在七万人が使用している。学生の反発は抗議集会、パンフレットで抗議の意思表明——などの形で広がった。同時に上部団体的色彩の強かった共産党を通じての合法的なグイ法案反対運動が広がる。議会内での法案反対運動は共産、社会両党とも活発に進めていた。また授業料低減、寮施設拡充など大学の環境改善には力を入れた。

しかし、政党人は古色蒼然とした大学の権威主義そのものにはなんら批判の目を向けなかった。学生のいう本質的な大学改革にきびしい姿勢をもたなかった。だから、学生の目には、野党が大学改革問題を与党攻撃の材料に、政争の具に使っていると映った。学生たちの間に政党への不満が発生する——。

学生は当然既成政党—既成左翼への批判から、しぜん大学を改革しなければならないという自意識

に目ざめる。「委託の思想」「代表制、議会民主主義の思想」を否定、政党を拒否する。このため学生運動は共産党の支配下から脱し、学生独自のサイクルを持つ。

トリノ大学に起こった大学占拠は、こうした不満の爆発であり、起こるべくして起こったといえよう。それはイタリア学生運動を質的に転換させ、学生独自の運動の出発点としてのエポックを画した。それまで〝抗議するため〟の大学占拠は各地で散発した。しかし、トリノ大学の場合、大学の権威主義を打ちこわし、大学の権力を握ろうとする点でこれまでとは決定的に違っていた。警官隊導入で一ヵ月間の占拠から追い出された学生たちは、翌六八年一月十日、再び占拠した。しかし、翌日、また圧倒的な数の警官隊に追い散らされた。

学労一体の闘争へ

戦術を転換した学生たちは、ティーチ・イン、シット・インをさらに発展させたゴー・イン（入り込む）を戦術の主軸にすえる。これは学生が大学の権力を握る教授会や、講座にゴー・インし、大学制度、講座内容を話し合い、大学の権力機構に〝参加〟する。これにより、古い大学、講座を学生のための大学、講座に変革しようとする運動である。イタリア人はこれを〝逆スト〟、〝白色スト〟と名づけたが、学生はゴー・インにより大学の権威主義を破壊し、〝権力〟を学生の手に奪おうとしたのだ。

〝スチューデント・パワー〟が学生たちのスローガンになったのはこのころである。やがてミラノ、トレント、ピサ、フィレンツェ、ボローニャ、ナポリ、ローマと各地の大学でつぎつぎに占拠が行なわれ、それを排除しようとする警官隊と衝突した。

学生たちは、直接、社会変革を目ざしたのではなく、まず自分たちのよって立つ基盤である学内の改革を目的とした。自分の足元を変革してはじめて社会改革が可能と考えていた。

しかし、弾圧が激しくなり、運動がエスカレートするにつれ、労働者との連帯が叫ばれる。三月末から四月はじめにかけ学生グループはトリノにあるイタリア最大のフィアット工場のストに参加、労学評議会をつくってピケに加わった。この評議会は労働組合や共産党の指導より、労働者や学生全員による直接民主制を標榜した。学生や青年労働者の信奉するマルクーゼの「現代社会に統合されてしまっているのは労働者でなく、労働組合であり、社会主義政党という〝組織〟である。社会変革の期待すべき力は労働者一人一人にある」という思想が現実性をもって論ぜられる。学生、労働者の目ざすものはパリのコンミューンであり、ドイツのレーテであり、ソ連のソビエトであった。

世界の古い権威に反抗する第三世界への連帯感も強くなる。毛沢東語録は旧体制に対する挑戦のシンボルともなり、ホー・チ・ミン、カストロ、ブラック・パワーへの支持が叫ばれる。米資本による大工場の進出が産学協同に拍車をかけ、グイ法案提出の原動力にもなったと考える学生たちの米国に対する敵意は激しく、ベトナム反戦の声が高まる。ベトナム反戦国際統一行動デーの四月二十七日ローマで行なわれた学生デモ――同日午後、ローマ大を出発した学生デモ隊約八千人は、米大使館に押しかけ「アメリカーニ・サーニ」（アメ公帰れ）「解放戦線は勝利をおさめる」と叫んだ。

過激化した学生は、さらにミラノのトリエンナーレ、ベネチアのビエンナーレとイタリアの誇る芸術展をもブルジョア芸術、商業主義として攻撃の矢を向けた。

学生たちの行動は当然強い反発と批判を生んだ。三月十六日、ローマ大学に全国から約五千人の学生が集まったとき、右翼団体「社会運動」が自転車のチェーンや角材を持ってなぐり込みをかけ、学生運動指導者が三ヵ月の重傷を負ったほか、学生多数が傷ついた。保守系日刊紙、コリエレ・デラ・セーラ紙は「ワシントンの敵対者（中国のこと）が巧妙にアングロサクソンの体制下の自由を利用している」と学生運動がスイスにある中国代表部にあやつられていると非難する。

保守系ばかりではない。既成左翼の共産党は、その統制に服しない学生の過激な行動に批判的だ。アメンドラ同党最高幹部会員は同党機関紙デシター上で「学生たちは個々の生活で責任ある地位をえていないため、自由に行動が出来、ベルリンやパリで街頭闘争の経験をもてる。だが、それが革命の主体になるのではなく、日々の生活を闘っている労働者こそ主体になるのだ」と批判している。

夏休み（六月から十月まで）にはいって学生たちの行動は比較的穏やかになった。学生や野党の反対でグイ法案が流れたこともその原因になっている。だが十一月新学期とともに再び運動は再開されるにちがいない。活動家、一般学生の区別があまりないイタリアの学生運動は、自然発生的であるだけに、多くの学生の支持を受け力強さがある。若さと純粋さ、それにラテン系特有の情熱があるだけに、そのエネルギーは大きい。

自由を求める学生たち

スペイン

フランコ独裁への反抗

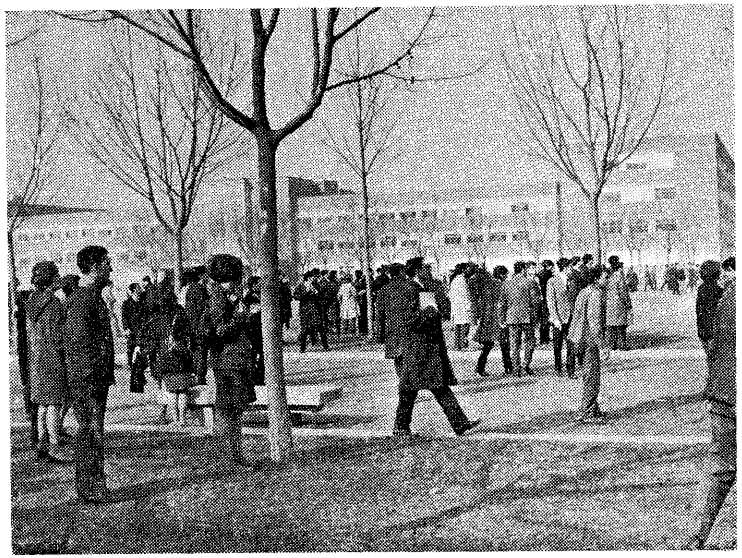
マドリード大学文学部の一階喫茶サロンで四、五人の女子学生グループが笑いこけていた。連日のデモ騒ぎで「大学閉鎖が間近い」とのウワサが学内に流れ、大学は開店休業状態、この喫茶サロンだけが話し好きのスペイン人学生や外人留学生で大盛況。文学部二年のマリア（昭和四十三年現在）が黒い瞳を輝かせながら大げさな手ぶりで話し続ける。

「それでねえ、ホセ（彼女の恋人）は騎馬隊の馬にそっと近づいて、馬上のポリ公が横見しているすきに、すいかけのタバコをさっと馬の鼻の穴につっこんだの。そして一目散にモンクロアの地下鉄の入口から地下道に逃げ込んでいったんだって……」

一九六七年（昭和四十二年）一月末の学生騒動のときの一コマである。騎馬警官隊がデモ隊鎮圧のため大学構内に乱入、暴れまわる学生たちを追い散らしたあと、大学都市の入口モンクロアにある空軍省の前で待機中だった。マリアの話によると、ほうほうのていで逃げのびたホセが「何とかポリ公に思い知らしてやりたい」と復讐心に燃え、とっさに思いついたのがタバコの火—馬の鼻—警官の転落という喜劇じみた〝ささやかな抵抗〟だったのだ。

この話を聞いていた者は思わず吹き出してしまったが、実はこうしたエピソードの中にスペイン学生の置かれている「自由のない状況」がありありと描き出されており、知らず知らずのうちに「絶大な権力」への抵抗精神を身につけてきた学生たちの立場を思い知らされるのである。いうまでもなく「絶大な権力」とはフランコ政権であり、独裁者フランコそのものである。スペインの学生運動が最初から最後までぶつかる底知れぬ厚い壁は、このフランコ独裁政権であり、すなわち「独裁国」というワクをはめられた中での運動である点において、他の自由諸国とは全く異なる条件下にあるのだ。

スペインの学生運動が表面化したのはまだわずか四、五年前からのことである。血でぬられた悲惨なスペイン内乱（一九三六—三九年）で勝利を得たフランコは、以来三十年間徹底



警官隊とにらみあうマドリード大学生（1967年1月27日）

した独裁体制のもとで厳しく思想、表現、報道などの自由を制限し、軍隊、秘密警察、カトリック、大地主などをたくみにあやつりながら一貫したフランコ路線を歩み続けてきた。当然、大学の自治や集会、結社の自由も禁止され、学生たちが〝自由〟を求めて示威行動する余地は全くといっていいほど残されていなかったのである。しかし徐々にだが、ヨーロッパの自由思想がピレネー山脈を越えて保守王国スペインにも浸透し始め、一方内乱以降、地下にもぐった反フランコ分子の動きが再び活発になり出したことなども原因して、遅ればせながら学生運動が表面に現われるようになってきた。

まず一九六七年（昭和四十二年）二月、スペイン全土に学生騒動の嵐をまき起こす発火点となったマドリード大学のデモを目撃した日本人記者留学生の「取材メモ」から――。

六七年一月二十七日（金）　「労働者がストをやるらしい」とのウワサを聞き込み、早朝カメラを持って大学都市にかけつける。広大な大学構内（学生数約四万人）のあちこちに警官の姿。学生デモを警戒しての出動だ。「何か起こるぞ」と直感。正午すぎ、文学部の学生数十人が「ポリ公は大学から出ていけ」、「自由」、「団結」と叫びながら警官隊に投石を始めた。武装警官がジープでどんどん送り込まれ、学生側も文学部から、法、経、理各学部などに波状的に広がってその数は約千人。学生が唯一の武器である石を投げれば、警官も遠慮なく投げ返す。女子学生は石運びに専念。しかし大半の学生は後方でヤジ馬的観戦だ。警官がひとたび反撃に出ると学生たちはクモの子を散らしたように校舎に逃げ込む。正面衝突もなければ集団デモ行進もない全く初歩的な抵抗運動だ。独裁国での「自由のない学生運動」を痛感する。

午後三時すぎ警官隊（約二十人）はついに法学部の正面ドアをたたきこわして校舎内に踏込み、約十

分後、逃げ込んだ学生を次々と引っぱり出す。手錠をはめられた学生に警棒の雨がふりかかる。なぐって黙らせる警官の〝暴力〟に警察国家の暗い一面を見た思いだ。

午後の授業は中止、大学は警官に占拠された形となった。構内電車、バスで続々と登校する午後の部の学生に「授業はない、帰れ、帰れ」と警官が警棒片手に追返す。「カメラに注意しろ」と学生が耳もとでささやく。この種の忠告は、これで五人目だ。見つかれば記者であろうと外人であろうと情け容赦なく逮捕だという。午後五時すぎ、ついに一警官に「なにをうろうろしている。大学は立入り禁止だ。早く帰れ」と無理矢理に電車に押込まれた。幸いオーバーの下に隠したカメラには気付かれない。構内は学生の姿もまばらで、警官だけが電車の窓から目についた。この日の逮捕者約二十人。

午後八時、大学近くのターミナル、クアトロ・カミノスへ。「労働者と学生がやるらしい」とある学生が教えてくれたからだ。夕食前の散歩を楽しむ市民にまじって警官の姿が目立つ。秘密警察も多いことだろう。二人以上が立止まって話していると「何しているのだ。さっさと歩け」と追いちらす。「絶対に集会などさせない」という徹底粉砕の高姿勢。目に見えない無気味なにらみ合いが感じられる。突然三十人ほどの学生が「独裁は去れ！　自由がほしい！」とシュプレヒコールしながらデモり出した。一分とたたぬうちに警官が警棒をふりかざして襲いかかる。逃げまどう学生、散乱する靴、女子学生の悲鳴。そして、恐怖の目で見守る市民。「内乱のころを思い出した」と老婆がおびえながら語っていた。

一月二十八日（土）　午後一時すぎ文、理の学生約百人がさっと集まって〝反乱のノロシ〟、道路にバリケードを築いて交通をストップさせた。かがり火をたいて気勢をあげる。市電の運転手も乗用車

の女性もあきらめてバックしたり、う回したりして学生とのトラブルは避けている。文句をいえばたちまち投石されたり車をひっくり返されるからだ。スペイン人は血の気が多い。二十分とたたないうちに警察のジープ到着、一目散に校舎に逃げる学生。再び投石合戦が始まった。文、経、医など各学部前で散発的な〝市街戦〟が展開され出した。ボンバ（爆弾）と呼ばれる放水車が登場。

一月三十日（月）　学生騒動は全学部に広がった。授業はほとんどなし。走るジープやバス、乗用車に投石の雨が降り、ガラスの破片が路上に散乱。きょうは騎馬警官隊も登場して構内を走りまわっている。午後三時すぎ騎馬隊も含め二百人余りの警官隊が大学食堂（二千人収容）に突入、窓ガラスは破られ、テーブルや食器はメチャメチャ。騒動に全く関係のない学生も乱闘に巻込まれケガ人続出、惨たんたる情景に唖然とし、激しい憤りに身が震える思い。学生と見れば見さかいなくなぐりかかる警官の暴挙をまた目のあたりに見せつけられた。構内電車やバスに乗っている学生も全部降ろされ、厳重な身体検査。石を持っている者は即刻検挙。次は食堂の隣の農学部が急襲され、逃げ込んだ学生を追って五階建の同校舎は教室、実験室はいうに及ばずトイレ、机の下までも調べあげて一時間後には一人残らず検挙して護送車へ。背広は破れ、血まみれの学生も多い。スペイン人学生数人とこの手荒い警官踏込み事件を建物から一〇〇メートルほど離れたところで見ていたが、突然、後ろから左肩を思い切りなぐりつけられた。振向くと、警棒をふりかざした警官がまさにジープから降りて襲いかかろうとしている。とっさに「逃げるんだ」とスペイン人学生に腕を引っぱられ、無我夢中で車の通れない芝生の道を選んで逃げまくる。「問答無用」で逮捕される直前の危機だった。警官に追われて逃げるのも、こんどの騒動で通算五、六回になるが、捕われそうになったのは初めて。さすがに心臓が

ドキドキした。

一月三十一日（火）　ついにマドリード大学全学閉鎖に至る。「三日間大学を閉鎖する」と簡単なビラが各学部の正面入口にはられ、学生たちは「とうとう閉鎖になったか」とニガ笑いしながら帰っていく。

二月三日（金）　情勢まだ落着かず、大学の閉鎖解除は無期延期となる。構内は人気もなく、デモ騒動もカゲをひそめてきた。

二月十日（金）　大学再開。各学部の入口には守衛と私服の秘密警察が立ち、学生を一人ずつ写真つき学生証明書でチェックし、証明書のない者は入れない。別に文句をいう学生もいない。抵抗し切れない学生の悲しさ。スペインの学生運動の限界をはっきり見た思い――。

弾圧に消えた騒動

このマドリード大学の紛争をきっかけにスペイン全土で一月末から学生騒動の嵐が吹き荒れ全国の大学（国立十二、私立一）のほとんどがその渦中に巻込まれ、授業放棄、学生と警官の衝突が続発した。バルセロナ大学では全学部が官憲の弾圧、学園侵入に抗議して授業放棄し学生集会を開くと、大学側は報復措置として全学生一万二千人を除籍処分にし、二月一日から自動的に無期限閉鎖。試験シーズンを控えた各大学はこのような状態で、大学の機能をほぼ完全に喪失してしまった。

二月後半になって騒ぎは一応収まり、三月の声を聞くと、学生たちはセマナ・サンタ（聖週間）のバカンスにうかれ出し、年中行事といわれる学生の〝二月騒動〟も何ら問題の解決を見出さないまま、うやむやのうちに終わってしまった。この間に逮捕された学生は三百人近くに達し、その何割かは起訴されて治安裁判の手にかかり、刑が確定して、現在もなお暗い投獄生活に明け暮れている者もいるはずである。そして、少なくとも表面上は弾圧によって学生の〝暴走〟を押え切ったフランコ体制側の勝利に終わったといえよう。

いま「年中行事」と書いたが、これは四、五年前から毎年一、二月になるとマドリード、バルセロナ両大学を中心にきっと学生運動が起こり連鎖反応的に広がっていくからであり、国民は「学生が暴れて何人逮捕された」という半官半民新聞のベタ記事に目を通しながら「また始まったな」と受けとめるからである。ただここで見落とすことの出来ない重要な点は年中行事の学生運動が確実に発生し、しかも年々その規模を拡大しつつあるという事実、さらにこれが徐々に緩和されてきた報道管制の影響で次第にくわしく国民に報道され、とくに若い労働者層に対し「現体制への不満」の刺激剤となりつつあるという点であろう。指導者が次から次へと逮捕されてもなおかつ新しい指導者が現われ運動を盛りあげているということは、すでにかなり強固な地下組織が根を張り、フランコ独裁体制では押え切れない段階にまで達していることを感じさせずにはおかない。「逮捕されること」への恐怖心はスペイン国民の九九パーセントまでが持っているはずである。逮捕―投獄という〝前歴〟はこの国においては決定的にその人間の存在価値を否定する。就職、結婚はもとより、家族すべてに対しても恐怖におののく生活が訪れることは火を見るよりも明らかだからである。

しかし、悲惨な内乱の体験を持たない学生たちは、西欧民主主義思想を身につけ出し、自由を求めて身の危険は覚悟の上でレジスタンス運動に踏み切って大衆行動への綿密なプランをたてつつあるのだ。もちろん、その数はまだ微々たるものに過ぎないが、自由とは相容れないフランコ体制への一種の〝挑戦〟であるだけに深刻である。

それでは彼らが当面求めている〝自由〟はどんなたぐいのものか、その運動の目的は何に集約されるのか。先にも述べたとおり彼らのデモ騒動の性格はきわめて不明確で、プラカードで要求事項を明記するのでもない。ただ自然発生的に、しかもかなり組織的に騒ぎを大きくしているのである。しかし、学生らのナマの声や学生新聞（もちろん無許可）、一般新聞論調などから判断すると、まず「自由な学生運動」の達成であり、その根底に横たわっているものは、「学園の自由」、「言論、集会の自由」なのである。彼らは学内で自由に集会も開けないし、抗議デモもできない。各学部の掲示板には大学印の押されたビラしか張れないし、許可印のないのは授業中にさっさとはずされてしまう。それでも学生たちは抗議集会を試み、口伝えやビラ配布で集会の場所と時間を学生に知らせるのだが、成功した例は少ない。どこにもぐり込んでいるかもしれない秘密警察の〝追手〟を恐れ、人の少ない集まりには「顔を見られては」という恐怖感から集会場所の前を素通りしてしまうためである。

したがって、こうした集会やデモを企画する〝指導者〟の素顔はきわめて把握しにくく、どうしても地下活動的な性格を帯びるのである。一九六七年（昭和四十二年）二月の全国的な学生運動の背景には、非合法ながらも一般学生にかなりの共鳴を呼んでいる「自由シンジケート連合」の躍進ぶりがあげられている。この組織は一月末バレンシア大学で全国学生大会を開こうとしたが大学側の拒否にあ

い、一時は学内に籠城する作戦にも出たが、これも警官の導入で難なく片付けられ、全国大会は不発に終わった。しかし、全国にあの大規模な〝二月騒動〟を波及させ、スペイン内外の関心を集めた点では、組織の根強さと一般学生の動員率の高さを印象づけ、「大きな収穫を得た、一歩前進だ」を彼ら自身高く評価している。

この他にも地方によっていくつかの違った秘密結社的な学生組織があるが、その数は定かでなくきわめて流動的である。かなり組織固めが進んでくると、秘密警察の手で摘発されるのが通例で、逆の見方をすれば、首謀者が逮捕されても自然発生的に次々と新しい組織が芽生え、欲求不満のかたまりのような一般学生をリードして騒ぎを拡大できるところに、スペイン学生運動の一面での強さと特質があるといえよう。

元来この国の学生運動はスペイン特有のシンジケート（官製組合で経営者、労働者も含めた全国民層に広がる唯一の組合）に編入されＳＥＵ（学生シンジケート）の制限内でしか活動出来ないという大ワクをはめられており、これにあきたらない学生たちはＳＥＵから離れた「自由な独立した学生組合の結成」を求め続けているのである。

折しもフランスの〝五月革命〟は、スペイン学生運動にかっこうの運動目標を与えた。

五月十八日の外電は、マドリード大学で約五千人の学生が「大衆デモクラシー」、「労働者と学生の連帯」などのプラカードを掲げて経済学部の音楽会場になだれ込み、数回にわたって公演を中断させ、そのあと千二百人が「フランコ反対」を叫んで大学構内をデモし、約三十人の学生が逮捕されたと報じている。

また同三十一日には同大学周辺の学生寮を数千人の学生が占拠し、「フランスは始めた。今やわれわれも行動すべきだ」との大字幕を張って警官隊と対決した。こうした動きに対し、フランコ政権は六月七日、「政府の承認を得たうえでの自治会を設立できる」旨の法令を発布したが、学生たちは、「また官製組合が出てきた」と一斉に反発している。

注目すべきは、一九六八年五月以降のスペインの学生運動には、「フランコ政権反対」の声が公然と表に出、きわめて高姿勢の対決戦術に方向転換したのが読みとれることである。一九六七年まではフランコ個人が得ている国民の支持の高い比率（七―八割がフランコ支持）を考慮し、明確な形での「反フランコ」は避けてきたが、ことしになってついに独裁体制そのものを否定する、政治色の濃い運動になったのだ。

学生運動の一指導者は「フランコが死んだら？　そう、再び内乱の危機だねえ。もうわれわれの地下組織は全国に広がり、マドリードの指示で一斉に行動出来る体制にまでなっている。毎日秘密会合を市内某所で開き、大学で勉強出来ない自由政治思想やマルクス思想を勉強している。見つかれば直ちに監獄行きだろうねえ。だから残念ながら会合場所は教えられない。もちろん著名な大学教授や役人さえもそうした秘密結社に含まれているんだよ。いくら弾圧しても弾圧し切れないところまで来てるんだよ。私は内乱を知らないが、内乱当時の反フランコ分子がまだまだ地下にもぐっている事実には驚いたねえ。彼らは三十年越しのフランコへの復讐を心に誓っているのだ。われわれ若者は自由を求めて、どんどん前進するのみさ」と豪語していた。

われらに光を！

東ヨーロッパ諸国

チェコ民主化運動の口火

「われわれに〝光〟を与えよ」――チェコの首都プラハ郊外のストラホフにある学生寮の構内は、数千人の学生たちが部屋から飛出し、シュプレヒコールを唱え、騒然たる雰囲気に包まれた。学生たちは手に手にローソクをかざし、広い構内を熱にうかされたようにデモ行進した。学生たちのかかげる無数のローソクは闇夜を照らし出した。学生たちの胸には「やむにやまれぬ」といった熱っぽさが満ちていた。ローソクの行列は、ついに構内からプラハ市内へ。学生の一人が叫んだ。「ノボトニーのところへ、大統領官邸へ行こう」。プラハ市の入口で学生たちを迎えたのは、完全武装の警官隊だった。警棒が容赦なく学生たちに振りおろされた。血にまみれた学生指導者数十人がまたたく間に逮捕された。学生たちは後退した。ストラホフ学生寮の〝反乱〟は鎮圧された。昨年十月三十一日の寒い夜のことであった。ノボトニー政権下ではじめて勇敢に街頭に抗議のデモを起こした学生の反乱は挫折した。しかし、彼らのかかげたローソクの光はチェコの民主化を告げる〝かがり火〟であった。

ストラホフ学生寮はノボトニー政権下の経済不振を象徴する〝縮図〟だった。寮はスパルタキアード（世界青年スポーツ友好祭）の宿舎用に建設された建物で、数千人が宿泊できるマンモス寮だ。だ

が、寮の施設はお粗末きわまりない。電灯さえつかない部屋も数多くあった。そのうえ、停電は日常茶飯事、三、四時間も続くことさえあった。落着いて勉強するどころではない。学生たちがローソクを手に街頭に飛出したのも、いつ復旧するかわからない、あまりにも長い停電に勘忍袋の緒を切ったためであった。

このストラホフ学生寮の〝ローソク・デモ〟はノボトニー政権が極秘にしたにもかかわらず、チェコ国内の大学生、教授、インテリの耳にそれとなくはいっていった。そして、事件の真相が伝わり、警官隊の血の弾圧ぶりがはっきりするにつれ、ノボトニー政権のスターリン主義的警察政治に抗議する学生、知識人らが各地で集会を開き、逮捕学生の釈放と弾圧責任者の謝罪を要求する決議文をノボトニー政権に突きつけた。しかし、ノ

ユーゴでも“若い力”がベオグラード大学の学制改革を叫んで気勢を上げ、警官隊と対峙した（1968年6月UPI）

ボトニー大統領、クドルナ内相ら保守派党官僚はこれを完全に無視し、旧態依然たるスターリン主義的方法でこれらの抗議運動を抹殺しようとした。しかし、学生、知識人の抗議はなおも執拗に続けられた。ノボトニー政権はとうとう十二月中旬、あいまいな謝罪文を発表せざるをえないハメに追込まれた。ついで一九六八年（昭和四十三年）一月三日から開かれたチェコ党中央委総会は、チェコの新時代を迎える画期的な会議となった。総会は白熱した討議の末、ノボトニー第一書記を解任し、進歩派のチャンピオンであるドプチェク・スロバキア党第一書記をノボトニー氏の後任にすえた。十五年間にわたってチェコの最高権力をほしいままにしてきたノボトニー第一書記をひきずりおろす原動力となったのは、学生を中心とする知識人たちだった。だが、ノボトニー氏は党第一書記の地位を失ったとはいえ、いぜん大統領職に留まり、学生、インテリなど進歩勢力への巻返しを狙っていた。学生たちの民主化、自由化要求は高まりこそすれ、ホコを収める気配は全くみられなかった。

学生たちはノボトニー大統領を頂点とする保守派への追撃を開始した。追撃の武器は〝言論〟だった。言論の力で保守派の罪状をあばくことだ。各大学での学生集会は活発化し、党、政府の要人を招いての討論会はすべてテレビ中継され、チェコ国民の眼前に公開された。討論会には知識人、進歩派党員など〝改革派〟の人々だけでなく、学生、知識人に反感を持っていたといわれる労働者代表も招き、チェコの将来をめぐって自由な討論が展開された。四月上旬、プラハ市内での学生と党指導者との討論会では五千人以上の学生が会場を埋めつくし、討論はえんえんと夜明けまで続き、学生たちは疲労の色もみせずチェコの民主化、自由化を情熱をこめて語り合った。

こうしたアラシのような民主化運動の高まりのなかで、チェコ内務省は、ストラホフ事件について

正式な謝罪文を発表した。「われわれは古い政治路線に従い、学生たちの正当な抗議行動を勝手に弾圧してしまった」――社会主義国家の治安の最高機関が学生たちに〝謝罪〟したのだ。ストラホフの学生たちの〝勇気ある行動〟は報いられた。

そして、保守派の中核ノボトニー大統領もついに大統領を辞任し、完全失脚に追込まれた。一国の独裁者が学生、知識人たちの〝言論〟の力で退陣させられたのである。学生たちのつぎの目標は、新しい大統領の選出に向けられた。新しい大統領には、ソ連にも受けのよいスボボダ将軍（退役）が有力視されていた。しかし、学生たちは独自の大統領候補をかつぎ出した。それは学生たちに人気のあるチーサシ前教育相だ。学生たちは、ドプチェク新第一書記ら改革派が推薦したスボボダ将軍を拒否し、チーサシ擁立に立上がった。学生たちはまたも街頭に進出した。「チーサシを大統領に！」――学生たちはこう叫びながらドプチェク第一書記の陣取る党本部へ押しかけた。結局、スボボダ将軍がチェコ新大統領に選出された。が、学生たちが社会主義国家のもとで独自の大統領候補を立ててデモ行進したことは歴史的なことである。〝プラハの春〟――チェコの学生たちは、民主化運動のアラシをこう叫んだ。春風はやがてチェコ全土に雪どけをもたらし、全チェコ人の胸を暖め始めた。

ゴムルカ政権の屋台骨を揺する

チェコに春をもたらしたプラハの学生たちの息吹きに、ワルシャワの学生たちは敏感に反応した。

六八年三月八日、ワルシャワ大学工学部の学生二千人は学園内で逮捕学生の「処分撤回」を叫んでデモを行なった。警官隊は学園内に踏み込み、抗議デモを弾圧した。学生たちは警官隊の学園乱入に憤激、翌九日、隊伍を組んでワルシャワ市中心部へ向け学園を出た。警官隊の振るう警棒に投石で渡り合い一歩もひかなかった。十一日、学生たちは三たび街頭に進出、警官隊の暴力に激しく抗議した。この時のデモには一般市民も多数参加し、その数は一万人以上に達した。党機関紙トリブナ・ルードは事態の深刻化に懸念を表明した。しかし、学生デモはワルシャワからクラコウ、ポズナニへと野火のごとく広がった。学生たちは「プラハの学生たちに続け」と叫んだ。ポーランド全土で約二十万人の学生がデモに参加した。

このデモの発端となったのは、きわめて単純な事件だった。一月三十日、ワルシャワ大学工学部の学生が十九世紀ポーランドの詩人アダム・ミツキビッチの劇「ジャージィ（祖先）」を上演した。この劇は学生、知識人たちに大いにうけた。劇の内容は、ツァー（ロシア皇帝）の圧政に苦しむポーランド民族の姿を描いたものだ。たとえば、こんなセリフがあった。「モスクワがわれわれに送ってきたのはなんだネ。ロバ（バカ者の意）とスパイだけさ」。ここで学生たちは腹をかかえて笑いこける。ポーランド国民、とくにインテリ層の根強い反ロシア感情が古典的作品の再上演を機に頭をもたげたものである。

この反ロシア劇の上演が対ソ関係へのはね返りをもたらすのを恐れたゴムルカ政権は、上演一週間後、この劇の上演を禁止したうえ、上演責任者の学生二人を退学処分にするという強硬態度を打出した。ゴムルカ政権はこれより先、政治風刺の喜劇映画『ホールド・アップ』（手をあげろ）など〝前衛的映画〟の上映も禁止していた。ゴムルカ政権のこの文化整風は学生、知識人たちの反ゴムルカ感情を次第に高ぶらせていた。十二年前、ゴムルカ第一書記が時のフルシチョフ・ソ連党第一書記と息づまる対決を乗越えて、ポーランドの自主性を守りえたのも、民主化、自由化を要求するポーランド国民の絶大な支持があったからだった。とくに、学生、知識人たちは、ゴムルカ政権の誕生を〝わが世の春〟到来と熱狂的に歓迎した。しかし、十二年後の今日、ゴムルカ第一書記は東欧におけるソ連派ナンバーワンの地位を次第に強固なものにし、国内では自由化の手綱を引締める傾向を強めつつあった。自由化のかつてのチャンピオンの人気は明らかに下降線をたどっていた。

政府の強硬態度に直面した学生たちは、戦術転換して大学構内に戻り、学園を占拠して授業ボイコット、試験拒否のすわり込みを行なった。この学生の行動には教授たちも同調、各大学で教授立会いのもとで抗議集会を開き、①逮捕学生の釈放　②学生を弾圧した責任者の処罰　③市民としての自由と勉学の自由　④大学の自治の尊重、などの決議を政府に突きつけ、この要求が認められるまで、学園内のスト態勢は解かないとの決意を表明した。沈黙を守っていたゴムルカ第一書記は三月二十日、ワルシャワ市党委員会の集会で演説し「学生たちの背後には帝国主義者、シオニスト集団がひかえ、ポーランドの社会主義体制の転覆を狙って学生たちの不満を利用している」と激しい調子で非難した。また、同第一書記は「民族主義文化の過度の尊重はポーランドの社会主義的精神と矛盾するものだ」として、学生、知識人たちの自由化要求に一定のワクをはめることを明らかにした。このゴムルカ演説をきっかけに、政府は巻返しにでた。学園内ですわり込みを続けている学生たちを実力で解散させる強硬方針を打出し、学生たちの要求は、いっさい認められないばかりか、指導者たちは一人残

らず逮捕された。追及の手は知識人たちにものび、ワルシャワ大学の世界的マルクス主義哲学者アダム・シャフ教授も逮捕されたという。

プラハの学生たちに呼応して自由化に立上がったポーランドの学生たちは、こうして、ゴムルカ政権の強圧政策に屈した。ポーランドに〝ドブチェク〟の登場を期待した闘いは挫折した。彼らは再び沈黙し、学園にもどった。しかし、ポーランドの学生運動の敗北は、新たな勝利の始まりとなる〝潜在力〟を秘めているのだ。

チトー大統領を謝罪させる

チェコからポーランドへと東欧共産圏を揺さぶった〝若い波〟は、東欧で最も自由化のすすんだ国、ユーゴの首都ベオグラードにも波及するという予想外のコースをたどった。一九六八年(昭和四十三年)六月三日、ベオグラード大学は約千人の学生によって占拠された。学生たちは、大学に押寄せた警官隊と市街戦さながらの衝突を繰返した。学生たちは大学から市街へと行動のワクを広げた。学生たちは、「寮生活の食糧不足」、「設備の不完全、奨学資金の不足」など学生生活の不満から「社会的平等の拡大」、「失業の解消」など政治的スローガンまで叫び、市民に訴えた。彼らのなかには、「赤いブルジョアはもうたくさんだ」といったプラカードを掲げるものもいた。ユーゴ内務省は学生たちの抗議行動の意外な激しさにびっくりし、集会禁止令を発表して鎮圧の構えをみせた。

しかし、党、政府指導者たちは、暗に学生たちの抗議を正当なものと認めるかのような発言を行なった。たしかに学生の掲げたスローガンはユーゴ社会主義の矛盾を反映したものがほとんどであった。ユーゴは東欧共産圏のトップを切って自由化を推進し、利潤導入による新経済制度は着々と成果をあげているかにみえた。しかし、企業の自主性拡大、徹底した独立採算性、労働者の企業経営参加などユーゴ型社会主義は、一方で企業格差の拡大、不良企業の倒産、企業間の激しい競争といった矛盾をもたらした。そして、優秀企業の党員労働者は〝労働貴族〟と化し、企業の成績を上げようと新規採用を制限したため、大学卒業生の就職難は深刻化していた。こうした学生たちの不満がうっ積しているなかで六月二日、ベオグラードで開かれた工場労働者主催の音楽祭に入場を断わられた学生たちの怒りは、新興の〝労働貴族〟にぶつけられ大規模な抗議行動へエスカレートしていった。

沈黙を守っていたチトー大統領は六月九日、テレビ、ラジオを通じて演説し、学生たちの要求を全面的に認め、大学制度の改革に努力すると約束した。学生側はこの演説を好感をもって迎え、抗議行動を中止した。チトー大統領は教育改革のみでなく、社会的不平等、社会不安の解消などユーゴの直面している政治的、経済的分野の改善策を近く党中央委で検討すると発表、さらに「私に問題解決の力がなければ、私は辞任する」と悲壮な決意を述べた。ベオグラード大学生の実力行動は、御大チトー大統領さえ謝罪させ、ユーゴの若き世代の力量を内外に実証してみせた。

反体制イコール新体制支持

スカルノ追放と学生

一九六六年一月十五日、日ごろは静かなジャカルタ郊外のボゴール宮殿のまわりを、約二万人の学生が取巻いた。学生たちは、当然解散されていなければならないＰＫＩ（インドネシア共産党）がいまだに解散されていないのに業をにやしていた。政情不安を反映した天井知らずのインフレが、彼らの不満に油を注いだ。宮殿を取巻いた学生は「ＰＫＩを解散せよ」、「無能の経済閣僚を追い出せ」と気勢をあげた。

宮殿の中ではスカルノ大統領（当時）が百人の閣僚を集めて閣議を開いていた。学生の代表二十人が閣議の傍聴を許されて参列した。万事強気のスカルノ大統領は、一時間五十分にわたって得意の熱弁を振るった。

「経済政策に文句があるなら、学生でも誰でも大臣に任命する。ただし六ヵ月たって経済情勢が変わらなければ懲役刑、悪化していたら死刑の覚悟がなければならない。私の閣僚を非難するのは、私自身を非難することになるのだ」

学生たちは、もはやこのような〝脅し〟にのらなかった。彼らには軍部の反スカルノ派がついていた。何よりも生活の好転を願う国民がついているとの自信があった。相変わらずの強気の大統領演説を不満として学生が宮殿の中に押入ろうとした。これをみて親衛隊は威かくの発砲を行なった。ついに学生のなかにこれまでタブーだった「スカルノ反対！」の叫びをあげる者が出た。

インドネシアの学生が〝スカルノ神話〟に挑戦の姿勢を示したのはこの日が初めてであった。以後、学生たちは一年余りにわたる長い〝スカルノ追放劇〟の主役をインドネシア軍部とともに演じることになる。

ＫＡＭＩ（インドネシア大学生行動戦線）、ＫＡＰＰＩ（インドネシア青年・生徒行動戦線）の名は、この時から一躍、世界中の注目を浴び、スカルノ体制打破のにない手として、とくに西側諸国で大きな称賛をかちとった。

ジャカルタで行なわれた反スカルノ集会（1966年8月20日）

インドネシア学生運動の中心となったＫＡＭＩは、九・三〇事件発生後まもない一九六五年十月二十五日に結成された。九・三〇事件は、いうまでもなくＰＫＩが起こした反陸軍クーデターとされている。事件の真相、性格はなお不明の部分が多いが、結果的にスカルノ大統領が反乱側につかなかったため、ＰＫＩが〝反国家的行為〟を行なったと非難されるようになったのは必然の成行きだった。

事件をひき起こしたＰＫＩの解散を求める声が全国的に広がり、そのための各種団体が相ついで設立された。ＫＡＭＩもいわばこうした運動の一環として生まれ、ＰＫＩ、ＰＮＩ（インドネシア国民党）系の大学生組織を除く大学生の団体がこれに加わった。ＫＡＭＩは全国各地に置かれた支部の下に、各大学が単位組織として加盟する形をとっている。従来の学生団体は各政党の系列別に組織されるタテ割り方式をとっていたため、とかく横の連絡を欠いていたが、ＫＡＭＩは横のつながりを重視する組織方法を採った。

ＫＡＰＰＩは、ＫＡＭＩより少しおくれ六六年二月に、中学生、高校生、青年団体の統一組織として結成された。一般にはＫＡＭＩの弟分とされているが、政党との結びつきがきわめて強い青年団体が加わっているので、政治的色彩はむしろＫＡＭＩより強い場合がある。しかも直情的な中、高校生をかかえているため、活動は過激に走りやすい。ほかに職業専門学校の生徒を中心に組織されたＫＡＰＰＩ（学生行動戦線）があるが、規模はＫＡＭＩ、ＫＡＰＰＩほど大きくなく、活動もＫＡＰＰＩほど激しくない。

これらの学生団体の運動はスカルノ体制打破の点からみるならば、ほぼつぎの四つの時期に区切ることができる。

① 九・三〇以後、六六年一月の反ＰＫＩキャンペーン期＝これはＰＫＩ解散をスカルノ大統領に迫った時期である。しかし、スカルノ大統領がＰＫＩ解散に関する政治的決定を一日延ばしに延ばし、かえって強圧的態度に出たため、スカルノ大統領の真意を学生が疑い始めた。

② 六六年一月から三月までの経済闘争と親共閣僚追放要求期＝三月十一日、スカルノ大統領の権限委譲が実現するが、これに先立ち、スカルノ大統領がＫＡＭＩの解散、ナスチオン国防相の解任など学生の要求に全く対立する措置に出た。学生は軍部との共闘体制を確立し、連日激しいデモを繰広げ、犠牲者も出して、ついにスカルノ追い落としの一歩となる権限の委譲を実現した時期である。

③ 六六年三月から九月までのスカルノ路線修正要求期＝政治的にスカルノ体制と軍部体制の二元政策が行なわれ、スカルノ大統領がなおも執拗な抵抗を見せたため、学生はスカルノ大統領が態度を根本的に修正するよう求めた時期。実質的にはスカルノ追放のねらいを持っていたとみられるが、軍部内でスカルノ大統領の最終的処遇をめぐって穏健派と急進派の間で意見の食い違いがみられたため、学生運動も分極化の兆がみえてきた。

④ 六六年十月から六七年三月までのスカルノ追放実現期＝十月から十一月にかけ、学生はスカルノ辞任を初めて公式に打ち出し、激しいデモを行なった。軍部はデモを弾圧する態度に出、ＫＡＭＩ本部が海兵隊員に襲撃される事件も起こったが、十二月にはいってスカルノ大統領がスハルト政権批判の強硬発言を行なったため、穏健派が主流となっていた軍部内でもスカルノ発言に反発する力が強くなり、六七年三月の暫定国民協議会でついにスカルノは大統領の地位を実質的に追われることとなった。学生は国会、暫定国民協議会内でのスカルノ追い落としの一翼をになわされ、その代表を国

会、暫定国民協議会に送り込み、体制支持活動に変質してゆく動きを見せる。しかし、同時にこれにあきたりない回教右派グループを中心とする過激派は散発的ながら独自の動きを示すようになった。

以上の動きをみると、インドネシアの学生運動がスカルノ追放、スカルノ体制打破に果たした役割の大きさがわかるが、同時に学生運動がいかに軍部と密接な調整の下で進められてきたかもわかるであろう。

学生と軍部の密接な調整の全容は明らかでないにせよ、学生組織はつねにスカルノ追放の各段階で「軍部の方針支持」をうたってきた。大きな動きがみられる前になると必ずといっていいほど学生グループと軍関係者の行き来が激しくなった。有力な高級将校の家ではデモ学生のための炊き出しもやっていたし、バンドンの町ではシリワンギ師団（インドネシア陸軍切っての精鋭師団）がバンドンのＫＡＭＩ、ＫＡＰＰＩにトラックを提供しているという話は公然の秘密であった。

スカルノ追放における学生運動の初期の段階では、両者の結びつきはそれほど組織だったものではなかった。六六年三月十一日、スカルノ大統領が、スハルト陸軍司令官に一部権限を委譲した事件の直後、学生はスカルノ派の一部閣僚を軟禁したが、学生はこれら閣僚を陸軍内で最も戦闘的なＫＯＳＴＲＡＤ（陸軍戦略予備機動師団）に引渡した。このことは軍部が決してまとまっていたのではないこと、学生が学生の立場からみて頼りになる部隊とは常に連絡を保っていたことを示している。

しかし、六六年七月になると、陸軍首脳の間で「スカルノの政治的骨抜き」をねらった〝統一司令部〟のようなものが生まれたといわれ、この中には、各種「行動戦線」との調整担当官も含まれている。これが主に学生組織との連絡に当たったと思われ、おそらくこれ以後かなり組織的調整活動が

進められたのではないかとみられている。学生が不便な地方でのオルグ活動に軍部の飛行機を利用していた例は枚挙にいとまがない。なかには西イリアンまで空軍の輸送機を利用して、オルグ活動を行なったグループもあった。

ナスチオン暫定国民協議会議長（陸軍大将）は六六年はじめの学生団体の活躍から「六六年組」ということばをインドネシアの若者におくった。ＰＫＩの解散要求に始まり、経済闘争を経たのち、スカルノの権限縮小に果たした若者を、一九四五年（昭和二十年）の独立宣言当時に活躍したアダム・マリク外相らの「四五年組」、さらにさかのぼって独立闘争を始めたスカルノ、ハッタ（前副大統領）らの「二〇年組」になぞらえたのである。軍部も学生の爆発的なエネルギーがなかったならスカルノ追放があれほどうまくいったかどうかは疑わしいことをこのことは認めている。

アラブ連合の学生運動

これに対し、アラブ世界、特にアラブ連合の学生運動は激しい反英デモなど、変革の外郭団体となっても起爆力となったためしはない。アジア諸国では、独立前、独立後を問わず、全体として組織された労働者、農民の結集が可能であり、その中でエリートとしての学生が運動をリードする余地があった。しかし、中東諸国では、独立前には全国民的な民族統一戦線がアルジェリアを除いて全くなかったし、独立後もアルジェリアを含めてアラブ諸国の組織的エリート、あるいは組織力を持つエリー

トは、西欧植民国家によって近代的訓練をほどこされた軍の少壮青年将校であり、学生の介入する余地は全く与えられなかった。

アラブ連合もまたその例外ではなかった。ナセル大統領の革命目標は腐敗した王宮政治を打倒し、その背後にある英軍を追放して強力で自由な民主国家をつくり上げることであった。しかし、革命の原動力となった軍部と、いぜんとして遊牧と部族主義と回教の中に沈滞していた国民大衆との間には大きなギャップがあった。国民大衆は革命にほとんど関与しなかったし、また革命政権も、基本的には民衆の無関与をそのまま維持する政策をとった。というより、ある意味では政治への国民参加が不可能なほど大衆はいまだに貧困にあえいでいる、といった方がよいかもしれない。

ナセル政権はほとんどが軍人で占められている。そして、経済、工業などのテクノクラート部門は、必然的に旧富豪階級出身者を閣内に入れるよりほかに手段はなかったのである。

国民連合を改組してASU（アラブ社会主義連合）という単一政党をつくり上げ、政権支持の基盤を固めようとしたナセル大統領は、幾度かの政変のたびにこれらテクノクラートを閣外に追いやりながら、再び迎え入れざるを得ないというジレンマに陥っている。

農民参加のキャッチ・フレーズの下に国民議会に出席した農民代表は、ほとんど政治に無関心で、結局、一部政治指導者の利権にからんだ〝なぐさみもの〟になっている。

事実、ナセル政権の高級官僚は、その地位の強化と利潤の獲得に熱意をそそぎ、工業部門の開発計画は、資料の割当て、人員配置、輸入ライセンスなどすべて国家統制であるため、担当官の間には黒い霧のウワサがいつも立ち込めている。

こればかりではない。地方においても地主や富農は村長や村会議員に横すべりし、旧地主階級の復活を監視するASU支部員との間に血なまぐさい事件がいまだに発生している。

六七年自殺したアメル副大統領を長とする封建制度撲滅委員会は、最近名目だけは他人名義にした土地が、実質的には大地主のものであることを発見したASU支部員が、大地主のやとった殺し屋に殺されるという事件に出くわしている。こうした例は、全部で六千村を数える地方農民の間でキリがないくらいである。

つまり、国民の大多数は権力者の〝なぐさみもの〟の地位から抜け出していない。こうした土壌から新鮮な破壊力に富んだ青年の、そして、学生のエネルギーは出て来にくい。大学生は、むかしの富豪階級に代わって登場した高級軍人や、いまだに残存する高級テクノクラートの子弟が大部分を占めている。

さらに社会主義陣営の共通の風土としての全体主義的傾向が一応定着した国では、学生たちの頭が、きわめて〝画一的〟に馴らされていることも否定出来ない。カイロ大学、アイン・シャムス大学、アメリカン大学、アシュート大学、アレキサンドリア大学など約六万の学生は五二年（昭和二十七年）以来、ナセル支持のデモを行ない、英軍撤退のデモには積極的だったが、反ナセル・デモは六八年二月、六七年の中東動乱敗戦の責任を問う空軍将校を主とする裁判の判決を不服として、ヘルワンの工場労働者と共闘したデモだけである。この時は言論の自由、社会主義をもっと民主化しようという要求が提出され、ナセル治政十六年の〝ウミ〟が破れ出たという批判がなされたが、三月三十一日、ナセル大統領がアクション・プログラム（行動計画）を発表する演説を行なうと、カイロ大学の学生委員

長、ハッサン・アミド君は壇上にかけ上がってナセル大統領にキスするなどの支持を見せ、その後、反ナセルの学生運動はピタリと止んでしまった。もともと二月のデモ自体、ユーゴのそれと同じく、体制内の批判デモともいわれていたのであるが、アラブ連合では時折り、〝ナセルを支持するか〟、〝土地改革について〟などのアンケートを学生に対して行ない、否定的回答をしたものは、卒業後の就職が希望と反対のところに回されるなどの無言の圧力がかけられているといわれる。

さらに社会主義政策の一つとして失業者を一人も出さない原則があり、大学卒業者は、政府が成績によって配置するため、ある部門などは人が余り、雑談に時をすごして給料をもらっている。こうした状態では、学生は無気力になるばかりか、遊んで給料をもらえる現体制を支持するものが多くなるのは当然であろう。言いかえれば、こうしたムチとニンジンで政権批判を懐柔しているとの見方もできる。ただ、対イスラエル問題では、学生の突き上げがナセル大統領を強硬にしている点は見逃せないが、この問題はアラブにとっては原則の問題であり、学生だけでなく国民全体の突き上げがナセル大統領の行動を制約しているといえる。九〇パーセントを占める農民と労働者の結集が、かなり自由になるまで、ア連合の学生運動はあくまで体制内運動にとどまるであろう。

この傾向は黒いアフリカ諸国のきわめて少数の大学生しか存在しないところではいっそう強く、たとえ学生運動が行なわれても、それは現在のところ学生の自発的なそれとは異なり、政権内の反対勢力を倒すための黒幕にあやつられた運動にしかすぎない。

そして、この波はスチューデント・パワーが変革のエネルギー源、起爆力であったアジア諸国にも次第に押寄せている。中国の紅衛兵が毛沢東主席による劉少奇国家主席らの実権派打倒に使われた例

は記憶に新しいが、六〇年、李承晩政権打倒の主役を演じた韓国の学生運動は、朴正熙現政権内では六七年、大統領選挙の不正を非難する学生デモが起きた以外そのエネルギーをほとんどみせていない。その代表的な例は、スカルノ政権打倒にあれほど大きな役割を果たしたインドネシアの学生運動である。

体制内運動が多い新興国

インドネシアの学生団体は運動の最初から「反共、汚職追放、経済再建」の三つを大目標としていた。反共の点についていえばPKIの解散をかちとり、PKIに関係があったと学生たちが思っているスカルノの政治的生命を断つことが出来た。

しかしスカルノ追放があまりにも大きい事業であったため、一般の学生の間には目的を達したとの感じがでていることも否めない。次に手がけるべき汚職追放、経済再建の大目標は、スカルノ体制打破だけで得られるものではなく、本気でこの問題に取組むにはこれまでも共闘してきた軍部と衝突、弾圧されることを覚悟でやらなければ出来るものではない。ともすると、経済再建のスローガンが華僑排斥という表面的な行動に走らせ、かえって一般の反発を買うスキを与えている。

もちろん、学生団体のなかには、経済再建問題に真剣に取組もうとする試みもみられる。KAMIは六六年と六八年の二回、経済問題に関する大がかりなシンポジウムをインドネシア大学で開催し

た。しかし、その中からＫＡＭＩはじめ学生団体が一つの方向を見出したという兆候はない。

もっとも、学生運動がそうした方向に進むには、あまりにも情勢が変わりすぎてきた。元来、ＫＡＭＩ、ＫＡＰＰＩにせよ、そのほかの「行動戦線」を名乗る団体にせよ、反共・反スカルノのスローガンの下に集まった、いわば「統一戦線」であった。反共、反スカルノが実現してみると統一戦線内部にヒビの入るのは、あるいは避けがたいことだったかもしれない。

学生団体はスカルノ追い落としには統一された力を発揮しえたが、そのあと次第にいくつかの弱点をみせるようになってきている。その一つは、学生団体がスハルト政権の下で体制内に組入れられつつあることだ。六七年一月、国会の再編、欠員補充が行なわれた時、ＫＡＭＩは十三議席を獲得、さらに六八年二月の増員の際、ＫＡＭＩなど行動戦線グループは六十七人増員のうち三十五人分を得た。学生がその代表を政策決定機関に送り込むと同時にスカルノ体制打破当時にみせたエネルギーを失い、自由な批判力すら手放しつつある。たとえば、インドネシア国会が議員用に無税の外車輸入を計画しようとしていることが六七年末に明らかにされると、それまでこの外車輸入計画に反対していなかった学生代表国会議員は、〝率先して〟外車の割当てを辞退せざるをえなかった。また、六八年一月、ＫＡＰＰＩは「米よこせ」デモを行なったが、四日後には政府からの働きかけで中止になった。国会の場における学生議員の考え方は政府の動きをチェックするという野党的なものではあっても、その言動に歯切れの悪さを伴うようになったことは否めない。

第二の問題点は、学生団体の間に分裂的傾向が見えてきたことである。この傾向は、すでに学生運動がスカルノ追放の段階にさしかかっていた六六年後半において見られたものであった。その傾向

は、スカルノ追放実現、学生団体の体制内組入れとともに少しずつ大きくなっているとみられている。

さきに述べたようにＫＡＭＩ、ＫＡＰＰＩなどの全国的学生団体は、スカルノ時代の政党を中心とするタテ割りの政治組織の要素をその結成にあたって持ちこんだ。その結果、反共・反スカルノ統一戦線の意義がなくなると、現政権に不満な政党の影響力に左右されるグループが学生団体内にも見られるようになった。具体的にいえば、回教穏健派のナフダトル・ウラマ、カトリック党、キリスト教（新教）党の系統をひく学生はスハルト政権を支持しており、批判をしつつもこれに協力していくという体制内改良を目ざしている。

これに対し、回教過激派に属するマシュミ党の系列下にあるＨＭＩ（回教学生連盟）派は、最終的には回教を国教とすることを目標としているとされ、そのために学生団体の主流を占める穏健派とは必ずしも軌を一にしていない。

要するにアジア・アフリカの学生運動は概して体制内運動が多い。インドネシア、韓国など末期に達した政権に対する反体制運動ではあるが、その時にはすでに胎動を開始している新体制に同調しているのだ。そこには国の独立、絶対的な生活水準の向上という国家としての最高の目標がある。しかし、その限りにおいてアジア・アフリカのスチューデント・パワーが再び爆発的威力をみせる可能性は常にある。なぜなら、彼らは軍人と並んでその国の最高の知的エリートだから。

付表・年表

最近の反日共系全学連の街頭闘争一覧

※各派の指導理念と戦術

※学生自治会派閥一覧

※戦後の学生運動（年表）

（※印は横組み）

〔最近の反日共系全学連の街頭闘争一覧〕

（昭四三・六・三五現在）

事案名（発生年月日）	動員数	検挙人員 総人員	検挙人員 うち反代々木系学生	負傷者数 計	負傷者数 警察官	負傷者数 学生	負傷者数 第三者	「群衆」数	備考
二・二六砂川基地拡張阻止闘争（四三・二・二六）	六〇〇	一〇	九	三〇	二五	五			
五・二六砂川基地拡張阻止闘争（五三・五・二六）	一、四三〇	二	二	三	三				
五・二八砂川基地拡張阻止現地闘争（五三・二・八）	三、一〇〇	五三	五三	一七五	一四五	二八	二		
砂川基地拡張阻止闘争（含エンタープライズ寄港反対）（六三・九）	九〇〇	九	九						
佐藤首相訪韓阻止闘争（六三・一〇）	二五〇	六	六	六	六				
七・九砂川基地拡張阻止現地闘争（七三・九）	二、六〇〇	四七	四一	一六五	一三九	一八	八		バトカー二台、警備車三台、ガラス等破損、UW・携帯受令機各一台奪取、民家ガラス破損
佐藤首相訪台阻止闘争（九三・七）	四〇〇	一四	一三	一〇	一〇				
佐藤首相第二次東南アジア訪問阻止事件（第一次羽田事件、山崎博昭君が死亡）（一〇・八）	二、五〇〇	七四	六一	死亡一 八九六	八四〇	死亡一 五二	五	一、〇〇〇	警備車全焼七台、全壊二台、放水車全壊一台、その他の車両破損三九台、警備艇破損一隻、民間車五台、ガラス三一枚破損など六三件

一〇・二一ベトナム反戦（国際統一行動）闘争（一〇・二一）	一〇、五〇〇 うち東京 三、四〇〇	一三 うち東京 一〇	一三 うち東京 一〇	八	八		一四	四、〇〇〇	警察車両二一台小破、派出所窓ガラス、個人装備破損、民家の窓ガラス、車両、瓦、けい光灯、角材、ブロック持出しなど一〇四件		
佐藤首相訪米阻止事件（第二次羽田事件）（一一・一三）	三、三〇〇	三四八	二七二	六六三	九六四	八四	一四	四、〇〇〇	（佐世保現地）市民病院、民家の窓ガラス破損、丸太、角材などの盗難（約二〇〇本）屋根瓦、タクシーボデー凹損など、計四二件（外務省）同省玄関ガラス破損		
飯田橋事件（四三・一・一五）	三〇〇	一三一	一二九	四三	二九	一三					
平瀬橋事件（一・一七）	八〇〇	二七	二六	一五五	八六	五一	一八	二、〇〇〇			
一・一八佐世保橋事件（一・一八）	七五〇	一五	一五	八三	五七	三三	四	一、三〇〇			
日比谷事件（一・一八）	三〇〇	一〇八	一〇五	一四	一三	一					
一・一九佐世保橋事件（一・一九）	六五〇	九	八	七二	三八	二八					
外務省庁舎侵入事件（一・一九）	三〇〇	八九	八九								
一・二一佐世保橋事件（一・二一）	四〇〇	一九	一九	一九八	一五七	三二	一〇	二、五〇〇			
二・二〇王子闘争（二・二〇）	八七〇	三六	三六	一三	一三				ウインド、窓、ガラス戸シャッター破損計四件 三件一二枚		
二・二六成田事件（クロロピクリンようの劇物で、警察官一人ひん死の重傷）（二・二六）	九五〇	三三	一四	七七二	七八	四三	六	二、〇〇〇	指揮官車一台大破など、市役所、民家の窓ガラス破損、自動車の損傷三台など一七件		
二・二七王子闘争（二・二七）	五七〇	六	五	四五	四三	一	一		ガラス戸など九枚破損計三件		
三・三王子闘争（三・三）	五〇五	四九	四六	一三	八	三	二		ウインド、窓ガラス五枚、ジュークボックス一台、ハカリ温度計二〇本、野菜類商品など、計九件		

三・八王子闘争（学生の投石により通行人が一人失明）（三・八）	一、五五〇	一五七	一四四	三三五	二〇三	二四（労組員）五	三、〇〇〇		垣根塀、瓦、看板灯、窓ガラスなど二九件、病院側ガラス一〇九枚、照明灯、敷石五三〇枚、王子本町派出所内破損		
三・一〇成田事件（三・一〇）	一、六〇〇	一九八	一四四	四七七	一七七	一四九（反対）二一（同盟）三〇	五、〇〇〇		市役所、民家の窓ガラス、街灯、瓦、ネオン、京成成田駅庁舎破損など五五件		
三・二八王子闘争（三・二八）	八〇〇	一八一	一五九	六三四	五七二	四六	一七	三、〇〇〇	基地内ドア、窓ガラス、机、電話など、王子駅前、王子本町、飛鳥山各派出所、王子駅王子郵便局窓ガラスなど破損		
三・三一成田闘争（三・三一）	一、〇〇〇	五二	三八	四四	二四	一九	一	三、〇〇〇	警察宿舎、市役所窓ガラス、フェンス、民家窓ガラスなど破損		
四・一王子闘争（バトカー転覆放火、通行人一人死亡）（四・一）	六三〇	一〇六	八〇	死亡 五一〇 一	四四九	一八	死亡 四三 一	三、五〇〇	塀、シャッターガラス戸など三四件、派出所の破壊、放火		
四・二王子緊急行動（四・二）	四八〇	九	〇					二、〇〇〇	滝野川署窓ガラス一五五枚、門灯二個、交通事故表示板など破損		
四・八王子闘争（四・八）	四九〇	二八	三三	二四	二四			三、〇〇〇	牛込署馬場下町派出所ガラス電話線破損、広報マイク持去り		
四・一五王子闘争（四・一五）	八一〇	四三	二五	一四九	一三四	二	一三	二、〇〇〇	塀、シャッター、看板、ガラス戸など二二件		
四・二一ベトナム反戦闘争（四・二一）	一、三五〇	一	〇								
四・二六ベトナム反戦・沖縄闘争（女子学生一人重傷）（四・二六）	八、二四〇 うち東京 三、三〇〇	一二六 うち東京 九六	一三三 うち東京 九三	七五	七三	二					
四・二七沖縄闘争（四・二七）	三、二四〇 うち東京 七三〇	二八 うち東京 三三	二〇二 うち東京 一九七	五	四	一					

〔各派の指導理念と戦術〕　（昭43.4 現在）

派閥名	基本路線	革命方式	組織論（革命勢力）	学生運動の性格	当面の闘争戦術	国際路線
民青同派	反帝反独占	反帝（反米）反独占の人民の民主主義革命→社会主義革命（二段階革命論）暴力革命を否定しない。	労農同盟を基礎とする民族民主統一戦線	民族民主統一戦線への結集をめざす「民主化運動」（「みんなの学生運動」）	日常要求闘争と政治闘争との結合 日共系の統一行動に参加し、整然と行動するが、時には彼我の力関係を考慮にいれつつ違法行動に出る。	中ソ対立の国際共産主義運動内にあって「自主独立」を標榜。国際学連の代表権回復。
革マル派	反帝反スターリニズム	世界プロレタリア革命の一環として反帝反スタ社会主義革命武装革命を主張	労働者階級を中心とするプロレタリア統一戦線	小ブルジョアである学生が自分自身を革命の主体（プロレタリア）に変革させていく運動（「革命的学生運動」）	政治闘争第一主義の立場に立つ。過激な街頭行動、イデオロギー闘争が特色。街頭行動では三派系とトラブルをおこしながらも同一行動をとる。	中ソを両極とする国際共産主義運動を批判し、新たな反戦インターナショナルの結成を推進。国際学連に対しては、三派全学連の正統性を主張。中ソ批判の第3勢力として活動。
中核派		同上	同上	基本的にはマル学同革マル派に同じ（「戦闘的学生運動」）	政治闘争第一主義の立場をとり、しかも、大衆闘争至上主義的傾向をもつのが特色。社会党系の統一行動に参加するが、労働者の階級闘争を触発するため、激烈な街頭行動を連発させる。	国際共産主義運動とはほとんど無関係。ただし、一部には第四インター（四トロ派）や中共（ML派など）との連帯傾向がみられる。国際学連に対しては、三派全学連の正統性を主張。
四トロ派						
社青同解放派	反帝	反帝社会主義革命 武装革命を主張	同上	階級闘争の一環としての政治運動（「戦闘的学生運動」）		
社学同 統一派		同上	同上	階級闘争の先駆としての政治運動（「戦闘的学生運動」）		
社学同 革命労働者派		同上	同上	階級闘争の前衛としての政治運動		
社学同 ML派		同上	同上	（統一派に同じ）		
社青同「構革派」「協会派」	反独占	反独占社会主義革命 議会を通じての平和革命を主張	反独占統一戦線	大衆的な反体制運動	日常要求闘争と政治闘争とを結合。 社会党系の統一行動に参加。	
民学同フロント派	反独占	反独占社会主義革命 平和革命の可能性を主張	同上	「平和と民主主義、学生生活向上」をめざす政治運動（「層としての学生運動」）	学生層全体による平和擁護の政治闘争と学生生活擁護の闘争とを結合。社会党系の統一行動に参加。	ソ連路線支持

四・二八沖縄闘争（四・二八）	一、八七〇 うち東京 一、三三〇	六九 うち東京 四六	五四 うち東京 五〇	三〇	三〇				
第三九回メーデー（五・一）	三、三二一 うち東京 一、七〇三	三五	三五						
五・一三日米安保協議委開催反対統一行動（東京）	昼 九一〇 夜 七四〇	三	二						夜の部の半数以上は昼の参加者が合流
ベ反戦、沖縄奪還、教育三法粉砕統一行動（五・一七）	一、一〇〇	八	八						
ベ反戦、反安保五・一九市民集会（五・一九）	三〇〇	四	四						
教育三法粉砕デモ（五・二三）	二五〇	三	三						
五・三〇ベ反戦沖縄闘争（五・三〇）	四、五三〇 うち東京 二、五三〇	四八 うち東京 四一	四四 うち東京 三七						東京の検挙学生以外の四名はフーテン
六・一ベ戦即時中止ベ平連行動（六・一）	一、一〇〇	二	五						
六・三全学連（社青同）無許可デモ（六・三）	一五〇	九	八	一			一		
六・七米機九大墜落抗議アスパック粉砕（六・七）	五、二〇〇	二四〇 うち東京 二一〇	不明	一五四	一五三	一	一		
六・一五前夜行動（六・一四）	八、三五〇 うち東京 四、一五〇	一八	不明	一六	一六				動員数には反戦青年委、一般学生をも含む
六・一五全国行動（六・一五）	一三、七一五 うち東京 九、〇六〇	五三 うち東京 二九	不明	二六	二三	四			右に同じ

〔学生自治会派閥一覧〕

（左ページから続く） 全学連関係自治会数 451　自治会総数 750（昭和 43.3　治安当局調べ）

系統	区分	派閥名	指導政治団体（略称）	学生団体 名称（略称）	学生団体 指導者	機関紙・誌 ○印は政治団体発行のもの	自治会（加盟・結集）	勢力比 ①	勢力比 ②	備考
代々木系	民青同派		日本共産党（日共）宮本顕治	全日本学生自治会総連合（代々木系全学連）	全学連委員長 田熊 和貴（東 経 大） 〃 副委員長 岩村 智文（東 北 大） 〃 〃 池田 雄平（東 教 大） 〃 〃 三好 利幸（阪 教 大） 〃 書記長 家野 貞夫（京 大） 〃 書記次長 近藤 紘彦（一 橋 大）	○学生新聞 祖国と学問のために 全学連	東大（教養，文，教育，法，工，理，薬，農），東教大（文，教，理，農，体育），東経大（一部，二部），都立大（A，B，深沢），法大（教養，二法，二文，二経，二社），早大（教育，一法），東洋大（一法，一経，二部），明学大（文，社，法，経，二部），北大（教養，文，教育，法，経，医，薬，工，農，理，獣，看護，工教），東北大（教養，教育，文，法，経，医，農，理，看護），岩手大（教養，学芸，工，農），静岡大（文理，教育，教養，農，工），信州大（教育，文理，医，農，繊維，工，教養），京大（法，経済，理，農，工，薬，教育，教養，看護），立命大（一法，一経，一産，二法，二経，二文，二理工，二経営），名大（教養，教育，文，経済，医，工，法，理，農，看護），金沢大（教育，医，教養，薬，理，工），九大（法，工，薬，文，経済，理，教養）など 316 自治会	① 42.2 ② 70.1	正式加盟 91大学 205自治会
反代々木系	トロツキスト系	マル学同 革マル派	革命的共産主義者同盟全国委員会革命的マルクス主義派（革共同革マル派）	（全学連系）（三派系全学連）自治会数 76 勢力比 ① 10.1 ② 16.8 日本マルクス主義学生同盟革マル派（マル学同革マル派）	全学連委員長 成岡 庸治（元 早 大） 〃 副委員長 根本 仁（元北学大） 〃 〃 佐々木道知（愛 知 大） 〃 書記長 木下 宏（東 大） 〃 書記次長 横川 克弥（法 大）	○解放 ○共産主義者 全学連書記局通信 スパルタクス	早大（一文，一商，二文，二商），学習院大（文，理），国学院大（一部，二部），日本女子大，国際キリスト教大，岐大（農，工），愛知大（豊橋一，二部），金沢大（文），福教大，熊大（教育），熊商大，鹿児島大（教養，文理，教育，水産） 22自治会	① 2.9 ② 4.9	指導政治団体の「革命的マルクス主義派」の名称から「革マル派」と呼ぶ
		中核派	革命的共産主義者同盟全国委員会（革共同前進派）本多延嘉	日本マルクス主義学生同盟中核派（マル学同中核派）	全学連委員長 秋山 勝行（元横国大） 〃 書記次長 山口 紘一（法 大） 〃 常任中執 青木 忠（広 大） 〃 〃 吉羽 忠（東 工 大） マル学同委員長 谷 翰一（横 国 大）	○前進 ○共産主義者 中核 学生戦線	法大（一法，一文，一経，経営），東工大（理，工），東薬大，横国大（工，経済，横浜），群大（医），高経大，山梨大（教育），都留文大，京大（医），京都繊維大（繊維），立命大（一経営），三重大（学芸），広大（教養，教育，東雲，医），鳥取（教育），九大（農），西南大，秋大（鉱山），東学大 27自治会	① 3.6 ② 6.0	機関紙「中核」の名をとり「中核派」という
		四トロ派	日本革命的共産主義者同盟（第4インター日本支部）関西派，BL派など	国際主義共産青年同盟（青年インター） 社青同国際主義派	湯川 順夫（元 京 大）	○世界革命 青年インター 武装	大阪経大（一部），関学大（商） 2 自治会	① 0.3 ② 0.4	「第4インター」派を略し「四トロ派」という
		社青同解放派		全国反帝学生評議会連合（反帝学評）	全学連書記長 高橋 孝吉（早 大） 〃 中執 渡木 繁（〃） 〃 〃 北村 行夫（〃） 反帝学評議長 三井 一征（東 大）	革 命	電通大（一部），早大（一政経，二政経，二法），明大（経営），都立商短大，宇都宮大（教育），関学大（法），横国大（教育），京都外大，山形大（文理） 11自治会	① 1.5 ② 2.4	社青同（社会党系）とのつながりは断たれている
		社学同 統一（ブント）派	共産主義者同盟（共産同戦旗派）高橋良彦	日本社会主義学生同盟全国委員会（社学同統一派）	全学連副委員長 成島 忠夫（静 大） 〃 〃 蒲池 裕治（同 志 大） 〃 中執 久保井拓三（中 大） 社学同委員長 村田 能成（早 大） 書記長 山下 浩志（東 大）	○戦旗 ○共産主義 反帝戦線	明（一法，一政経，一文，二政経，二文，和泉，農，工），東大（医，経済），中大（昼），関東学院大，東海大（湘南），専修大（生田），京大（文，工教），京都府医大（本校，花園），立命大（一理工），和歌山大（経済，短大），同志社大（法，経済，文，商，工，神，二法，二経済，二文，二商），東医歯大，東医大（学友会） 32自治会	① 4.8 ② 8.0	従来の「統一委派」と「マル戦派」とが合流統一したので「統一派」という 機関紙から「戦旗派」ともいう
		ML派	共産主義者同盟マルクス・レーニン主義者同盟派（共産同ML派）	日本社会主義学生同盟ML派（社学同ML派）	三戸部貴士（横 国 大） 畠山 嘉克（東 海 大）	赤 光	東京水産大，東海大（代々木）立正大（一部，二部） 4自治会		
	社青同派		日本社会党 勝間田清一	日本社会主義青年同盟学生班	社青同学対部長 立山 学	青年の声	佐賀大（経済，理工，教育，農），大分大（経済） 5 自治会	① 0.7 ② 1.1	「協会派」「構革派」がある
	構造改革系	フロント派	統一社会主義者同盟（統社同）山田六左衛門	社会主義学生戦線（フロント）	兵庫県学連（反代々木系）委員長 糸魚川至郎（神 戸 大）	○平和と社会主義 フロント	法大（一社），慶大（全塾，日吉），新潟大（医，歯，長岡），立命大（一文），神戸大（文，理，法，経済，経営，工，医，農），関学大（社），富山大（一般教育） 17自治会	① 2.3 ② 3.8	機関紙「フロント」の名から「フロント派」という
		民学同派	共産主義労働者党 内藤知周（志賀派を含めて計上）	民主主義学生同盟（民学同）	大阪府学連（反代々木系）委員長 西村 正彦（阪 大）	○統一	大阪大（教養，文，法，理，医，工），大阪教育大（天王寺），大阪市大（一部），大阪工大（一部），島根大（農），岡山大（医，教育，農，文） 14自治会	① 1.8 ② 3.1	旧共青同（「社革系」）を「民学同」に解消した「こえ派」と二派がある
	その他		日共左派・アナなど				花園大 1 自治会	① 0.1 ② 0.2	
その他			中立ないし所属派閥不明で，いわゆる「全学連」とは関係ないとみられるもの				東京芸大（音楽），早大（一理工），日大（法，文理），上智大，日医大，横市大（医），山梨大（工），大阪大（経済，薬，歯，基礎工），大阪産大（経，工），関西大（文，商，工，社），近畿大（法，商，薬，農，二部）など 299 自治会	① 39.0	

注 1　「全学連関係自治会」とは，いわゆる「全学連」各派と関連をもつ自治会で，関連のない自治会（中立，不明）は除

2　勢力比①は自治会総数に対する勢力比，勢力比②は「全学連関係自治会」数に対する勢力比を表わす。

3　「反帝」とあるのは反帝国主義，「反独占」とあるのは反独占資本主義の意味。

4　その後の各自治会の役員，構成人員は若干の変動もある。

昭和38年

5月	日韓会談反対，原潜寄港反対運動はじまる。
7日	米バーミングハムで学生，市民による黒人の差別要求デモ激化。
6～8月	サイゴンの学生，市民がゴ・ジン・ジェム政権打倒デモ。
8月28日	黒人差別撤廃で学生，市民20万人のワシントン大行進。

昭和39年

1月8日	パナマ運河地帯で国旗掲揚問題から学生と米警備軍衝突（パナマ対米国交断絶へ）。
2月3日	ニューヨークの黒人学童46万人，差別反対で同盟休校。
3～5月	韓国で日韓会談反対デモ続発。
11月	サイゴンで学生，仏教徒の反政府デモ激化。
11月	原潜阻止。横須賀デモ盛上がる。
12月	反日共系全学連七派が都学連再建を協議し，再建機運高まる。

昭和40年（1965）

2月19日	北京で100万人の反米デモ。
17日	慶大で授業料値上げ反対の全学スト，反日共系全学連が椎名訪韓阻止デモ。
4～6月	韓国で学生，市民が日韓条約反対デモ。
4月17日	ワシントンで米軍によるベトナム侵略反対デモ（以後続発）。
5月21日	日韓条約反対，ベトナム反戦の一日共闘が実現。
7月	都学連の提唱で全学連再建大会へ。
9月6日	ソウルの大学生，日韓条約に反対して無期限ストへ。
12月	高崎経大，都留大の紛争。

昭和41年

1月	早大紛争はじまる（授業料値上げ反対と学生会館問題），150日間つづく。
	インドネシアで学生が物価高に抗議するデモ。その後，反スカルノ・デモに発展。
2月	横浜国立大，東京理大などで学園紛争。
2月19日	早大生，大学本部を占拠，警官隊導入して入試を行なう。
3月	言語問題でインドの学生，市民がデモ。
	世界各地で学生のベトナム反戦デモ激化。
5月	国際キリスト教大で紛争。
8月18日	中国文化大革命の立役者となった学生組織〝紅衛兵〟，北京の文化大革命祝賀会に初めて姿を現わす。
11月	明大紛争，中大紛争はじまる。
12月17日	全学連三派が統一「三派全学連」となる。

昭和42年

1月25日	医学生インターン闘争，東大医学部ストへ（3月25日解決）。
2月	北京で学生の反ソ・デモ最高潮。
2月16日	反戦委員会が砂川へ座りこみ。
5月28日	三派全学連，砂川闘争へ，48人検挙。
6月	東京学芸大，東京教育大学などで紛争。
7月9日	第二次砂川闘争。
20日	東京都の交通料値上げに反対，三派全学連が都議会に乱入。
8月22日	紅衛兵，北京の英大使館焼打ち。
9月14日	法大で総長カンづめ。
10月8日	第一次羽田事件，三派全学連が街頭へ進出。
11月12日	第二次羽田事件。

昭和43年

1月14日	米原子力空母「エンタープライズ」入港阻止の佐世保闘争（21日まで）。
18日	中大で学費値上げ発表（34日間の紛争はじまる）。
29日	東大医学部，無期限スト突入。
2月	佐賀大，東京女子大，東北学院大などで学園紛争。
20日	王子の米軍野戦病院反対で三派全学連のデモが荒れる（王子紛争の幕あけ）。
26日	成田へ三派全学連が出動（成田紛争の幕あけ）。
3月	東大，広島大，関学大などで紛争のため卒業式は分散卒業式となる。
	ポーランドで学生の反政府デモ高まる。
22日	学生，知識人の民主化運動により，ノボトニー・チェコ大統領辞任。
4月1日	王子デモで通行人一人死亡。
11日	西独のドイツ社会主義学生同盟理論家ドチュケ〟そ撃されて重傷。これを契機に西独学生の反政府運動激化。
12日	東大入学式を強行。
13日	日共系全学連，国際学連に加入。
14日	日大の20億円不明金問題表面化，日大紛争のきっかけとなる。
5月18日	早大生が総長選挙を阻止，大学側は郵送投票方式に切りかえる。
27日	日大全学共闘会議が学園民主化要求闘争をはじめる。
30日	フランス学生のデモ，労働者のゼネストにより〝5月革命〟最高潮に達し，ドゴール大統領議会を解散。
7月7日	参議院議員選挙。
7月8日	三派全学連が中核派と社学同などの反中核派とに分裂。

昭和28年

3月	護憲遊説運動はじまる。
6月17日	ベルリン危機。市民，学生のデモ隊と警官隊が衝突し戒厳令施行。ソ連軍戦車出動。
19日	パリの学生，ローゼンバーグ夫妻死刑執行抗議デモ。
8月15日	自治庁「学生の選挙権は郷里に置くべきだ」と通告，全学連が反対闘争へ。
11月11日	全国学園復興会議（京都）。京大生150人が荒神橋で警官隊と衝突。
12月5日	イランの学生，英国との国交再開に反対の行動。

昭和29年

5月	原水爆禁止署名運動はじまる。
6月3日	京大で滝川学長をカンづめ。

昭和30年（1955）

5月	全学連，教育二法案反対闘争。
7月27日	日共六全協，左翼冒険主義を自己批判し，両者の対立は決定的となる。
8月20日	仏領モロッコとアルジェリアで暴動，死者700人を越す。
9月2日	全学連「活動家のクラス復帰」を指令。

昭和31年

4月17日	コミンフォルム解散。
18日	各地で原水爆禁止運動盛上がる。
5月30日	第1回アジア・アフリカ学生会議（バンドン）。
10月11日	砂川基地強制測量で学生がピケ，排除の警官隊と乱闘。
10〜11月	ブダペストを中心に，ハンガリー全土で市民，学生による反ソ暴動。ナジ首相の要請によりソ連軍が出動し鎮圧。

昭和32年

5月24日	国府官吏を射殺した米兵の無罪判決に抗議する市民，学生が台北でデモ。
7月8日	砂川測量で全面激突，学生，労働者400人が基地へ突入。

昭和33年

5月	反戦学同が路線転換，社学同結成へ。全学連第11回大会で日共系を締出す。
6月1日	全学連中執派，日共本部へ乱入大量除名される。
20日	ボン，パリで学生ら，ナジ元ハンガリー首相の処刑に抗議するデモ。
10月	警職法反対運動広がる。
12月	日共除名学生が共産主義同盟（ブンド）結成へ動く。

昭和34年

3月27日	米英で核実験反対デモ。

4月28日	安保反対第一次統一行動。
5月15日	全学連安保阻止行動，5000人参加。
6月17日	全学連第14回大会，ブンドが主導権にぎる。
10月30日	安保改定阻止全国スト。
11月7日	安保阻止第八次統一行動，全学連は国会突入。リーダー清水丈夫，葉山岳夫に逮捕状が出て東大学内籠城事件に発展。

昭和35年（1960）

1月16日	岸首相の渡米阻止で羽田デモ，全学連は空港ロビーを占拠。
3月16日	全学連第15回大会。日共系を実力で締出す。
4月	全学連反主流派（日共系）は都自連結成へ。
19日	韓国の反政府デモ暴動化，5市で戒厳令（李承晩大統領を辞任に追い込む）。
26日	ブンドと革共同は連合して国会陳情。
5月14日	安保反対国民会議が非常事態宣言。
19日	安保強行採決。
6月10日	ハガティー事件（主として全学連の日共系学生）。
15日	全学連デモ，国会構内へ乱入。樺美智子さん死亡。
18日	安保自然承認。
7月7日	三池争議支援の350人が警官隊と激突。
10月	ブンドが分裂し，全学連主流派の分裂騒ぎつづく。
11日	韓国ソウルの学生1万人が，4月政変で学生に発砲した警察の責任者に対する判決を不満としてデモ。一部国会に突入。
11月3日	右派学生の日本民主主義学生連盟が発足。

昭和36年

3月22日	韓国で反共特別法，デモ規制法反対の学生，市民2万人が集会，警官隊と衝突。
4月5日	ブンドの一部と革共同が合流，マル学同をつくる。
5月30日	政治暴力行為防止法案，各派が反対闘争をはじめる。
7月8日	全学連第17回大会，日共系は大会をボイコット，マル学同が指導部を独占。
9月	ソ連核実験問題で，春日庄次郎派が日共を集団離党，日共系全学連から構改派が分離。

昭和37年

2月16日	インドネシアのデモ隊，スラバヤの日本の領事館を襲撃。
7月	大学管理法反対闘争立上がる（構改派を含め反日共系三派が共同闘争を組む）＝法案は38年1月，国会提出見送り流産。
9月30日	米ミシシッピ州立大学の黒人入学問題で学生が軍隊と衝突。

〔戦後の学生運動〕

昭和20年 (1945)

8月15日	終戦。
10月7日	上野高女，水戸高などで学園民主化闘争盛上がる（12月にかけ，民主化闘争は法大，佐賀高，日大医学部予科，東京産業大＝現一橋大＝などに広がる）

昭和21年

2月	青年共産同盟第1回全国大会。
8月1日	プラハで国際学生連盟設立総会。
9月6日	田中文相，学生の政治運動禁止を声明。
12月13日	早大生が私学復興要求のデモ。

昭和22年

1月31日	2・1ゼネストに呼応して関東連合学生大会，40校20万人参加。
5月24日	中国の学生スト重大化。
9月ごろ	私大授業料値上げ反対運動高まる。
10月5日	ソ仏伊東欧9カ国コミンフォルム（欧州共産党情報機関）結成。
11月19日	全国国立大学自治会連盟結成。
12月13日	東工大，東商大などに学制対策実行委が出来る。

昭和23年

1月30日	ガンジー死去によりボンベイで学生ら暴動。
2月7日	早大で教育復興連合学生大会。
3月	国立3倍，私立2倍の授業料値上げに反対機運高まる。
24日	関東学生自治会連合総会で大学理事会法案に反対決議。
6月15日	全国官公立大学高専自治会連盟結成，教育復興闘争が激化。
8月初旬	各私大あいついで授業料値上げ発表。反対運動が激化。
9月18日	全日本学生自治会総連合（全学連）結成，国公私145校30万人を統一。
10月6日	文部省が「学生の政治運動について」次官通達を出す。全学連は反対闘争へ。
11月2日	全学連が教育防衛大会（東京）。
8日	北朝鮮で暴動。
12月17日	五高で大学理事会法案反対の無期限スト。

昭和24年

5月3日	大学法案反対で全学連が闘争宣言。
24日	全国140校でゼネスト。政府は大学法案を撤回。

7月19日	CIE顧問イールズ博士が新潟大で「共産主義者は教員に不適当」と講演。
9月21日	中華人民共和国成立。
22日	全学連，国際学連に加入。

昭和25年 (1950)

1月6日	コミンフォルムが日共を批判。
3月～	反戦学生同盟が発足，全国に組織の拡大はかる。
4月13日	九大で米帝国主義打倒をスローガンにスト。
5月2日	東北大生がイールズ講演を拒否。
5日	共産党が東大，早大，全学連書記局細胞の解散を指令。
16日	北大でイールズ拒否闘争。
6月3日	イールズ講演に抗議して全国25校がスト。10月にかけて法，東，早大などで反レット・パージ闘争盛上がる。
17日	早大の「レッド・パージ反対」大会に警官隊が乱入，143人検挙。
25日	朝鮮全面戦争に突入。
12月19日	京都円山事件。越冬資金獲得総決起大会の京大生ら100人が警官と乱闘。

昭和26年

2月	日共四全協，軍事方針きめる。
4月5日	朝鮮戦争反対の街頭宣伝で東大生16人検挙。
5月	石油国有化を主張するイランの市民，学生ら反英デモ。
6月30日	フランクフルトで社会主義インターナショナル結成大会。
8月26日	全学連中央委，平和，安保両条約に反対，全面講和の方針を打出す（11月にかけ両条約批准反対闘争盛上がる）。
11月12日	京大天皇事件。

昭和27年

2月20日	第一次東大事件。劇団「ポポロ」公演に私服警官が潜入。
3月18日	吉田首相「学園は治外法権にあらず」と言明，「曲学阿世」論争へ。
4月13日	全学連，破防法反対ストを指令。
20日	第二次東大事件，学内パトロールの警官が発砲。
5月1日	メーデー事件。
	この月，パリで反リッジウェー・デモ起こり，全国に波及。
8日	早大事件，警官隊が乱入，26人検挙。
6月10日	お茶の水女子大で寮監制・破防法反対スト。
25日	全学連第5回大会，反戦学生同盟解散を決議。
9月	内灘闘争がはじまり，京大，金沢大生ら参加。基地撤去要求強まる。
11月22日	イラクのバクダッドで，デモ隊が警官隊と衝突，全国で騒乱。

執筆者

◇世界に何をもたらすか
毎日新聞（東京）論説室　岡　久雄

◇日本の新しい流れ
毎日新聞（東京）社会部　部長・森丘秀雄、檜垣常治、牧孝昌、二宮徳一
篠原治二、吉野正弘、松尾康二、内藤国夫、原剛、前田明

◇欧米の旧体制を揺さぶる
毎日新聞（東京）外信部　部長・関口泰、石丸和人、安延久夫、小西昭之
北畠霞、近藤健、佐野真、江川昌、黒岩徹、細野徳治
毎日新聞（東京）内信部　滝本道生

スチューデント・パワー
世界の〝全学連〟――その底流
定価　三七〇円
昭和四十三年七月二十日　印刷
昭和四十三年八月　一日　発行
編　者　毎日新聞社
発行者　星野慶栄
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区竹平町　郵便番号一〇〇
大阪市北区堂島　郵便番号五三〇
北九州市小倉区紺屋町　郵便番号八〇二
名古屋市中村区堀内町　郵便番号四五〇
印刷・製本　凸版印刷

© 毎日新聞社　1968

■毎日新聞社の好評図書

昭和思想史への証言

毎日新聞社編

丸山真男・古在由重、宮沢俊義・小林直樹氏らの対談により、弾圧の厳しい〝暗い谷間〟の時代をつづる昭和前半の裏面史。四八〇円

歴史はここに始まる

毎日新聞社編

維新から現在まで、日本の歴史を進展、あるいは暗転させた国内外の事件の発生地六十を選出、その今昔を文と写真で描く。五五〇円

近代日本の争点

家永三郎
井上清他編

近代日本の進路は他になかったか。日清、日露戦争は果たして、国民の栄光につながったか。その可能性をさぐる。　上中各五二〇円

昭和経済史への証言

安藤良雄編著

昭和初年からの重大事件に決定的役割を果たした人物が「事実はこうだった」と昭和史の真相を語る。　上中各四八〇円・下五五〇円

教育の森

村松喬著

子どもたちは将来を背負うにふさわしく育てられているか。教育の場に山積する問題をとらえた書。　1～12集完結　各二五〇円

勇気あることば

毎日新聞社編

日本の一流人がかかげる金言集。魂をゆさぶり、勇気を奮い起こさせることばに出会ったら、人生はいかにすばらしいか。　四二〇円